
大岡城と崎田聖

小丹小菜栖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大岡城と崎田聖

【Nコード】

N2824I

【作者名】

小丹小菜栖

【あらすじ】

『俺と彼女の10カ月』の続編・大学編のお話になります。大岡城は大学生、女子の制服から解放された崎田聖は服飾の専門学校生に。城のライバル日野や「イケメンコンテスト」で優勝した登戸君も軽く城と聖を引っかきまわします。一応コメディで…。

第零話 10カ月目でバレました(前書き)

基本、学生物語でR指定ほどありませんが、主人公が男と男の恋人同士、ボーイズラブ、時々女装が含まれます。嫌悪感を懐かれる方はお気をつけください。

第零話 10カ月目でバレました

龍星高校を卒業して新学期が始まる少し前、聖は長かった髪をショートにした。

男にもどるのかと思っていたんだ…

が、顔がかわいいというか綺麗というか、髪を切ってもユニセックス的な

中性的なボーイッシュな女のような人間になってしまった。

一緒に手を繋いで歩いていても違和感のないことが俺には救いだ。

うほっ！

髪をショートにしたその日、サエドンを含め3Bの連中が集まり居酒屋にいた。

まだ未成年の俺たちは、お酒がNGのためサエドンも飲みたいビールを我慢して

ウーロン茶とジュースで盛り上がっていた。

聖は女子から、

「かつこいい〜」

「あ〜、聖ちゃんが男の子だったら絶対惚れちゃう！」

「私も！」

などと褒められ、まんざらでもない顔で照れていた。

「男の立場がなくなるぜ…」

「ボク、聖ちゃんになりたい…」

と、男子は女子を独り占めしている聖を見て全員落ち込んでいた。

残念ながら、3Bのみんなは、聖を男だとはまだ知らない。

体型がコロコロしている風ちゃんは、かいがいしく女の子らしくみんなのお世話をしていた。

「風ちゃんはいいい嫁さんになるよなあ。奥さんはやっぱ、あーい

う子がいいなあ」

などと、ニンマリ顔でボソツと言ったら隣の聖が、俺を見て両頬をつねった。

「どの口が、そんなことを言ってるのかな？ んん？ 城く〜ん」

「すみません…ただの一人言と思ってここは一つ流してください…」
聖に深く詫びを入れた。

「風ちやく〜ん、ウーロン茶　ちようだい〜」

「は〜〜い」

元気のいいかわいらしい声で答えると、ウーロン茶の入ったピッチャーを重そうに持って近づいてきた。

「あっ！」

風ちゃんが聖の横に座っていた健児の座布団にけつまずいて、ピッチャーの中のウーロン茶を聖の頭に全部かけてしまった。

「うわっつっ！！つめてー！！」

「は、早く脱げ！聖！風邪を引く！！」

まだ薄ら寒い3月後半、俺はあせって聖の着ていた服を脱がした。

「城！ヤバイって！！おい！！」

「あっ…」

視線を感じて周りをみた。

「……………」

みんなの目がパチパチと瞬きを繰り返し、点になったのはいうまでもない。

ついでにみんなの口もパクパクとしている。

服を脱がされた聖の体は、男がブラジャーをし、胸の部分はタオルの詰め物入りだ。

第一話 大学生になりました

俺は花の大学一年生になり経済学部 に在籍し、聖は服飾の専門学校に通っている。

聖の学校は8対2で女子が多く、入学式初日から女子のファンができたらしい。

そのことを嬉しそうに話す聖に少しムツとした。

そして、3月の終わりに帰国した聖の妹が龍星高校に通っている。

香港の中学を卒業した聖の妹・雅は、中学入学の時から高校生活は日本だと、

決めていたらしく、聖と一緒に住むことになった。

もう一人、龍星高校に編入した子がいる。

「イケイケメンメンコンテスト」で優勝した「登戸祐二」くん。

登戸くんからメールが来て、所属する芸能プロダクションが決まり、芸能活動をしなから学校に通うため、秋田から上京すると。

なぜ、龍星高校なのかというと、登戸くんの事務所の寮が龍星高校の近くらしく

編入が決まったようだ。

俺の通っていた高校で、俺の家も近いということメールすると、

「城くんは卒業していなくて淋しいけど、城くんの後輩になれたことはとてもうれしい

です（ハート）家も近所みたいなのも、超超超うれしい（ハート×10個）」

と、なぜかハートマークいっぱい返信が来た。

俺も若者だが、最近の若い男子はハートマークを使うのが流行っているのかと思っていた。

健児と日野は俺と同じ大学の法学部。

石田は国立の法学部に行った。

恩師のサエドンは1学年の担任になり、生徒の中に雅がいた。

大学生活が始まってまだあまり慣れない4月の半ば、健児と学食で待ち合わせをして
昼メシを食べていると、向かいに座っている健児の視線が俺の頭の上に向き顔を歪めた。

「どうした？健児……」

俺が振り向くと後ろには日野が俺を見下ろし立っていた。

「……なんか、用？」

そう言う俺の顔に一枚の紙を押し付けた。

「今度はコレだあああ！！！！」

「……だから……見えないって……」

2月に戦った「イケイケメンメンコンテスト」で聖を賭けて戦い、俺は審査員特別賞を

貰い、勝負は俺の勝ちだと思っていた。

が、日野は「特別賞は優勝ではないので勝負はチャラにする」と言い、

また新しい挑戦状を叩きつけて来た。

ちなみに日野はまだ聖を女だと思いついでいる。

「もういい加減にしてくれよ。こんな挑戦状貰っても、聖はおまえには渡さないよ？」

「いいから、次はコレだよ！城君！！」
また顔に紙を押し付けられた。
「だから…見えねーってば！！」

紙を奪い取り、見た。

「…？パ？パッチ？パッチワーク作品募集？？なんだよ、これ」
「パッチワークではない、パッチワークだ！パッチだ、パッチ！！」
「つば飛ばすなよ、汚ねーな、ったく！」
「で、パッチワークってなんだ？！」

俺の顔が「？」になっているのがわかったのか、日野は横に座り、説明をし始めた。

布と布をつなぎ合わせてクッションとかベッドカバーとかを作って提出するコンテストらしい。大賞は賞金30万円。

「あのさ、俺、針と糸持ったことないんだけど…っていうか！
なんでこんなのに俺が参加しなきゃなんねーんだよ！！ええ！」
俺が怒鳴っているにも関わらず、日野は真面目な顔で答えた。
「今さあ、僕が参加できるコンテストがこれしか見当たらなかったんだよ、
イケメンコンテストもまだ先だし…しょうがないだろ？」

「なんで俺がおまえの特技に合わせてコンテストにでなきゃなんねーんだよ」
日野が裁縫が得意なことにも驚いたが、俺はその紙をビリビリに破いて
日野の手のひらに乗せた。

「なんだよ…城君。つれないなあ」
「淋しそうな顔をした日野はパックに入ったジュースをズズーと飲み

俺を見た。

少しかわいそうになったが、心を鬼にして無視し食事続けた。

「あゝ、日野くうくん」

日野と同じサークルの女の子たちが、パフュームを放ちながら近づいてきた。

は、鼻がもげそうな匂い…

健児は「ええ匂いだなあゝ」みたいな顔でデレツと女の子たちを見ていた。

「あら？日野くんのお友達なの？」

リーダー格と思われる目の回りをクルリと一周黒く塗り、ぱっちりお目の女が健児と

俺を見て言った。

「オレ、健児です！法学部！日野と一緒に」

女に慣れている健児は自ら自己紹介をした。

女子に慣れていない俺は、無言だ。

「こいつ、城つて言うんだ。経済学勉強中！よろしく！」

俺の代わりに健児が言ってくれた。

「そうなの？二人ともいい男じゃない、私はマーガレット！文学部なのよろしくね？」

へ？マ、マーガレット…？

彼女の本名は「田中花子」と言い、花子と言う名が嫌らしく、みんなにはマーガレット

と呼ばしているらしい。

なんでマーガレットにしたんだろう。

マーガレットといえば、可憐で清純なイメージの花。

まったくもって一欠けらもそんな要素をもっていない…この女子。

結局、マーガレットたち数人の女子もそこに居座り、ベラベラとおしゃべりをし出した。

健児はウホウホ顔で対処したが、俺は無視しつづけた。

第二話 聖の妹・雅

家に帰ると、おやじとおふくろ、聖、雅が四人で夕食の最中だった。朝夕の食事はいつもみんな食べている。

おやじとおふくろは、女の子の雅が来たことで、うれしくてしかたがないらしい。

「よっ！お帰り、城」

聖の話し方は、外でも家でもすつかり男になっている。

「お帰り、お兄ちゃん！」

雅は俺のことを「お兄ちゃん」と呼び、聖のことは「聖」と呼んでいた。

俺は聖の横に座り、日野からの挑戦状のことを話した。

聖は大うけだった。

パッチワークなら代わりに作ってやったのに、と言われた。

「あつ、お兄ちゃん。龍星高校の二年生にすんごくかっこいい、というか、

かわいい男の先輩がいてね、もう女子なんてみんな彼から目が離せないって

感じなんだよ？」

……もしかして？

「それ、登戸って言う名前？」

「そうよ。知ってるの？！芸能人の卵なんだって！」

俺の知り合いだということを雅に説明すると、ものすごく驚き、明日学校に

行ったら登戸君に話しかけてみると、嬉しそうに言った。

「登戸君とはメル友だし…」
と言った俺を聖が睨んだ。

もしかして、聖、やきもちなんて焼いちゃってくれてる？うほっ！
俺は少し顔がニヤついた。

「何、ニヤついてんだよ。オレ聞いてないぜ、登戸とか言うヤツが
おまえの

メル友なんて…」

「コンテストの時にメアド交換して、たまにメールくれてたんだ。
それだけだよ」

本当は頻繁にメールを貰っていたが、聖のパンチが飛んできそうで
うそをついた。

「ふ〜ん、そう」

そう言っただけで膨らんだ聖のかわいい頬を突付いた。

「いいなあ、聖とお兄ちゃんラブラブで…雅も彼氏ほしい…」
今度は雅の頬が膨らんだ。

「あらあら、雅ちゃんにだってそのうちステキな彼氏ができるわよ」
おふくろに言われた雅は、肩を落とすと言った。

「だって私、パパに似ちゃったんだもん。聖はママに似てて綺麗で
しょ？」

「もあー！パパの遺伝子恨んじやうー！」

「雅ちゃんは丸いお顔でかわいいじゃない？元気だし、運動だって
得意だし」

おふくろのフォローのようでフォローではないような言葉に聖が苦
笑いをした。

兄としては、妹がかわいいのだが、雅のコンプレックスになんと言
っていないか

わからないようだ。

身長は160cmもない。これは女の子なのでかまわないが、雅のコンプレックスは

父親から受けついで顔だった。

おふくろが言ったように、丸い顔、少し小さい目、少し丸っこい体型。

聖の父親：そっくりだ。

が、女の子だし、顔のパーツがかわいいので決してブスではない。だけど、本人は自分の顔が嫌いらしい。

そんな雅の性格は、ものすごくいい子で、学校では明るくて楽しい子として、

女子！女子から人気らしい。

「おじさんは雅ちゃんみたいな女の子タイプだけどなあ」

「おじさんに言われても…同世代の男の子に言われたい…」

「……」

雅にチロツと見られたおやじは、撃沈である。

「俺も雅ちゃん、かわいいと思、」

「あー、城お兄ちゃん、慰めの言葉は要らないから、それ以上何も言わないで！」

お兄ちゃん、聖の彼氏なんだよ？綺麗な聖のことが好きなお兄ちゃんに

言われても嘘にしか聞こえないから！」

そう言うと、雅はご飯を目一杯口に入れて食事を続けた。
俺も撃沈だ。

だけど、みんな本当に雅のことをかわいいと思っているんだよ。
と、俺は心の中で雅に言った。

第三話 かわいい登戸君…

次の日、雅は昼休みの時間を利用して二年生のクラスが並ぶ三階に行った。

目的は、登戸君。

二年C組のドアのところから教室を覗いた。

あつ、いたいた、うげー女の子に囲まれてる…

登戸君はクラス女子にクルリと囲まれていたが、その顔はあまり楽しそうではない。

女子に何かを言われると、うなずいてはいるようだが笑ってはいない。

「あのお…ちよっと、登戸先輩に用事があるんですがあ…」

雅は近くにいた男子生徒に言い、登戸君を呼んでもらったが、女子が一斉に

入り口に立っている雅を見た。

こ、こわいいいいい。女子のみなさん。

怯えていると、登戸君が近づいてきた。

「僕に何の用なの？君、一年生でしょ？」

やさしい声だが、無表情な顔で聞いた。

「あ、私、お兄ちゃんの…大岡城の、」

「城くん?! 城くんの妹なの?!」

登戸君の顔が一気にバラ色に輝いた。

ああ、眩しい笑顔…

雅は少しヨレヨレとした。

「血はつながっていないんですが、未来的にはそんなようなもので…」
登戸君と話しているという事だけで、女子のみなさんの圧力がかった視線を
浴びつつ、雅は俺・城との間柄を説明した。

「そうなんだ。きみ、城くんと同じマンションなんだあ」

「はい。聖共々お世話になっていて…」

聖のことを兄と言っているのか、姉と言っているのか、登戸君がどこまで二人の事を知っているのか判断に苦しみ、一応「きょうだい」で大岡家にいるとお世話になつていと言った。

登戸君は聖を「イケイケメンメンコンテスト」で見かけていて俺の彼女だと

思っていたが、雅の説明で勝手な解釈をしてしまった。

(同じマンションだけなんだ。そうだよね、

あの時、城くんはノンケではないと言ってたもんね)

「じゃ、今度、城くんも誘って一緒に遊びに行こうよ」

「えええ？いいんですか？」

登戸君に誘われた雅は舞い上がってしまった。

「うん、僕、学校と仕事であまり時間が取れないけど、

城くんが一緒ならがんばって時間作るから！」

「は、はい！！城お兄ちゃんに言っておきますから！！」

「うん、僕も城くんにメールしておくよ。うれしいなあ」

るんるん気分では自分は自分の教室に戻り、登戸君はウキウキ気分で自分の席に着き、
また女子に囲まれた。

登戸君は急に愛想よくなり、かわいい笑顔を女子のみなさんに撒き散らし、
女心をゲットしていった。

俺が大学構内をふらついていると、メールが入った。

「雅ちゃんから？なんだろう」

（さつき、登戸君とお話しちゃいました！今度お兄ちゃんも一緒に遊びに行こうと

誘われたんだけど、お兄ちゃんよろしくね〜）

登戸君が上京してからまだ会ってないもんなあ。

彼、忙しそうだし…

雅に返信しようとしたら、今度は登戸君からメールがきた。

（雅ちゃんと言う子に会いました。城くんと同じマンションなんですよ？

今度城くんと一緒に会う約束をしたんだけど、城くんはいつが大丈夫ですか？）

似たような内容のメールだった。

えっ！これはもしかしたら、雅ちゃんと登戸君…いい感じにな

るかもしれない！

よし！兄としてここは一つ人肌脱ごう！！

と、思い、雅には（俺に任せろ！！）とメールをし、登戸君には、
（俺は土・日ならいつでも大丈夫だから、登戸君の時間が取れる時
教えてくれたら合わせるよ）

と、返信した……
ら、すぐに返信が来た。

（じゃ！次の次の日曜日！！久しぶりのお休みなんです（ハート）

城くんは大丈夫ですか？）

久しぶりの休みなんだあ。そうだよな、登戸君、事務所側に学校が
休みの日に

仕事入れられてるってメールで泣いてたもんなあ、かわいそうに。

俺はすぐに「了解」のメールをした。

聖を誘おうと思ったが、やはり雅の本当の兄貴が一緒だと登戸君も
緊張するだろうと

思い、雅と3人で会うことを約束した。

雅に登戸君と約束をしたことをメールすると、キラキラと輝いたデ
コメールをよこした。

大喜びの雅の顔を思い浮かべて、俺は兄貴気分であれしくなった。

第四話 三人でデート…

登戸君と会う日曜日、聖は専門学校の友達たちと美術館に行くと言
って、

朝10時ごろ家を出て行った。

雅と話して今日のことは、聖に内緒にしていたのでラッキーだった。

待ち合わせは12時。

聖の着なくなったワンピースをおふくろが仕立て直し、それを着た
雅はご機嫌だ。

「ふふふう〜、どう？お兄ちゃん！」

クルッと回ってみせた。

「かわいいじゃん」

「まあね、これで登戸君と二人きりのデートなら申し分ないんだけ
ど、

今日はお兄ちゃんがいるからね…ちょっと残念だわ」

そう言つと、もう一度クルリと回った。

……俺、邪魔なんですな。

雅は見かけがまだまだ中学生みたいだし、俺の記憶するところの登

戸君も

幼かったからなあ、俺的には保護者みたいな気分だ。

高校生二人の保護者が大学生というのも変だけど…

俺と雅が待ち合わせ場所に行くと、すでに登戸君は来ていた。

「登戸く~~~~ん」

雅が先に飛んで走って行った。
遠くから見ても登戸君はやはり目立っていた。
男だが、かわいいオーラをビシバシと放っている。

俺も雅の後を追うように走り、久しぶりの登戸君と再会した。

「登戸君、ひさし」

「ぶ」と言おうとしたところで、登戸君が俺の胸に飛び込んできて
熱い抱擁を

交わしてきた。

身長の低い登戸君の頭は、俺の鼻先に当たった。

女の子だったらしい感じの背の高さだ。

「城くーん！久しぶりだね！会いたかったよおおお」

ギュツと抱きつかれた。

「……」

周りの視線も痛い、カ一杯怪訝な顔の雅からの視線が一番痛い。

「ひさ、ひさし、ぶり…だね、登戸君…」

「ずっとメールだけだったもんね。会えてすごくうれしい！」

雅そっちのけの登戸君は、ずっと俺に話しかけてきた。

俺は笑ってごまかすしかない…

とりあえず、ウィンドウショッピングでもしようと言っことになり、
若者の街・原宿に向かった。

雅を間に挟み、歩いていたが、いつの間にか登戸君が俺の横に来て
いる。

俺が何気なくまた雅を間に挟むが、またいつの間にか登戸君が隣に
いる…

そして、時々腕を触ってくる。

そのたび雅が俺を睨む。

俺の所為じゃないって…
雅にアイコンタクトで訴えるが、俺が悪いようだ。
雅の眉間のしわがどんどん深くなる。

そんなことを繰り返し、ウインドウショッピングをした。
登戸君は久しぶりの休日だからなのか、顔いっぱい笑顔で楽しそうだ。

いつの間にか、左側に脹れっ面の雅の手を引き、右側で腕を組む登戸君を連れて、
俺が真ん中になり、街を歩いていた。

どっぴり構図だよ…これ。
すれ違う人たちにも何気なく見られていた。

「疲れたね、ちょっとお茶でも飲もうか」
俺の言葉に登戸君が、よく行くカフェがあるからそこへ行こうと言
い、

3人で例の構図のまま向かった。

「あそこだよ！」
そう言った登戸君はいつの間にか、俺と手を繋いでいた。
3人仲良く手つなぎだった。

なぜ、気がつかないんだ！俺は！！
そんな自分に落ち込み、カフェまで下を向いて歩いた。
カフェの前で声をかけられた。

「城…？」

「あっ！聖」

雅の声で俺は顔を上げた。

ええー！！なんで聖があああ！！こんなところにいる？！

聖は、登戸君と繋いでいる手に視線を落したあと、俺を睨んだ。

が……

なんだよ！聖！！

聖の周りには女子が五人いて、聖は両脇の女子と腕をくんでいる。

たぶん、クラスメイトなのだろうが、男一人の聖に女が五人。

女六人にも見えなくはない。

おもわず、俺も睨み返し、登戸君の手を離し聖の手を掴み、みんなから少し

離れたところに連れて行った。

「聖、おまえなんで女に囲まれてんだよ！」

「相手は女だから別にいいだろ？つていうか、お前の方はなんだよ！」

あいつ登戸とか言うヤツだろ？なんであの男と手繋いでんだよ！」

！

ものすごく答えに困る質問だ。

「それは……俺もよくわかんない」

「ざけんなよ……」

俺たちがもめていると雅が近づいてきた。

「ねえねえ、みんな待ってるんだけど？」

振り向くとみんなが俺たちを見ていた。

聖は怒ったまま、女子と一緒にその場から離れて行った。

「聖ちゃん、すごいあの二人カッコいいね!」
「いや〜ん、マジかっこいいいい」
「背の低い方の男の子って、雑誌とかで最近よく見かけるよね?」
「うんうん、なんかあの二人お似合い〜。背の高い方の人とさあ」
「やだあ〜、男同士じゃない〜。でもいい感じだね、許せる。うんうん」
女子たちの会話に聖の顔が曇った。

ざけんなよ、城。お似合いとか言われてんじゃねーよ…

俺は去っていく聖の後ろ姿を見ながら、沈んでいった。

「あの人…」

登戸君がポツリと言った。

「え? 聖? 私のおにえーちゃん」

雅は、お兄ちゃんとお姉ちゃんを足して「おにえーちゃん」と言った。
た。

気をきかしているのやら、なんやらわからない言語だ。

登戸君は気がついたらしい、聖が男だと…

そして俺の腕にギュッとしがみ付き、上目使いで言った。

「僕…負けないから」

「へっ?」

登戸君は、登戸君の言葉の意味がわからない俺の腕を引っ張り、力

フェに入った。

軽く食事をしながら話していたが、俺は聖のことが気になりほとんど上の空だ。

登戸君のお相手は雅に任せた。

第五話 はじめてのケンカ

7時前に登戸君を寮の近くまで送り、俺と雅は家に向かった。

「おやおやく城くん！新しい彼女かい？これで聖ちゃんは僕のものかい？」

後ろから聞きなれた声が聞こえた。

日野…かよ…

数人の女子をはべらせ俺に声をかけて来た。

同じ町内だから会ってもおかしくはないが、今日はなんだか偶然が多い。

「この子、聖の妹だよ」

日野に言つと、態度をコロツと変え、日野は雅に自己紹介を始めた。なんだか携帯番号の交換もしている。

雅はまた嬉しそうな顔になつてるし…

「あつ！城くん！コレコレ！！」

日野は鞆から紙を一枚取り出して、俺の顔に押し付けた。

「……」

「コレでどうぞだー！！！！」

「……だから近すぎて見えねーってんだろっが！毎回毎回」
その紙を見た。

『第1回 横縦町 たて笛大会 場所：横縦神社 主催：横縦町
内会

優勝賞品：町内お買い物

券5千円分』

「た、たて笛?!」
たて笛なんて、俺がもつとも得意とするものじゃないか!!
小学生の頃はクラスで一番!合奏会ではソロで吹いたこともある!
俺の目が輝いてしまった。

「どうだね?城くん。おとつい見つけたんだ、この大会!来月の五月祭りの時

なのだが、出場資格は幼稚園児からお年寄りまで誰でも、
「いいよ!出る!」

日野の話を遮り、おもわず返事をしてしまった。

「え?!そ、そうかつ!!むふふふ!!では、僕が応募しておこ
う」

なぜか日野はうれしそうに俺の肩をパンパンと叩いた。

日野と別れたあと、家に戻ると聖はまだ帰宅していなかった。

10時過ぎに雅から「聖が帰ってきた」と電話があり、俺は聖の住む10階に
下りて行った。

聖の部屋をノックし、中に入ったが聖は機嫌が悪い。

登戸君のことに怒っているのだろう…

俺に背を向け、机の前に座っている聖に言った。

「登戸君と俺、何にも関係ないよ。雅ちゃんと登戸君をくっ付けよ
うと、」

「雅のことダシに使うなよ。なんで城がアイツと手繋ぐ必要があるん
だよ…」

聖は振り向きもせず、言った。

「じゃ、聖はなんなんだよ。女の子に囲まれて楽しそうだったじゃねーかよ」

「ただの学校の友達だろ？一緒に出かけ何が悪いんだよ。」

それに、女だよ？城みたいに男と手を繋いでたわけじゃないよ！女にやきもちやくのっておかしくね？」

聖は振り向き、俺を見上げて言った。

「登戸君はまだ高校生なのに、親元を離れて一人上京してきて、淋しいんだよ、

きつと。だから俺は兄貴みたいな感じだし、それに、」

まだ話している途中の俺に聖は立ち上がり、俺の肩を押して「出て行け！」

と言った。

「聖……」

「言い訳なんていらねーんだよ！出て行けよ！」

「聖……、俺はおまえが女としても男としてもやきもちやくよ。」

聖が誰といても、いやだから…俺は、聖が男だから好きになったわけじゃない。

もし、おまえが女だったとしても好きになつてた。男だからとか女だからとか

じゃなくて、俺は…聖だから…聖のことを好きになつたんだ」

本当の事だ。俺は聖だから好きなんだ。

俺は、何も関係ないとはいえ登戸君と手を繋いでいたことを棚に上げて、

ドアのところを下を向いたままそう言い、部屋を出た。

この日、俺たちは出会ってから初めてのケンカをした。
なんだか、ものすごく切なくなった。

リビングに行くと、雅が心配そうな顔で座っていた。

「お兄ちゃん、聖とケンカしちゃったの？ごめんね、私のせいだよ
ね…」

登戸君と遊びに行きたいなんて言っちゃったから…」
雅が泣きそうな声で言った。

「違うよ、雅ちゃんのせいじゃないよ。それに、ケンカしてないから大丈夫だよ」

俺が言っていると、雅は「うん…」とだけ言った。

「そっだ、今度は登戸君と遊園地でも行こうか！」
俺は元気に言った。

が、

「あつ！登戸君、もういい！！パスする、私」

「へ？」

「だってさあ、登戸君もお兄ちゃんと聖と一緒にノンケじゃない
みたいだし」

そう言っつてケロリとした顔で笑った。

「へっ？ノンケ…って？俺と聖と同じって…？」

まったく意味がわからない俺は、雅の顔を覗きこんだ。

「…ええ？お兄ちゃん気がつかなかったの？！」

「…なにが？」

「登戸君、お兄ちゃんのこと好きなんだよ、たぶん！きつと女に

は興味がないね、

あの人は！うん！」

何を確信しているのか、わからないが雅は腕を組み仁王立ちのまま俺に向かつて

うなずいた。

俺は数秒間、考えた。

「え、え、ー！あ、あ、ー！？げげー！？！う、ぞだろ、ー！ー！！」

全てに濁音が付きそうな声を上げてしまった。

そ、そんな…し、知らなかった…登戸君…があ？！

そういえば、コンテストで初めて会った時も、やたら俺に触れてきて、

触りまくって…抱きついて……

(城くんて、のんけなの?) って聞かれた。

ノンケ？ノンケってなんだ？

「雅ちゃん、ノンケって何？」

「お兄ちゃんそんなことも知らないの？簡単に言えば、普通に女が好きな男のことかな？」

「ン？普通に女が好きな男って？」

「ん、たとえば、お兄ちゃんと聖はノンケの人ではないっていうことかな？」

「へ？ええ、ー！ー！ー！！！」

俺はコンテストの時、登戸君に聞かれた(ノンケなの?)という問いに

(別に、違うよ)と答えてしまっていた。
(のん気なの?)と聞き間違いをしていたからだ……

やっと納得した。

登戸君からのメールや今日の接触の仕方など……

確かに俺は聖と恋人同士なので、いわゆるノンケではないのかもしれない、が、

俺は別に男がすきなわけではない。

聖だから好きなのであって……

「僕負けないから!」

はっ!

今日の登戸君の言葉を思い出してしまった。

なんだか頭の中がグチャグチャしてきて、力が抜けてソファに座り、深い溜息を吐いた。

「どうしたの?お兄ちゃん?」

雅が俺の肩を揺らしてきた。

「はあああああ……」

出るのは溜息のみだ。

「あ、そうそう、お兄ちゃん!私、日野くんに乗り換えるから応援よろしくね!」

「うん……って、ええー……!!日野?日野?!!」

雅は、男が好きな登戸君への興味はすでになくなっていて、イケメンの日野に

興味をもってしまったようだ。

「日野くんって、聖のことが好きなんでしょ?でも聖のこと男って

知らないんだ

よね？っーことは！日野くんは女が好き！っーことで、私にもチャンスがある

っーことで、よろしく！！」

雅は、ちよこんと俺に頭を下げた。

聖とのケンカ。

登戸君のこと。

雅の次の恋。

日野のこと。

俺はなんだかいろいろと考えて、意識がなくなりそうだった。

俺が聖の部屋のドアを閉めたあと、聖はドアを見つめていた。

オレだって…オレだって同じだよ…城だから好きになったのに…

なのに、なんで登戸なんかと仲良くしてんだよ。

なにが「登戸の兄貴みたいな感じだ」だよ。

だったら手なんか繋いでんじゃーねーよ！！

城に触っていいのは、オレだけなんだよー！！！！！！！！

そうブツブツいいながら、聖はグローブをはめ、

ぶら下がっているサンドバッグを殴り続けた。

サンドバッグには、パソコンでプリントアウトされた俺の顔写真が貼られていた。

第六話 ケンカなんて耐えられない！

俺は中々寝付けなくてボーっとした頭のまま、朝8時にダイニングに行くど、

聖が先に朝食を食べていた。

「おはよう」も言わないまま、俺はいつもの席、聖の隣に座った。チラッと聖を見たが、目も合わせてくれない。

聖は、ものすごい早食いをし、「ごちそうさま」とだけ、おふくろに言つと

学校の課題の入った大きな鞆を担ぎ、出て行つた。

「どうしたの？あなたたち。ケンカでもしたの？珍しいわね」

一言も口を聞かない俺たちを不思議に思つたのか、おふくろが聞いてきた。

「別に…月一の男の子の日なんじゃない？」
などと、適当に言つた。

「ふふふ、いつも仲がいいに越したことはないけど、たまにはケンカもいいかもね。」

今まで以上に二人の間が深まるわよ、ケンカと言つのも！

聖の使つた食器を片付けながら、おふくろは笑つた。

俺は大学に向かう電車の中、午前中の講義を受けている時、
学食で昼飯を食べている時、午後の講義を受けている時、ずっと考
えた。

やっぱり、聖とこんな状態は非常に辛い…。

耐えられない。

俺からあやまるっ…

講義を受けている最中だったが、どっちみち先生の声など耳に入っていなかった俺は、携帯を取り出した。

聖は授業中、携帯を切っているの、今は見てくれない可能性大だが、とりあえずメールを送った。

『今日、聖の授業が終わるころ、学校の正面玄関で待つてる』

聖は専門学校だから毎日同じ時間に始まって同じ時間に授業が終わる。

4時には授業が終わっているはずだ。

メールの返信はないが、俺はその時間に合わせて聖の学校へ向かった。

正面玄関の前のガードレールに寄りかかりながら、聖が出てくるのを待った。

聖の通う服飾専門学校は大きい。大きな出入り口も三ヶ所ある。

メールを見ていてくれていれば正面口に来てくれると思った。

4時を過ぎる頃、学生たちが次々と出てきた。

すげー、さすがファッション関係の学校だ。いろいろ変わった格好の若者ばかりだ…

うわー、モヒカン？ スキンヘッド？ ええ？ 右側が短髪刈り上げなのに左側はロング？！

ものすごいアシメトリー……

なぜか髪型ばかりに目が行ってしまった。

聖を待っている間、学生達を見ていてぜんぜん飽きなかったが、聖

は出てこない。
メールを見ていないのかも…と思ったが、俺はそこを動く
気になれず、
時間だけが過ぎていく。

オレンジ色だった空が、だんだん暗くなって行き、すっかり日が落
ちてしまった。

時計に目を落すと7時ちよい過ぎ。

思い切つて携帯に電話をしようかと思っていると、正面からものす
ごい勢いで

大きなバツクを担いで俺に突進してくる人影を見た。

「じよおおおー……」

デカイ声で、ものすごく長い「お……」を叫びながら走っ
てきたのは聖だ。

俺の前で止まるのかと思いきや、俺に抱きついてきた。

えっ？う、うれしい……。へへ！

「ごめん！ハアハア……城！ハア……ごめん！」

息が切れるくらい一生懸命走ってきたのか、途切れ途切れの声で先
に謝られて
しまった。

「城……ごめん、さっき……メール見たんだ、ハアハア……」

いつもの授業が終わったあと、一年生対象に有名デザイナーの特別
講義があり、

携帯をずっと切っていたため、今さっき俺のメールを見て、待つて
いるかいにか

わからないけど走って来たら、俺がいて嬉しさのあまり抱きついた
らしい。

「聖、ごめん。昨日はごめん…」
俺も聖を抱きしめながら言った。
公共の場ではあったが、暗いし、構わないと思った。
それに服飾関係の学校の前だ、俺たちみたいな者への理解も大きい
だろうなどと、
勝手な本当に勝手な解釈をした。

「オレも、オレも城だけだから、城だから好きなんだ！」
聖の言葉に俺はデレデレと顔が歪んだ。
顔が元に戻らな〜〜〜い。

しあわせだあ〜、こんなしあわせをありがとうー神様仏様ご先祖さまさま！

などと、喜んでしていると携帯が鳴った。

……登戸君…だ。

ごめん、今はちよつと無視します…
心で謝った。

『僕、今、城くんのマンションの下にいます。ずっと待っています
(涙)』

携帯のコールが切れた後、いつものハートマークではなく、涙マーク入りの
メールが入っていた。
俺はメールに気づかず、聖と一緒にウキウキルンルンステップで家に帰った。

第七話 涙の登戸君

聖と手を繋いでウキウキとマンションまで帰ってくると、エントランスに設置されているソファのところにポツンと一人、学生服の男の子が座っていた。

俺たちの話し声に気づいたのか、その子が振り向いた。

……え？

「城くーーん、え〜ん」

俺の胸の中に、すっぽりと収まった。

「の、のぼ、登戸君…？」

「うっ、うっ…う」

泣いているようだ。

「おい！離れるよ！おまえ！！オレの城から離れるよ！！」
え？「オレの城？」…うれしい、俺〜。

聖が登戸君を俺から引き離そうと、体を引つ張ったが、登戸君はスツポンのように食いついたら放れない…みたいな感じで俺にしがみ付いている。

俺も困ったが、聖がムキになり始めた。

「登戸！！テメエーこのやろう！城に触るな！」

力のあるはずの聖が必死に登戸君を剥がそうとしたが、ビクともしない登戸君。

必死に俺のシャツを掴んでいた。

「どうしたの？登戸君？」

俺の声に少し顔を上げて、また泣き出した。

「しょうがない…俺の家に行こう。話聞くから、ね？」

登戸君にやさしく言った俺を見る目つきが完璧に怒っている聖は、俺の腕に抱きついた。

登戸君は…俺を抱きしめたまま後ろ向きに歩き、右側の聖には腕をギューつと抱きしめられた状態のまま、三人でエレベーターに乗った。

また、変な絵図らだよ…わけわかんね…

歩きづれーし…

チャイムを押すと、おふくろが出てきて俺たち三人の姿に口に手をあてて

「あらまつ！」と言った。

登戸君はやつと俺から離れ、泣き顔のまま、おふくろにちゃんと挨拶をした。

リビングに行くと、おやじと雅が仲良くお笑い番組を見ていた。

雅はほとんどこの家に入り浸りだ。

その代わりに俺が聖の家にいることが多いんだけど。

登戸君は、振り向いたおやじと雅に軽く会釈をした。

「あつ！登戸君、こんばんは〜」

と、雅は軽く言ったあと、またテレビの方に顔を向けなおし、おやじに登戸君と俺のことをひそひそ話で説明していた。

すでに登戸君への興味は全くないらしい。

女心はわからない。

「あなたたち、お夕食は？まだならすぐに用意するわよ」
時間は8時を過ぎていた。

「登戸君もまだなんだろう？一緒に食べよう？」

「はい」と小さい声で返事をした。

ダイニングに行き、椅子に座ったが、なぜか三人横並びに座っている。

聖が椅子をずらして俺にぴったりとくっ付けると、登戸君も椅子をずらし引っ付いてきた。

真ん中の俺は下を向いた。

はあ……

キッチンから出てきたおふくろが、三人を見て「あらまつ！」と言
い、「ご飯をよそい、
俺たちの前に座った。

はあ……

溜息ばかりも吐いているわけにもいかず、俺は登戸君に涙の理由を
聞いた。

「どうしたの？ なにか嫌なことでもあったの？ ホームシックとか？
ん？」

涙声の登戸君の話によると、昨日、寮に帰ったあとマネージャーか
ら次の仕事の内容を知らされたが、それは初めてのCMの仕事だっ
た。

ものすごく嬉しかったが、本来そのCMに決まりかけていたのは同
じ寮に住むタレントの卵だったらしい。スポンサーサイドが登戸君
の方を気に入ってしまい、彼に急遽決まり、そのタレントの卵にも
のすごい意地悪をされ落ち込んでしまった、ということだ。

それで、学校帰りに事務所へ行ったあと、寮に戻るのも嫌で、俺の
住所を辿ってマンションまで来てしまい、俺に電話をしたが出なく
てメールをしたあと、ずっと待っていた。

俺がシカトこいた登戸君からの電話だ…

かわいそうなことをしてしまった。

俺は少しばかり反省をした。

三人並んでキツキツの中、食事をした。

一番体の大きい俺が真ん中で、ものすごく食べづらい。

登戸君の話を一緒に聞いていたおふくろが言った。

おふくろは昔モデルをしていたので業界のことはわかっている。

モデルの世界と芸能界とは多少違うが、どこにでも人を妬んだり逆恨みしたり、いじわるな人はいる、それに負けたらおしまい。いじめられたら、いじめた人を反面教師として、自分は先輩や後輩や周りの人たちにやさしくして自分なりに一生懸命この業界に残るように努力しなさい。

困ったことや悲しいことがあつたらいつでもここにくれればいいからと、

登戸君にアドバイスをした。

登戸君からやつと笑顔が出て、おふくろもつなずいて微笑んだ。

聖は俺の顔を見て、口を尖らした。

食事が終わると9時半近かった。

登戸君の寮の門限があるので、おやじが車を出してくれた。

聖も一緒に来ると言ったが、「おやじも一緒だから大丈夫だよ」と説得させ、

寮に向かった。

門限にはギリギリ間に合い、登戸君は元気になって、俺とおやじに笑顔で手を振り寮の中へ入って行った。

「はぁぁ…」

帰りの車の中で溜息を吐いてしまった。

「おまえも大変だなぁ〜ははは〜」

おやじはのん気に笑った。

俺は、運転するおやじを見てもう一度溜息を吐いた。

ブレイクタイム：登戸君の思い（1）（前書き）

『イケイケメンメン・イケメンコンテスト』で初めて城と出会ったときの登戸君の気持ちストーリーです。

ブレイクタイム：登戸君の思い（1）

僕がこの業界・芸能の道に進むきっかけになったあの日。

「イケイケメンメン・イケメンコンテスト」当日、控え室に入って座っていた。

みんな、なんか身長が高くて、カッコよくて、僕が居ちゃいけないような気がしてものすごく淋しかったし恐かった。

そんなとき、控え室入り口から一組の男女が入ってきた。

女の方は、とびきりかわいくって彼のことを心配しているのか不安な顔で彼の側にピトツと寄り添っていた。

男の方は、すごくステキで、少し色黒……一目ぼれだった。

その時、日野くんとか言う少しすっとぼけた顔（僕にはそう見える）の出演者が知り合いみたいで、彼のところにすっ飛んで行ったんだ。ものすごくうらやましかった。

彼のことを『ジョウくん』と呼び、彼女のことを『ひじりちゃん』と呼んでいた。

「ジョウ…くん」

僕は控え室にいる間、ジョウくんをずっと目で追っていた。

僕が特技披露を終えて控え室に戻り、ジョウくんに声を掛けようとしたけど、

今度はジョウくんの特技披露の番が来て、スタッフの人に呼ばれて部屋を出て行った。

僕は部屋のモニターを見ながら、ジョウくんの番が来るのを待っていた。

ステージの真ん中に立ったジョウくんは、いきなり服を脱いだんだ。りっぱな体だった。

僕はもう釘付けで、どうしてもジョウくんとお友達になりたくて日野くんに近づいた。

「日野…くん？」

「なんだね、登戸くんとやら」

「なんだかおっさんくさい喋り方だ。」

「日野くんは、大岡君と友達なの？」

「はあ？友達？…んなわけがない！！ライバルだよ！ライバル！」

「ライバル？コンテストの？」

「それもあるが、聖ちゃんを賭けての好敵手だ！まっ、今は聖ちゃんと城くんは恋人」

同士だが、今日の午後からは僕が聖ちゃんの彼氏になる予定だ。ああはははははっ」

ものすごい高笑いを控え室で響かせてみんなの注目を浴びてしまった。

やっぱり二人は恋人同士なんだ…でも、日野くんがいうには午後からひじりさんは

日野くんの彼氏になる…よくわかんないけど、城くんはフリーになるんだ。

「日野くん！がんばってね！がんばってひじりさんと言う人と恋人になってね！」

「応援しているから〜」

僕はそう言い、日野くんを影から応援することにした。

なんだかルンルンとしてきた。

城くんが控え室に戻ってくると、他の出場者の人たちが（たぶん、僕と同じ仲間と思われる）城くんに駆け寄って、体をペタペタ触り始めた。

僕も思い切って城くんに駆け寄り、話しかけた。

「君はもちろん、攻めだよ。ステキな体だよ」
城くんの顔は「？」になっていたが、そんなことはお構いなく、他のメンズに負けられないように城くんの隣をキープして上腕二等筋や胸筋を触りまくった。

上位10名の名前が呼ばれ、ビックリしたけど僕もその中に残り、やっぱりというか僕の予想通り城くんも選ばれた。舞台袖で勇気を振り絞って、城くんに話しかけた。

そしたら城くんに：「かわいい」と言われ、僕は舞い上がってしまい思わず口について
言ってしまった：「好き」と言う言葉を。

だけど、それは小さい声だったのか、城くんは気がついてくれなかった：
自分の勇気のなさに少し気落ちした。

もう一つショックだったのは、インタビューで城くんが「強い女性が好き」と言ったことだ。
これはすぐに解決した問題だったから、よかったけど、その時は頭

の上に
「10tくらいの鉛」が落ちた気分だった。

僕は弱弱で、しかも男だ：。少し涙汲んでしまった。

控え室に一度戻り、城くんに聞いた。

「強い女性が好きなの？」と。

そしたら、僕が考えもしなかった答えを城くんの口から聞いた。

「タイプの女性って考えた事なかったし、別に女の子だけが対象じゃないし」

……女の子だけが対象でない……

僕はもう完全に城くんハマってしまった。

コンテスト優勝発表が始まり、僕は自信なんてなかったし、とりあえず日野くんにかんばってもらいたかった。ただ、僕がグランプリを貰ってしまった。

城くんが近づいてきて「おめでとう」と言ってくれたことにまた舞い上がり、抱きついた。

城くんの体は僕がすっぽり納まってしまうくらい大きくて暖かい。ずっとそのまま城くんを抱きついていたけど、そう言うわけにも行かず、僕はしぶしぶ舞台中央に向かった。

その後、僕はまた抱きつけるチャンスに神様から頂いた。

城くんが審査員特別賞を貰った。

おもわず、僕は思い切り抱きついた。

しあわせだった！

コンテストが終わって、スタッフの人に呼ばれた。

今後のことについて説明があるといわれ、僕は城くんとお別れしなければならぬ。

携帯番号を交換して欲しいと言ったら、笑顔で応じてくれてその上、「ノンケじゃない」

とまで言ってくれた。

僕にもチャンスはあると確信し、名残惜しかったけど、ひとまずバイバイをした。

この日の僕は、16年の人生の中で一番「思い切って！」の行動をたくさんした日だった。

すべて愛する大岡城くんのために！！

ブレイクタイム：登戸君の思い（2）（前書き）

上京後の登戸君の気持ちストーリーです。

ブレイクタイム：登戸君の思い（2）

イケメンコンテストでグランプリを取ってから、東京に住み始めるまでの間、
何度か上京したけど、いつも母親と一緒に来ていたので城くんにはメールで
知らせるだけで、会うことはできなかった。

城くんが通っていた高校・龍星高校が僕の所属する事務所の寮に近
いと知った時、
社長に頼んで龍星高校に編入させてもらった。
結構レベルの高い学校だったけど、僕もそんなにおバカではなかつ
たのでテストを
受けて合格した。

龍星高校に通うと決まったことをメールすると、
「俺の通っていた高校で、俺の家も近いよ」と返信がきた。

本当は知っていて龍星に決めただけ、僕は城くんの内緒にして
メールをした。

「城くんは卒業していなくて淋しいけど、城くんの後輩になれたこ
とはとてもうれしい

です（ハート）家も近所みたいなのも、超超超〜うれしいい（
ハート×10個）」

返ってきた城くんのメールには、ハートマークが2つも付いていた。
ハッピー〜。

上京して城くんの近くに居るはずなのに、学校が始まり、仕事やレ

ツスンをしなくてはならなくて全然会うこともできなかつた。だけど、メールをすれば必ず返信をくれていた。

僕は城くんのメールだけを楽しみに毎日を過ごしていたんだけど、ある日学校でいつものように女の子に囲まれ、憂鬱な気分になっていると、1年生の女子が僕のクラスにやって来た。

それは、な、な、なんと、城くんと同じマンションに住み、城くんの家族にお世話になっているという崎田雅と言う子だった。聞くと、あの「ひじり」とかいう城くんの側にくっ付いていたうざい女の妹だった。

彼女でもなんでもなくて、城くんとは家族みたいなものなんだあゝ。

僕はそう解釈をしてもものすごくうれしくなった。

ちよつと雅は邪魔だったけど、城くんと会う口実を作るために三人で会おうと提案した。

雅は喜んで帰って行き、僕はすぐに城くんへメールをし、結局僕のスケジュールの空いている日に三人で会うことになった。

城くんと会える日が待ち遠しくて、学校でも仕事場でも僕は上機嫌でみんなに愛想を振りまいていたら、「登戸祐二はかわいくてやさしくていい子だ」というイメージを持たれ、なんだか余計に仕事が増えていったようだ。

やっと！やっと！城君と会える日、待ち合わせの場所に20分も早く着いてしまった。回りの女の子たちに見られたりしていたけど、僕にはどうでもいいことだ。

早く城くんに会いたいなあゝ、とそればかり考えていた。

僕を呼ぶ声がして顔を上げると、お邪魔な雅が手を振って駆けてき

た。

あつ！！城くんだ！！

雅なんて無視して、後ろの城くんだけを見て、僕は城くんの胸に飛び込んだ。

あゝゝん、ひさしぶりの城くんの胸の中！！
数ヶ月ぶりの城くんの体をギュツと抱きしめた。

そのあとも、ずっと城くんにくっ付いていた。

僕と城くんが仲良く並んで歩いているのに、時々、雅が間に入って邪魔な存在だったが、僕はすぐに城くんの横に回って城くんをキープした。

途中で超超超ちょーお邪魔な「ひじり」が現れ、城くんの顔色が変わった。

……………僕は気がついた。

「ひじり」…あいつは男だ。

ショックだった。

どうしようと思った。

城くんはノンケじゃないと言ってくれた。

ひじりは女だから大丈夫だと思っていた…

だけど、だけどその「ひじり」が…男なんて…

その時、僕の何かに炎の火が「ボツ」と燃え上がった。

「戦う！この女、いや、このオカミみたいな男と戦う！！」

そして僕は城くんに宣言した。

「僕…負けないから」

第八話 日野、あきらめた恋

横縦神社での『第1回 横縦町 たて笛大会』当日。
おやしとおふくろは大会の始まる7時頃に神社に来ると言うので、俺はリコーダーを持って聖と雅を連れ、先に神社へ行った。

大切に保管しておいたリコーダーを、この日のためにクローゼットから取り出し、聖と雅にうるさいと小言を言われつつも毎日練習していた。

もっとも得意とする「リコーダーを鼻で吹く」演技を披露すると、雅は大受けでお腹がよじれて痛いと言げまわりながら笑ったが、聖からは氷点下50度ほどの冷たい視線を頂いた。
数時間口を聞いてくれなかった。

神社近くから出店が並んでいる。

雅は香港で生まれ育っているため、日本の出店を初めて見て感激していた。

神社近くに着く頃には両手に、綿飴、りんご飴、水飴、チョコバナナを握食べていた。
全部甘いものだ…

父親似の体型を気にしているわりには自分には甘いようだ。

境内入り口に行くと日野が待っていた。

「城くん！5時30分境内入り口付近待ち合わせだ！」と日野からメールをもらっていた。

「日野？待たせたな」

俺が声をかけると、聖を見た日野の顔が一瞬「？」となった。

日野が聖に会うのは約3カ月ぶりだ。

その間に髪型を変え、少しボーイッシュに変身した聖が男だと気がついたのでかと思った。

「聖ちゃん、久しぶりだね。相変わらず、かわいいじゃないかい？ 今日僕のため笛を

存分に堪能してくれたまえ！」

日野は少し赤くなっていた。ぜんぜん気がついていない。

「日野くーん！」

ベッコウ飴を買って後から追いついた雅が、日野に一直線にかけてきた。

「あつ、雅ちゃん。いつもメールありがとう
え？おまえらメル友なの？」

雅は聖の様子をダシに毎日、日野にメールをしていた。

俺が自分の大切なりコーダーを日野に見せ自慢していると、健児たち元3Bのクラスメイトが集まりだした。

地元じゃない元同級生の方が多いのに、みんな俺と日野の戦いを見に来た。

「よ！大岡！久しぶりだなあ〜」

い、石田！！おまえはいつの間にかサーファーになったんだ！！

四月頭に会った時はまだ色白だったのに…

元学級委員で真面目くさっていた石田が色黒のサーファーもどきに变身している。

こいつは、よくわからない趣味を沢山持っていて、器用になんでもできる。

そういえば、一緒に日焼けサロンに行ったとき、薄っすら日焼けし

た自分のボディを
見て何か考えていたもんなあ…
今度はサーファーに目覚めたんだあ。

体育大学に行ったボディビル部だった相川は、まだ少し涼しい季節にも関わらず黒のランニングを着て「相変わらずの肉体」を惜しげもなく見せている。

女子からはヒンシユクな格好だ。

担任だったサエドンも来たが、土日を利用して田舎の友人の結婚式に出席しているため今回は残念ながら来られなかった。

ライバルの日野は、別の高校だったにも関わらず、3Bのみんなに混じって楽しそうに
ワキアイアイと話している。

「あれ？聖君？」

髪の長い女の子が声をかけてきた。
隣には彼氏と思われる男もいる。

「金井さん。すげー偶然！あつ、彼氏？隣の人」
聖の専門学校のクラスメイトだった。

日野が少し首を捻った。

聖 君

という呼び方と聖の話し方が引っかけたようだ。

「こちら聖君。同じクラスなのよ。かつこいいでしょ、女子にモテモテなの。」

学校一のカッコいい男の子で、男子のファンも多くて、よく告白されてるのよ！

ね、聖君？」

金井さんが自分の彼氏に聖に紹介したあと、金井さんカップルは去って行った。

日野は「学校一のカッコいい男の子」 部分で反応し、

俺は「男子ファンに告白されている」 部分で反応した。

「……ちょ、ちょっとお聞きしますが、男って？聖ちゃん…男って？へ？」

日野の眉間のしわがどんどん険しくなっていく。

「何、今更寝ぼけたこと言ってるんだよ、日野！聖は男だぜ！なあみんなさ」

健児が日野の肩に腕をかけ、肩を叩き、みんなはうなずいた。

「うつつつそおおおおおおおおおおおおおおおお」

日野の気持的には、町内の端まで飛ばされたのだろう。

力が抜けたのか健児に体を預けてしまっている。

まあ、日野の気持ちはよく分かる。俺も初めて聖が男だと知ったとき、天と地がひっくり返って、どこかの暗闇に吸い込まれていったし！

そんな日野のことはどうでもいい。

俺は聖を睨んで「男子ファンに告白されている」部分の真相を追究した。

「俺、聞いてないぜ?!」

「言ってるもん。言ったら城、怒るだろ？」

「あたりめーだろ！っーか、今までに何人に告られてんだよ！」

「4、5人かな？」

4、5人?!まだ入学してから二ヶ月も経っていないのに……それも女じゃなくて、全部男なのか……! ものすごく、この先心配になってきた。

肩を落して頭を抱えている俺の耳元で聖が言った。

「心配するなつて、オレは城だけのもんだからさっ!チュッ!」
そう言つて耳にキスをした。

「きゃ~~~~、もう!聖ちゃんと城くんラブラブウ~~~~、うらやま~~~~!」

相変わらずコロコロとしている風ちゃんが、両手を頬に当て、嬉しそうな顔で言つと、

みんなから冷やかされた

が、日野はまだ立ち直れていないのか健児の背中におぶさつたまま泣いている。

傍らでは雅がニンマリとした顔で、日野の背中をポンポンと叩いて慰めていた。

7時近くになり、みんなで境内の櫓まで移動した。

俺とヨレヨレした日野は参加者なので櫓の裏に回つて、出番を待った。

まだ涙の止まらない日野は、俺の肩に顔を伏せながら言った。

「城くん:聖ちゃんとしあわせにな:僕はもう、諦めるよ:うっ、うっ……」

「離れるよ、日野……」

大学生の男二人が寄り添い、一人は泣いている俺たちを見ている周りの小学生たちの視線がものすごく痛い。

ヒソヒソ話されている。

『たて笛大会』が始まったが、参加者15人中、大学生は俺と日野の二人で、あと中年のおじさんと初老のじいさんの他は、みんな小学生と中学生だった…

中盤に出た日野は、シヨックからの立ち直りが出来ないままだったが、そこそこのいい音色を披露した。

だが、途中で涙の余韻の鼻水を啜ったのか「ピィ〜」と変な音を出してしまった。

俺はトリだった。

石田が、俺の勇姿を写メに撮りサエドンに送っていた。

完璧だああああ！俺の腕は落ちてはいない！

演奏を終えた直後の自分への感想だ。

優勝は間違いないと思っていた。

しかし、町内お買い物券5千円分は小学生に持っていかれた。

現役小学生には敵わなかった…

あの子たち、たて笛なんて毎日吹いてんだらうなあ…いいなあ〜小学生に戻りたい。

少し、遠い目をする俺がいた。

結局、俺と日野は参加賞の『横縦町内会』と記されている手ぬぐいをもらい、

みんなと一緒に神社を後にした。

第九話 城・雅、部屋チェンジ！

初夏を迎える頃、登戸君が出ているCMがオンエアされ始めた。さわやかな少年と少女の青春を描いた清涼飲料水のCMだ。

「CM見たよ。かわいく映ってるじゃん！」

とメールをしたら、これまたハートとお星様いっぱい嬉しさを表すメールの返事が来た。

学業、仕事と忙しい登戸君は、時間ができると俺に連絡をよこして都合が合えば、たまに

一緒に食事をしたりしていた。

もちろん、聖には内緒だ。

親元を離れて一人で頑張っている登戸君がなんだか可哀相というか、同情してしまっている俺がいた。

俺と会っている時の登戸君は、とても嬉しそうに仕事やレッスンの話をしてくれる。俺はそんな彼を見て、うれしくなっていたが、決して愛ではなく、友達として兄代わりとしてのフィルタ―で見ている。

が、聖には言えない。

今は秋から始まる連続ドラマに出演するらしく、ほぼ毎日、学校が終わると撮影所に通っていた。

聖、雅より、大学生の俺は一足お先に夏休みに入った。

そして夏休みに入った最初の土曜日、俺は引越しをした。

と言っても、雅の部屋と俺の部屋を交換するだけの話だ。

俺が暇な日は、ほとんど聖のところに居て、雅は雅でほとんど俺の家にはいた。

「だったら、部屋換えようよ、お兄ちゃん！私も試験の時、おばちゃんに夜食作って

もらってるし、いちいち10階まで来てもらうのも面倒だろうしさあ〜。

その方がお兄ちゃんと聖も…いいんじゃないのおおおほほほほ
おおおお

と、茶碗をひっくり返したような形の目で言われた。

おやじとおふくろは反対をするわけでもなく、息子の俺より女の子の雅と居る方が楽しいらしく、手放しに喜んだ。

そんな両親に、息子の俺は少しばかり、悲しかった…

「よし！コレでおしまいだ！後は自分達で片付けるよ。城、聖！おまえらはこれから

楽しい新婚生活が待っているんだなあ。思い出すなあ〜母さんと
の若い頃〜」

最後のダンボールを運んでくれたおやじに言われた。

正直、俺のおやじが「あなたでよかった」と、思った瞬間だ。

新婚生活…あはっ、あはっ、あっはははは〜

俺は心の中で高笑いだ。

照れる言葉だが、別に二人きりの生活になるわけではない。

飯の時はみんな一緒だし、学校のリズムも聖と俺とでは少しずれる。
今までと変わらない生活だよな？

利点といえば、夜遅くなってもずっと一緒にいられるくらいか…
夜中も一緒に居られるのかあ

夜：夜中… よーなーなーかあああああ？

おもわず、自分のはしたない想像に眩暈を起こしてしまい、ダンボールの角に

足の小指をぶつけ、床に倒れた。

「痛ってえー！ー！うー！ー！」

「城、何やってんだよ。そうだ、夜はオレの部屋で一緒に寝るか？」
フローリングの上で一人もがく俺を、上から見下ろしながら聖が言った。

「へっ？ええー！」

小指の痛みが消えた。

「いつ、いつしよにい？ねるう？」

またまた要らぬ妄想が頭を過ぎっていき、聖のお言葉に立ち上がったしまった。

立ち上がったのは俺の下半身ではなく、体を起したと言う意味なので、

お間違いないように…

などと、自分に説明してしまうほど、俺は動揺している。

「ぶっ！ははははは、バーカ、冗談だよ！はははは」

聖は笑い、ダンボールから服を取り出し、クローゼットに掛けはじめた。

そうか…冗談なのか…

純粋な俺は…もてあそばれているのか…

シヨック！

別に一緒に寝てもいいけど…という言葉を飲み込み、俺は参考書や辞書を本棚に並べて行った。

「なあ、城……」

「ん？何？」

急に聖が俺の背中に抱きついてきた。

「オレたちって、しあわせだよな？」

「ん？」

「家族とかさあ、仲間とか周りのみんな、オレたちのこと変な目で見ないで普通に接して

くれているっていうか、応援してくれててさあ。なんかすげー感謝してる、オレ」

「うん……。俺もみんなに感謝してる」

俺を後ろから抱きしめている聖の腕に力が入った。

「城……愛してるぜ」

「聖……俺もあいし……て……えっ？」

俺は聖と向き合おうと振り返り、ふとドアのところを見た。

「うわっ！」

俺の声に驚き、聖も振り返って俺の視線の先を見た。

「うわー！ー！！雅！」

ドアのところに雅が立っていた。

「あはっ！あはあはっ！愛を確かめ合っているところごめん、うふん！」

雅は片手で頭をかき、片手でピースをしていた。

「……………」

「おばちゃんが、サンドイッチ作ったから一休みしろって！」

「いつからそこにいたんだよっ！」

実兄としての立場を失くしつつある聖が引きつった顔で聞いた。

「ん〜と、なあ、城〜〜辺りからかなあ？」
最初からじゃねーかよー！！

「つーわけで、お二人のキリがいいところで、上に、」

「雅！！おまえー！！」

「きゃ〜」

こうして俺と聖は一緒に住み始めた。

これが良かったのか悪かったのか、お互いの独占欲は強くなった。

そして結局…夜は…一緒に聖のゼミダブルのベッドで一緒に寝ている。

第十話 コンパにて…(1)

8月に入ってすぐに同じ学部の上から電話が来た。

コンパのお誘い。

女子との絡みは苦手な俺は、たまに極たまに無理矢理コンパと言うものに助っ人として

借り出されていた。

夏休み中なのでコンパ命の連中が、バイトや帰省や旅行やらで人数が集まらず、

俺に拜んできた。

今回のコンパの相手の学校は、偶然過ぎるが、聖が通っている専門学生の子たちだ。

井上が海でナンパした女子が、そのお友達を連れてくると言う。

聖に知れたらすごくヤバイと思ったが、聖の専門学校としてはマンモス校だ。

全ての学科の学生はトータル6000人ほど、そのうちの5、6人大丈夫だと思い、井上に夏休み明け、講義の代返3回の交換条件で手を打った。

七色の声を持つ井上の代返は完璧だ、今までバレたことはない。

コンパ当日、聖は午後から友達の家遊びに行くと言い、仕度をしていた。

「誰の家に行くの？」

「学校の友達の家で夏休みの課題やるんだ」

「ふ〜ん、何時頃帰って来る？」

「…んー、たぶん飯食ってくるから、10時くらいかな？」

「ふ〜ん」

10時か…6時からコンパで、二次会に参加しなければ余裕で10

事前に帰って
来れるか…よし！

俺は聖が戻る前に家に帰るように考えた。

「城は？出かけるの？」

「え？別に？家にいるよ」

「そっか！じゃ、なるべく早く帰って来るよ、オレ」

「あっ、いいよ、ゆっくりしておいでよ」

と言う、俺の言葉に聖が変な顔をした。

「なんか、変じゃね？いつもオレが出かけると早く帰って来いつてうるさいのに」

そうなんだよ、俺は聖が誰かと出かけると心配で、いつも早く帰るように催促しているんだよなあ。

「だ、だって、遊びに行くんじゃないんだろ？勉強だろ？勉強…」

「…オレ、今日やめようかな…出かけるの。城、なんか隠し事してるみたいだし」

聖が俺の顔を横目で見ながら言った。

俺はあせりダメージジーンズの穴を突付きまくっていた。

「隠し事なんてしてないよ…俺、出かけないしい…家に…いるしい…」

聖の顔も見れず、下を向いて話す声が弱弱しくなっていく。

「ふーん、そう。じゃ、ゆっくりしてこようかなあ」

なんだか疑われている…おどおどしてしまっじゃないか！

聖が2時過ぎに出かけ、俺は井上たちとの待ち合わせ時間に合わせ、家を出た。

俺たち男5人が、コンパ予定の店に行くと女の子たちはまだ来てい

なかった。

コンパ慣れしている他の連中は、「今回の女の子たちは期待してくれ！」と言う井上の言葉に浮かれ、二次会をどうするかなどと相談しているが、俺は、とにかく聖より早く帰らなければ…とそればかりを考えていた。

「大岡？二次会行くだろ？カラオケにしよぜ！」

「俺、これ終わったら帰るから」

新田に言われたが、俺は断った。

二次会なんて出れるわけがない…

「何つれねーこと言ってるんだよ。イケメンのおまえがいると女の子たちが喜ぶんだよ。」

出ないと代返一回に変更~~~~」

井上に代返を減らされた。

「えー！ずるいよー。代返三回の約束でここにいんのにさあ」

「じゃー！二次会出るよな！代返五回にするから」

俺はたかが代返のために、心を揺さぶられて何してんだろっ…

うーっ、代返より聖だ！とりあえず、これが終わったら帰ろっ。

俺が小さなことで悩んでいると女の子たちがやって来た。

奥から二番目に座っていた俺は、彼女たちの顔も見ず下を向いている。

はあ…早く終わんねーかなあ

まだ始まってもないのに溜息だ。

ドサツ！！

誰かがバッグを落とし、俺は顔を上げた。

……あ……

ギョッ！ギョエエエエエ。

ひ、じりー……

落したバッグを拾いながら、ものすごい怖い眼差しで俺を見ている。

俺は下を向いたまま、頭を抱えた。

「大岡なにやってんだよ……」

隣の新田に肘で突付かれ、顔を上げた。

聖は俺の斜め前に座った。

マジヤベーーー！！

……というか、なんで聖が居るんだよ！

友達の家で宿題の課題をやっているはずでは？

……というか、家を出たときの服装と違う。なんでワンピースなんて着てんだよ！

どうして女装子してんだよ！ものすごいかわいい……女子の中で一番かわいい。

つて、そんなことは今は関係ない！

俺は聖を睨み返し、アイコンタクトで「なんでおまえが居るんだよ！」

と、訴えたが通じるわけもなく、聖は聖で俺を睨み続ける。

井上がリードを取って俺たちを紹介した。

「……で、アイツは大岡城！コンパではいつも一番人気の見ての通りのいい男なんだ。」

結構女誑しだったりして！女子のみなさん気をつけてください！「げっ！！ふ、ふざけたことを言うな！嘘を言うなーーー！」

井上の勝手な発言に俺は井上を睨んだあと、聖をみたら腕を組んで目を細め、斜め45度角の横目で凄まれた。

俺は体の毛穴から汗が全て出ている感じを覚えた。

あああ、もう、おしまいだ。家に帰ったら……
考えるのやめとこ……

男子の紹介が終わると、女の子の代表・朋絵ちゃんと言つ子が紹介を始めた。

「~~~~、で、三番目の子が崎田聖ちゃん！」

聖は自分の名前を呼ばれると、「ふふ！」と、ものすごくかわいく首をかしげ笑った。

……かわええ……
俺はちよつとニヤついてしまった。

聖は、男子一人一人に微笑みを分け与えていたが、俺の顔を見た途端、

真顔になり素通りされた。

「聖ちゃんは、こんなにかわいいけど恋人がいないので、ただいま恋人募集中です！」

男子たちが喜び、手を叩いたが、聖は「げっ！」という顔で朋絵ちゃんの方向を向き、俺を見た。

はああ？恋人募集中?! 聖…おまえ…!

今度は俺が目を細め凄んで聖を見た。

聖は下を向いて俺の視線を外した。

聖もまた朋絵ちゃんに適当なことを言われていた。

俺と聖は目と目だけで、全然分かり合えないアイコンタクトのみで一言も話していない。

しかし、お互いに怒っていることだけは目を見ているだけで分かりあえた。

そして、30分ほど経ち席替えをし俺と聖は端と端になり、みんな楽しく打ち解けていく中

俺は聖とだけ打ち解け合えないまま時間が過ぎていった。

聖は男子にちやほやされ、みんなに極上の笑みを見せ、俺の方を向き極上のガンをたれてくれた。

第十一話 コンパにて…(2)

途中で聖が一人の女子と「レストルームに行く」と言い、席を立った。

アイツ女子トイレに行くのかよ…

数分後、俺の携帯にメールが入った。

聖からだ。

(パンチマーク)が10個ほど表示されたあとに、「死ね!」と書かれてあった。

……あんだよ……悲しいなあ。

俺はメール返しではなく、直接聖に電話をかけた。

が、電源が切られている…

メールのあと、すぐに電源を落したようだ。

聖が戻って来たが、目も合わせてくれなくなっている。

しかたなく、あじの骨をカラッと揚げたやつをポリポリと食べながら隣の女子と楽しく、

本当はぜんぜん楽しくないけど…お話をし時間の過ぎるのを待った。

「二次会はどこにする?」という話が出始めた頃、俺の携帯が鳴った。

着信を見るとおやじからだった。

「もしもし?どうしたの?うん、聖?一緒だよ?……えええ?!!!
ど、どこ?」

すぐ行くから!!うん、分かった!!」

急に大きな声を出した俺を、みんなが見た。

「聖！！大変だ、雅ちゃんが病院に運ばれた！」

俺は立ち上がり、聖に言った。

「雅が?! どうして?!」

驚いた顔の聖も立ち上がった。

「おい、聖！とりあえず病院に行くぞ！」

「う、うん！」

俺はみんなに「俺と聖、二次会パス！」とだけ言って、ポカんと口を開けているみんなを残して店を出た。

車の通れない繁華街の道を俺と聖は手を繋ぎ、思い切りダッシュした。

「聖、大丈夫か？」

「うん！頑張つて走ってるう〜」

なぜか、聖はスカートを穿くと女言葉になる。

ヒールを履いていた聖は途中で靴を脱ぎ、俺は裸足のままの聖とタクシーを拾うために大通りまで走った。

タクシーに乗り込み、病院に向かった。

「雅、どうしたの？病院って…事故？病気？どうしよー」

「わかんない。聞くの忘れた。病院の名前だけ聞いて電話切ったから」

車の中からおやじの携帯に電話をしたが、病院内だからなのか、繋がらなかった。

「どうしよう、城…、雅に何かあったら…」

大切な妹の病状がわからなくて、聖は泣きそうな顔をして俺を見た。

「大丈夫だよ」

俺はそれしか言えなくて、聖の手をずっと握っていた。

救急病院に着き、中に入るとおやじが椅子に座っているのが見え、俺たちは急いで駆け寄った。

「おやじ！」

「お父さん！雅は？！」

「あつ！心配いらないよ、ただの便秘だ！はははっ！」
おやじは明るく言った。

「え？ただの？」

「べ？べんぴ？…べんぴ？」

「そうだ！便秘だ！！ただの！もうすっかり出た！てんこ盛りいゝなんてね！」

便秘症の雅は2週間ほど、腸の中に貯蓄してしまっていたらしい。おやじ達とテレビを見ていて、急にお腹を押えて苦しみがり、慌てたおふくろが

救急車を呼び、病院に運ばれた。

病院に着いて原因もわからないまま、おやじは聖の携帯に電話をしたが、

電源が切られていて、俺にかけたと言うことだ。

雅はもうすぐ救急室から出てくるというので、俺たちはロビーで待っていることにした。

聖も安心して気が抜けたのか、隣に座っている俺に寄りかかっていったが、

何かを思い出したように俺から離れて、言った。

「城…オレに内緒でしょっちゅうコンパ行ってんだあ…それに女たらしなんだあ、」

女と遊んで楽しそうで何よりですね!！」
棘のある言い方をした。

「はあ?しょっちゅうなんて行つてねーよ!あれは井上が勝手に言
つたんだよ!

今日のコンパだつて助つ人だよ、みんな帰省してたりして、いな
いから…

聖だつて恋人募集中なんだろう?恋人もいなくて残念だな?いつも
女装子でコンパ行つて

男捜してんのかよ」

言い返した。

「あれは朋絵ちゃんが勝手に作つて言つたんだよ!それに今日は頼
まれたんだよ、

朋絵ちゃんに!女の子が集まらないから女に化けて参加してくれ
つて!」

俺たちはシーンとした院内でボソボソと、小声ながら互いを言葉で
突付きあつた。

「……」

「……」

コンパ参加は同じような理由だつた。

「あれ?聖ちゃん、珍しいね、ワンピース。久しぶりなんじゃない
?二人で

デートだったのか?いや〜いつもラブラブでいいなあ〜おまえら
!まっ、パパとママには

勝てんだろうけどなっ!」

聖の横に座っているおやじが言った。

おやじ……

俺たちは無言だ。

「あつ！聖！お兄ちゃん」

手を振り、雅がおふくろと走ってきた。

「雅、大丈夫なのか？」

「うん…へへへ…」

雅は少し恥ずかしそうに舌を出して笑った。

病院に運ばれた理由が理由だからなあ…女の子としては恥ずかしいのだろう。

家から歩いて10分ほどの救急病院だったため、歩いて帰ることにした。

雅はすつきりさっぱりしたのか、おふくろ達と足取り軽やかに歩いている。

八月の暑い夜。

風も無い。

朝の天気予報では今夜は熱帯夜だと言っていた。

俺は、少し離れて隣にいた聖の手を掴み、前を向いたまま歩いた。

聖は少しだけ力を入れて、俺と繋いだ手を離さなかった。

そして俺たちは黙ったまま、前を歩く三人の後ろに付いて家路に向かった。

第十二話 聖…そして麻衣子（前書き）

この話には5%ほどの性描写があります。
嫌悪感を懐かれる方はお気をつけください。

第十二話 聖…そして麻衣子

8月中旬、聖と雅は2週間ほど両親の住む香港に帰っている。

その間、俺は運転免許をとるために合宿に参加した。

そこで何人かの同年代の人と友達になり、同じ東京から来ていた麻衣子という

短大二年生の女の子と仲良くなった。

麻衣子は、長い黒髪で一際目立つきれいな整った顔をしていたが、人に媚びない

さっぱりした性格だった。女子大生特有の甘ったるさが無く話やすかった。

「大岡君、明日東京に帰っちゃうんでしょ？これ。時間が合うようだったら、

ご飯でも食べに行こう！私は9月の頭頃、東京に戻る予定だから麻衣子は、20日間の合宿免許を終え、明日東京に戻る俺に携帯番号の書かれた紙をくれた。

「あつ、うん。じゃあ、俺の携帯番号も…」

番号を交換し、俺は次の日東京に帰った。

東京に帰り、玄関のドアを開けると3日前に帰って来ていた聖がお迎えをしてくれた。

「聖~~~~~」

「城~~~~~」

俺たちは熱い抱擁を交わした。

「暑苦しい…」

聖と一緒に迎えてくれた雅に、厳しい残暑が一気に雪景色に変わるような寒い目で

言われた。

ほっとしてくれ…俺たちのことは。
つか、なんで雅が10階にいるんだよ…

リビングに入ると、なんだか紙とかノートとかがテーブルの上に散らばっていた。

ああ、雅の夏休みの宿題か…

宿題をほったらかしにし、香港に戻ってしまった雅は聖に手伝ってもらい最後の
追い込みを頑張っていた。

「お兄ちゃんも手伝ってね。あと4日あるから余裕でしょ？」
まったくの手付かずの宿題が三分の二残っていると言う。
一ヶ月半もあつた夏休みをどれだけエンジョイしたんだ…雅は。
それから3日間、三人で一生懸命宿題に精を出した。

聖と雅の学校が始まったが、俺はまだ休み。

大学生は何気に夏休みが長い。
免許の試験を受け合格し、やっと免許を修得したが、おやじの車は
まだ一人で運転させてもらえていない。

毎晩、おやじが助手席に座り、俺は運転の練習をしていた。

あゝ、おやじとじゃなくて早く聖と二人でドライブ行きてえ〜。
おやじをチラ見すると「おまえの考えていることはわかるが、まだ
ダメだ！」

と、千里眼で言われた。

大学が始まると学祭の準備が始まった。
メンドクサイし興味ないし、俺は適当に参加して適当にこなす予定だ。

聖の学園祭のメインはファッションショーだった。

3日間、計12回のショーは毎年業界関係者も見に来るイベントだ。聖はモデルに決まったらしく、ほぼ毎日ショーのための練習やりハ―サルで帰りが遅くなっている。

聖のいない部屋で一人ベッドの上でゴロゴロしていると、麻衣子から連絡が入った。

電話をするのを忘れていた。

麻衣子の電話は「短大の学園祭に遊びに来い」という内容。

俺の大学の学祭とも重ならないのでOKをし、大学の友達を連れて行くと約束をした。

麻衣子との電話を切って少し経ち、聖が帰ってきた。

「疲れたあああ……」

俺の横に寝ころがった。

聖はリハ―サルをしてきたのか、化粧をしたままの聖の顔は……

か、かわいい〜〜、ぶほほほほ〜

変態おやじのような俺がいる。

「お帰り、お疲れ〜」

聖の頭をポンポンと叩いた。

「ん、ただいま……」

目を瞑ったまま言った。

まつ毛長いよなあ、聖。

唇もかわいいよなあ、聖。

キ、キスしちやおうかなあ、でへへへ…

などと考え聖に顔を近づけようとした時、邪魔な着信音が響いた。

……誰だよ！邪魔者は誰だ！

……んげつ、登戸君。なんでメールじゃなくてコールなんだ…

聖が薄目を開けて俺を見た。

「誰？なんで出ないの…？」

「え…登戸…くん。……あつ」

聖が俺から携帯を取り上げ出ってしまった。

「もっしもっし、城なら便所！う こしに行ってるけど、なんか用？」

おいおい、よりによってう ことが言っなよ、下品だなあ。

それに俺のイメージが…

俺は聖から電話を取り返した。

「ごめんね、登戸君。どうかしたの？え？ううん、トイレなんて行ってないよ！

俺、う こなんてしたことないから、ははは〜」

聖が拗ねた顔で起き上がって、俺から離れようとしたので腕を掴んだが思い切り振り払われ、俺に一蹴り入れ、出て行った。

俺はわき腹を押え、電話をしながら、聖の後を追ったが、シャワーを浴びるよううで

浴室に入った。

登戸君からの電話は「次の休みに遊びに行きたい」と言うことだった。

その休みの日が、麻衣子の短大の学祭に行く日だったので、登戸君も誘った。

女子短大だと言うと、少し考えた後「僕も行きます、城くんことは僕が守ります！」

と言ったが、何から俺を守ってくれるのか聞くに聞けない。

そして電話を切ったあと、俺はすぐに浴室に行った。

今度は聖のご機嫌を直さなければならぬ。

一応、風呂なので俺は服を脱ぎ、静かに忍び足でドアを開けた。

聖はシャワーボックスの中で髪をゴシゴシと洗っていて、泡泡の頭のまま俺に背を向けている。

「ごめん！！聖〜！！」

聖を後ろから抱きしめた。

「うわあああああああ」

「うわーーーーー！！」

エコーの掛かった二人のものすごいデカイ声が浴室に響き渡った。

聖の声に俺の方が驚いてしまった。

聖は泡泡の頭のまま振り向いたが、前が見えず手探りでシャワーヘッドを掴み泡を取り除いたあと、目を開けた。

「……………」

「……………」

二人で見つめ合った。

「へへへ。ご、ごめん…脅かすつもりはなかったんだけど…ははは…」
笑ってごまかしてみたが、聖はニコリともしてくれない。

「オレを…心臓マヒで殺す気か？…ハアハア…」

「だってさあ」

「だってじゃねーよ！たく。いきなり後ろから抱きつかれたらビツクリするだろが？！」

オレはまだシャワー中なんだよ！出てけよ！」

そうとうお怒りのようだ…

「機嫌直せよ、聖」

俺はまた聖に抱きついた。

「ちよつ、おい、放せよ！城！…：…な、な、何お起つてんだよ！」
少しばかり俺の下半身は…：…な状態で…：…少し大変。

…：…よし、あれだ！とりあえずあれを使おう。ナイスな位置に置かれてる…！！

俺は聖を片手で抱いたまま、聖が使っているクレンジングオイルに手を伸ばした。

「うわつ、うわあああー！止める！城！オレはシヨ一の準備で疲れてんだよ…！

それにクレンジングオイルなんて、何考えてんだよ…！やめてくれえええええ」

「無理！止められない！」

俺の欲望は誰にも止められない！

聖のお尻近くの「*」マークに似た部分に、オイルを塗りたくったああああ！

「うっ、うわあああああ〜〜やめるおおおおお
と言っことです！

「「ちそうさん！聖！」

朝、ベッドに聖を残し、俺は15階に朝食を食べに行った。

「おはよう…」

「あら、聖ちゃんは？早くしないと遅刻しちゃうんじゃないの？
いつもこの時間の聖は朝食を食べ始めている。」

「え？ああ、聖…ちょっと、具合悪いみたいで、1時限目遅刻して
行っって」

「熱でもあるの？風邪？ママちょっと見に行って来ようかしら…」
「えっ?!いい、いいよ…なんか…シヨーのリハーサルで…腰痛にな
ったみたい」

「腰痛?…」

おふくろは俺をチラッと見て「あらまっ！大変ね、あなた達も」
と、言い、

俺の皿の上にトーストを乗っけて、微笑んだ。

夕べ、浴室で営んだあと、ベッドでもヤッてしまった。

男同士のアレは、男と女のアレとは少々違っため、いわゆる「受け
?」とかいう聖は

かなり辛い……。よって、アレのあとの聖は翌日になっても疲労感
を伴っらしい。

ので、静かに寝かせてあげたい。
俺は経験ないのでわからない…
ので、授業に出る…と。

……っーか、おふくろの意味ありげな笑顔…

おふくろは男同士のアレの何を知っているというんだー！

おふくろの言葉に俺の顔は真っ赤になった。

俺たちの愛は特別なものだけど、そこに愛があって体を重ねあうこ
とは男同士でも

女同士でも、男と女であっても何も変わらない。

1ミクロンも変わらないと思う。

俺が、誰でもない聖だけを愛していることは、この先も変わらない。

第十二話 聖…そして麻衣子（後書き）

注）文中にある「*」に似たところへのクレンジングオイルを使う行為は、フィクションであるため、試したことはありません。そのような行為があるのかも、体にどのような影響があるのかさえわかりません。本来クレンジングオイルは化粧を落とすためのものであり、文中のような間違った使い方をし、万が一試されてどのようなことがあっても（そんな人いないと思います）責任は取れませんのでご了承ください。

第十三話 日野と雅？

土曜日の朝、俺と聖が少し遅めの朝食を取りに15階に上がると、おやじとおふくろだけがいて、雅の姿が見えなかった。

「お母さん、雅は？」

聖が聞いた。

「出かけたわよ。おしゃれしてルンルンと！」

「なんかデート見たいだぞ！」

おやじとおふくろが言った。

「デート?! 誰と?」

俺と聖は目を合わせた。

ん?もしかして…

「日野くんと。たまに二人で遊びに行ってるみたいよ?」

…やっぱり、日野かあ。

「お父さんはさみしいなあ〜」

おやじはソファのところで肩を落していた。

「日野お?! なんで日野と!」

怒った顔の聖は携帯を取り出し、急いで雅に向けた。

日野の横を、ほんの少しだけ離れて歩いていた雅の携帯が鳴った。

んげっ！？聖…

「もし、」

「雅！おまえ！なんで日野と一緒になんだ！！兄ちゃんに内緒で何して、」

電話越しにいきなり怒鳴られた雅は「プチッ」と携帯を切り、電源をOFFにした。

うるさい…聖…お邪魔虫！

「どうしたの？雅ちゃん」

何も言わず携帯を切った雅を不思議に思い、日野が聞いた。

「うっん、なんか間違い電話みたい、最近多いのよね」

「そっか、で、どんな映画みたい？僕はなんでもいいから雅ちゃんに合わせるよ」

「えへっ？何にしようかなあ」

雅は手を合わせ、片頬に付け首をかしげた。

雅と日野は、たびたび雅が誘って会っている。

いつもきれいで高ビーな女にしか囲まれていない日野は、雅の素直なかわいさに

少し心動かされていた。

「っな！なんだ！！雅のヤロー電話切りやがった！！

兄の電話をいきなりきったあああ」

聖が怒りながら俺を見た。

「落ち着け…な！雅ちゃんも恋をしたい年頃なんだよ」

「相手が日野だぞ！日野！！あのスケこましの日野だぞ！なにかあったら」

「どうするんだよ」

怒りから泣き顔になりつつある聖におふくろが言った。

「あらっ、聖ちゃん大丈夫よ。日野君結構真面目でいつも6時前にはちゃんとここまで」

送って来てくれるのよ？それにこの間はここで一緒にお夕飯も食べて帰ったの」

「はああ？」 「ええっ?!メシ…って？」

これには俺も驚いた。

この家に日野が来ていたなんて…

雅と日野は、ちゃんと付き合っているわけでもない。いまのところお友達同士。

俺にバレても構わないが、聖にバレると怒られることはわかっている。

雅は、とりあえず、聖にも俺にも内緒にしていたらしい。

聖はソファに座っているおやじの隣に行き、肩を並べて溜息を吐いた。

「お父さん…オレ…さみしい…」

おやじは聖の肩に手を置き、一緒にうなだれた。

おふくろが言っていた、雅はいつも6時前にちゃんと日野に送ってもらい帰宅すると。

俺は聖に内緒で4時ごろ雅に電話したが、ずっと電源を切っているのか繋がらず日野の携帯に電話をした。

今、日野と聖を会わすわけにはいかない。

聖は怒り心頭中だ。

雅をマンションのエントランスまで送ってきたら俺に電話をくれるように頼んだ。

日野は少し戸惑った声をしてしたが、了解してくれた。

6時少し前に日野から連絡が入り、俺はマンションの下まで雅を迎えに行き、日野は雅の

ことを心配していた。

俺が聖に話すから大丈夫だと言い、日野には帰ってもらった。

結構紳士的なヤツなんだ…

俺は日野への印象が変わって来ていた。

家に戻り、雅が帰って来たことがわかると聖が10階から上がった。きた。

雅の顔を見るなり、怒り出し、兄弟喧嘩が始まった

「なにやってんだよ！雅！」

「聖には関係ないでしょ！私が誰とどこに遊びに行こうが！」

「誰とどこって、相手は日野だろ？！日野はダメだ！アイツは女たらしだ！危ないだろ。」

何かされたらどうすんだよ…！」

聖の言葉に雅の頬がものすごく膨らんだ。

「おまえの彼氏なら、オレが見つけてやる！」

おいおい…娘を持つおやじか…聖。

「日野くんは彼氏じゃないもん、日野くんは城お兄ちゃんの友達で、私が聖の妹だから

一緒に遊びに行きたいっていう、わがママを聞いてくれてるだけだもん。日野くんが、

きれいな女の子しか相手にしないのだったわかってる！」

「だったら！」

「ずるいよ…聖はずるい！聖はママに似てかわいくて綺麗でいつもモテてるから、ブスな私

の気持ちなんてわかんない！今だっけかっこのいい城お兄ちゃんが彼氏で、男の子なんて

みんなかわいい子が好きなの知ってる！雅だっけ…私だっけ…聖みたいにかわいく生ま

れたかった！！日野くんは、私みたいな女の子でも一緒にデートしてくれてジェントル

マンで、やさしくっけ…聖が思ってるような人じゃない！聖のバカー…！！！」

涙でグチャグチャになった顔の雅は、自分で何を言っているのかわからなくなり、

ソファに置いてあるクッションを二つ聖に投げつけて、ものすごい勢いで走って

自分の部屋に入ってしまった。

追いかけてよとした聖の腕を俺は掴んで止めた。

「聖、今は一人にしてやれ…」

「だっけ…」

日野と一緒にいたことの不安と、聖が思うより雅は自分の顔のコンプレックスを強く抱いていたことへのショックで、聖は悲しそうな顔でソファに力の抜けた体をあずけた。

「雅は…ブスなんかじゃないのに…オレのかわいい妹で…」
聖が呟いた。

そうなんだよ、雅はブスじゃない。

ただ…兄の聖がかわいすぎるから比べてしまっただよ…。

聖が『特上の特上』だとすれば、雅は『中の中』だ。

普通にかわいい女の子だ。

「聖ちゃん？」

おふくろが聖の横に座り、話し出した。

「聖ちゃんの心配する気持ちは、とてもよくわかるわ。大切な妹ですものね。だけど、

聖ちゃんが思うほど日野くんって、悪い子じゃないわ。それは聖ちゃんより雅ちゃん

の方がよくわかってる。だから日野くんのことを好きになってい
ると思うの。」

聖が顔を上げておふくろの目を見た。

「それに日野くんに、というか、もし今の雅ちゃんが誰に恋をして
も、きつと聖ちゃんは

心配して反対すると思うの。日本ではあなたが雅ちゃんの親代わ
りでしょ？責任感持っ

るんでしょ？聖ちゃんは…。聖ちゃんは、雅ちゃんくらいの年の
時、恋をしなかった？

その人と一緒にいるときって、とてもドキドキしてウキウキして
楽しくなかった？」

おふくろは、やさしく聖の手を握り、顔を覗きこんだ。

「……うん…、オレも…好きな子がいた…その子と付き合ってた、

一緒にいるとうれしかった…楽しかった…」

ええ！初耳だよ！初耳！！おまえに付き合っていた子がいたなんて…

そいつは女なのかー?!男なのかー?!どんなやつだー!!知りたかったが、そんなことを問い詰めるような場面ではないのはわかっていたので、俺は我慢して、引きつった顔で聖を見ているだけだ。

「雅ちゃんと日野くんはまだお付き合いしてないし、日野くんの気持ちはわからない。

だけど、雅ちゃんは今とても楽しいと思うの。恋をしてる時の女の子ってかわいいのよ。

だから、少しだけ、雅ちゃんの応援しない?みんなでおふくろが言ったあと、俺も続けて聖に言った。

「聖…?俺、さっき、マンションの下で日野に会ったとき、アイツすごく心配しててさあ、

自分のせいで雅ちゃんが聖に怒られるんじゃないかって。アイツそんなに簡単に女の子

に手を出すような男じゃないような気がする」

少し経ち、俯いていた聖は黙ったまま立ち上がり、雅の部屋に向かった。

「もう大丈夫かしらね?」
おふくろが笑った。

聖は雅の部屋の前に立っていた。
中からはなにかドスドスと音がしている。

「雅……？」

聖がドアをノックして雅を呼ぶと、ドスドスと言う音が止んだ。

「雅？ごめん…兄ちゃん…おまえの気持ちわかってなかった、ごめん。
ん。

日野と付き合うなどは言わないけど、アイツになにかされたら、
すぐ言えよ。

兄ちゃん、アイツのこと叩きのめしてやるから！」
ドア越しに聖が言った。

少ししてから、内側からドアノブをカチャカチャと開けようとして
いる音がするが、
一向に開かない…
聖がドアノブを握って押した。

「聖……、えー……ん」

ドアの前に立っていた雅が、聖に抱きついて泣いた。
雅の両手には赤いグローブがはめてあり、そのままドアを開けよう
として、四苦八苦していたようだ。

兄の聖同様、雅の部屋にもサンドバッグが置いてある。
兄弟揃って体を鍛えている…ようだ。

何かにムカついたとき、雅の部屋からはいつもドスドスという音が
聞こえてきていた。

ブレイクタイム：雅の思い

……うげっ!!!

日野くんと楽しいデートの最中、携帯がなった。聖からだあ……。

携帯に出るやいなや怒鳴られた。

あっ、バレてる。

日野君といることバレてる……。とりあえず、切ってしまおう。

私は携帯を切り、電源をオフにした。

日野くんには適当にごまかしてデートを続けた。

でも、デートと言っても、まったくの私の片思いでいつも無理やり誘って遊びに連れて行ってもらっている感じ。

メールをしたり、電話で話したり、こうして時々遊びに行ったり、それだけだけど、他は何にもないけど、日野くんはジェントルマンでやさしい。

日野くんはいつもきれいなお姉さん達に囲まれているって、前に健児くんから聞いたことがある。

だから本当は、私みたいのを相手にしている余裕なんてないことくらい知ってる。

かっこいい日野くんが私とデートしてくれている理由……

それは、日野くんと城お兄ちゃんはお友達、そして日野君は聖が好きだった。

城お兄ちゃんと聖、この二人にとって私は大切な妹で、そんな妹を日野くんが邪険にできないから…

わかってるんだ、本当は私みたいな子と一緒に歩くのが恥ずかしいってこと。

たまた手が触れたりすると、日野君はパッとポケットに手を突っ込み下を向いてしまう。

だから、少しでも距離を置いて歩く。嫌われたらやだもん…

この日も6時前に日野くんはマンションまで送ってくれた。

エントランスにお兄ちゃんが待っていた。

聖が怒っているらしい。

日野くんは心配してくれたけど、城お兄ちゃんが「大丈夫だから」と日野くんに言い、

私とお兄ちゃんは家に戻った。

すぐに聖が10階から上がって来て、私の顔を見るなり怒り、日野くんをけなし始めた。

拳句の果てには、

「おまえの彼氏なら、オレが見つけてやる!」

頑固おやじのようなことを言われた。

パパでさえ、そんなこと言わないのに…

聖と話す気にもなれなくなった。

聖は私の気持ちなんて何もわかってくれない。

男なのに昔から「かわいい」とか「きれい」とか言われつづけ、男の子からも女の子からも

モテモテで、妹の私はそんな聖が自慢でもあったけど悲しくもあつ

た。

聖とママは完璧親子、私とパパは完璧親子、なんだか子連れ再婚した家族みたいな4人家族。

ママのDNAなんてちつとも私には入っていない…

みんなは「雅は普通にかわいい」と言ってくれたりするけど、絶対慰めにしか聞こえない…

「普通にかわいい」の意味もわかんないし。

聖と並んだ私は…超不細工な女の子だ…

いつもは冗談ぼく自分のコンプレックスを聖に言ったりしているんだけど、今日はなんだか日野くんをけなす聖に思い切り腹が立って、負けずに言い返して、クツションを投げつけて自分の部屋に走って逃げた。

聖が心配してくれていることはわかってる。

私が生まれた時、聖が「妹ができたあ」って一番大喜びで、毎日毎日小さい手で

もつと小さい私の手を握ったり、頭を撫でたりしていたとママから聞いたことがある。

大きくなった今でも聖は私を大切にしてくれている。

私も聖のことは大好きなお兄ちゃんだ。

だけど、今日は別。

聖は本当の日野くんのやさしさを知らない。

日野くんのことを知らなすぎる…

泣きながら部屋に入った私は、赤いグローブを手にはめた。

聖が「女の子でも体を鍛えておけ！もし男に襲われたときに役立つ！」と言って小学生のころから聖に護身術やカンフー、ボクシングを身に付けさせられた。

私は思い切りサンドバックを殴った。

腹が立ったとき、嫌なことがあったとき、叩いて叩いて叩きまくって精神安定をする。

「叩け！叩け！叩けえー！叩けえー！」

と誰かの声が耳元で聞こえ、疲れてフラフラになり床に寝そべってしまうと、

また耳元で今度はダミ声の誰かが叫ぶ。

「立て！立つんだ！雅　　！」

何かのマンガみたいだが、私の年代はそのマンガを知らない。

トントン…とドアノックの音が聞こえ、サンドバッグを殴っていた手を止めた。

聖のこもった声が、ドア越しから聞こえる。

ドアに近づき、私は黙ったまま、聖の話聞いた。

聖が淋しそうな声で謝っている。

私はドアノブを開けようとしたが、手にはグローブがはめてある。

取ればいいのだろうけど、そんなことに頭が回らなかった。

掴めないドアノブを必死に掴もうとカチャカチャとしていると、急にドアが開き目の前に

聖が立っていた。

聖を見たとき、涙が溢れてきて私は大好きな兄・聖に抱きついて泣いた。

そしてまた、時々日野くんを無理やり誘ってデートしている。

日野くんと会えば会うほど、切ない気持ちになっていくけど、ただのお友達でもいい、

日野くんと一緒にいると楽しいし…うれしい。

お友達のままでも…いい…。

だけど、叶うはずのない恋をしている自分に、時々泣きたくなる…。

第十四話 文化祭・麻衣子の短大

文化祭が目白押しになってきた。

聖の学校と麻衣子の短大の学祭が重なっていたが、土曜日に麻衣子のところに行き、

日曜日に聖の所を見に行くことにした。

麻衣子の学祭には、登戸君と井上と他、男5人で行った。

9月から始まった連ドラに出ている登戸君に、井上たちはえらく感激しサインをもらい写メを撮っていた。

登戸君は男子に囲まれ少し嬉しそうにしていたが、女性ばかりの麻衣子の短大に着くと、顔が残念そうになった。

登戸君は確実にそっちの男の子なんだと、この時俺は確信。

麻衣子に電話をすると、正門入り口まで来てくれた。

井上たちは、彼女の美しさにデレデレとしたが、登戸君は俺の腕にくっ付いたままだ。

麻衣子はそんな俺と登戸君を見て、クスクスと笑った。

俺たちは、金魚の糞のように麻衣子に付いているいろと見て回ったが、初めて入る女子の

花園に少しばかり浮かれてしまった。

弓道部に籍を置いている麻衣子は2時から実技を披露するという。みんなで昼ご飯を学食で食べたあと、麻衣子は部室に戻り俺たちは2時まで学内をうろつろつとした。

男5人で女子の花園を歩くのは、恥ずかしい。

登戸君は行く先々で人気者…というか、芸能人だから女子のみなさ

んから「キヤツキヤツ、キヤツキヤツ」と熱い眼差しと声援を受けていた。

が、俺の腕からは離れようとせず、くっ付いたままだ。そして、たまに俺の顔を見て微笑む。

2時に合わせて弓道の道場に行くと、静粛、厳粛な中、結構な人数が見学に来ていた。

俺たちも静かにその中に混ざった。

麻衣子は、はかま姿で、さっきまで下ろしていた黒い長い髪を一つに結んでいた。

俺たちに気がつき、口元を少しだけキュツと上げて微笑んだ。

麻衣子の番が来ると、彼女の顔つきが凜となり、集中力のすごさにこっちが緊張してしまった。

「足踏み」から始まり、矢を放つまでの一つ一つの動作をきれいな流れで行い、

「放れ」で、麻衣子の弓から矢が放たれると、シュツという音に俺の心臓はドキツと鳴った。

なんか、すごくかつこいいんですけど…

聖には言えないが、絶対言えないが、少し…ほんの少しだけ、心が揺れてしまい、

ポーーーーーツと麻衣子を見つめた。

登戸君にシャツの袖を引っ張られ、意識が戻り、登戸君を見ると、怖い顔で俺を見上げ

睨んでいる。

睨まないでください…こわいです…。

麻衣子はまだ次の回の披露が残っていて、一緒には帰れず、夜電話すると約束をし、

俺たちは女子の花園から後ろ髪を引かれつつお別れした。

あっ、登戸君だけは花園を離れたとたん元気になった。

ファミレスで夕食を済ませ、井上たちと別れた俺は登戸君を寮まで送って行く道すがら

聞いてみた。

「最近はどう、いじめられてない？大丈夫なの？」

「うん！他の寮の子たちが僕がいじめられてたのに気づいて、何かとかばってくれて、

いじめてたヤツも、もう何もしなくなったんだ」

「そうか、よかったな！」

「うん！城くん心配してくれてたんだあ、うれしいなあ」

そう言い、登戸君は俺の手を繋いできた。

「……登戸君：手は：まずいんじゃないかなあ……」

俺は苦笑いな顔で言った。

「えー、どうして？城くん、僕と手を繋ぐのイヤなの？」

お得意の上目遣いで少し唇を尖らせた。

「え？べ、別に：イヤとかじゃなくて……」

本当はイヤだけど、登戸君を落ち込ませるわけにもいかず俺は続けて言った。

「ほら：登戸君、ただいま売り出し中の芸能人だし、男の俺と変な噂出ちゃったら

事務所にも怒られるでしょ？だから……」

「じゃあ……」

と言いながら、登戸君は俺の腕を組んできた。

「いや、腕も…ちよつと…ヤバイんじゃない…」

「じゃあ、どうしたらいいんだよお！」

おいおいおい…泣き出しそうだ…

どうしよう…

「男同士だから、普通に歩いていれば…、それか、俺はよく仲間とかと肩組んだりはするかな？」

健児や石田とか仲がいいヤツとは、肩を組んでぶざけたりして歩いてるもんなあ。

俺の言葉に登戸君は、俺の肩に手を回した。

が、身長差が15cmほどあるため、なんか俺にぶらさがってるみたいだ…

それに、一生懸命背伸びして歩いてるみたいだし。

しょうがない……

俺は登戸君の手を外し、俺が登戸君の肩に手を回した。

「こつちの方が楽だろ？」

「うん！へへ」

うれしそうにされた。

えっ……？

なぜか、登戸君は俺の腰に腕を回し、歩いている。

「なんか、手を繋ぐより密着度があつてこつちの方がいいね！城くん！これで僕たちも

男同士に見えるよねー！」

…この構図は…男同士、仲間という感じではない。

自分で言い出した手前どうすることもできず、二人三脚競争のような感じの小走りで

なんとか寮までたどり着いた。

二人共なんだか少し息が切れている。

「じ、じゃ、ハアハア…登戸君、また…はああ」

「ハアハア…うん、城くん送って、くれて…ハア、ありがとう」

「仕事、大変だろうけど頑張れよ！」

「うん！！また時間ができたら電話するね！そしたらまた、男同士で歩こうね！」

登戸君はかわいく手を振り、スキップしながら寮に消えて行った。

俺は、どっと疲れが出た。

家に着くとまだ聖は帰っていないかった。

9時過ぎになり、俺は約束していた麻衣子に電話をした。

麻衣子が今度は俺の大学の文化祭に来たいと言い出し、聖たちが来る日とかち合わない日に約束をした。

「きつと、井上たちも喜ぶよ。麻衣子ちゃんが学祭に来るとさ！」

「あら、私は城くんがいればいいわよ。ふふふ」

そう言っただけ電話を切った。

麻衣子の言葉と、昼間のはかま姿の麻衣子を思い出して俺の心臓が、

またドキンツと鳴った。

「ただいま〜城！」

タイミングよく聖が帰って来た。

「おか、お、おかえり〜」

あせった…。

寝転がっていた体を起こし、なぜか俺は正座だ。

感の良い聖が、俺の顔をジーッと見た。

「な、なんだよ、聖……」

「な〜んだかなあ、なんか隠してない？オレに……」

「別に？何隠すことあんだよ。あつ、おふくろとおやじ今日行ったんだろ？聖の学祭。」

ファッションショーのモデルの中で、聖が一番カッコよかったつてうれしそうに話してたよ

俺は話をそらした。

「城、明日来るんだろ？オレ、がんばっちゃおーつと！」

伸びをしながらそう言い、俺に寄りかかって来た聖の顔を見て、俺は、さっきの事……

麻衣子の事を反省した。深く、深く反省した。

明日は雅と3Bの連中とサエドンとみんなで聖のファッションショーを見に行く。

第十五話 文化祭・聖の専門学校

俺は雅と一緒に、聖の学校正門の前で、本日都合のついた3Bのメンバーとサエドンと会った。

「おーい！城！雅！こっちだこっち！」

38歳のサエドンがジャンプをしながら俺たちに手を振っている。

「せんせ〜〜い！おとといぶりい〜。会いたかったよ〜ん！」

雅がサエドンに突進して行った。

サエドンは今、雅の担任だ。

二人で熱き抱擁を交わしている。

……珍しいよなあ、先生と生徒のハグって。

相変わらず、サエドンは生徒の受けがいいらしい。

俺たちが在校していたときも、生徒たちから熱い支持を受けていた。

「よっ！大岡！今日の僕のコスプレ！どうだ！！！」

い、石田…、もうサーファーには飽きたのか…

夏が過ぎたら色白か…、おまえも忙しいよなあ…

今日の石田は、韓国ドラマ「冬のなんとか」という、女性の心を力一杯根こそぎ持って行った韓流スターの出で立ちだ。眼鏡も掛けている。

もうその格好は古くないか？

という疑問を飲み込み、「似合う…よ」と引きつり笑いでいうと、まんざらでもない顔で

「だろ？だろ？」と、顔を35度ほど斜めに顔を上にあげ、目を細め、胸に手を置き、遠くを見た。

…なんにも言つてやれない。勝手にやつてくれ…石田。

俺たち20人はぞろぞろと連なり、校舎の中に入った。

「うおー、すごいな！ぎよえーなんじゃありゃー！」

サエドンは初めて見た服飾関係の学校の生徒たちの格好に、一つ一つ驚きの声を発し、

周りの人からチラチラ見られ、石田が「先生、恥ずかしいから静かにしてください！」

と注意をしていた。

石田…チラチラ見られているのはおまえのそのコスプレのせいでもあるんだぞ！

「この学校にも野球部があるのか！？でも頭に×が付いている！どいうことだ！」

目の前を通り過ぎて行った男子学生を見て言った。

サエドンにとっては、B系坊主頭＝野球部のようだ。

俺たちは最後の回のファッションショーを見るため、時間までうるちよろし、

途中で聖と合流し、高い第一校舎の最上階にあるカフェに行くことにした。

「聖くん」

「聖ちゃん」

「きゃー、聖くんだあ」

「よう、聖！」

などと、通り過ぎるクラスメイトや他の科の学生たちに声をかけられていた。

学校内のすべての学生が聖を知っているようだった。

…人気者なんだ…聖…

声をかけられては愛想良く笑っている聖に、俺は異常な嫉妬にかられ、顔がどんとと険しくなった。

「どうしたんだ？城」

「あゝあゝ？！」

「恐えーな…なんだよ」

声をかけてきた健児をおもわず睨んでしまった。

カフェで話しているうちに聖のショーのスタンバイ時間になるころ、ちょうど俺たちと同じエリアにいた同じくモデルをしている男子が、聖に声をかけてきた。

「聖、そろそろ行くぞ！次が3日間の最後だから頑張るぜ」

「おう！じゃあ、みんな見てくれよなあゝ。あとでな！」

と、聖は手を上げて俺たちに背を向けた。

そして、同じモデルの男子がこともあろうか、聖と肩を組み、カフェ出口で振り向き、

こっちを見て微笑んだ。

「んなっ！！」

思わず、俺は椅子から立ちあがった。

「はいはい、落ち着いて、シッターンプリーズ！お兄ちゃん！！」
雅に言われた俺は口をパクパクさせたまま、座りなおした。

聖が席を立ち、少ししてから俺たちも会場に向かった。

広い学校敷地内の一角に建てられている大きな講堂に入ると、多くの人で埋まっていた。

この学校のファッションショーは、全て学生の力で開催されるが、プロ顔負けの演出とモデルだと業界でも有名で、招待客も一流デザイナーの人と呼ばれる顔もチラホラ見えた。

そんな中に交じりながら俺たちは招待席に着いた。

照明が暗くなると音楽が鳴り、ファッションショーが始まった。舞台中央から衣装を着たモデルが次々と出てくるとそれは、華やかな世界。

聖がメンズ服で出てくると、ファッションショーにも関わらず女子の黄色い声援が上がった。

うっ、やっぱり人気者なんだ…

また嫉妬にかられる。

男だから当たり前なのだが、メンズ姿の聖はカッコイイ男だ。惚れ直した。

聖が出てくるたびに声援があがり、それに合わせ聖は俺たちの方をみては…

たぶん俺を見てだと思いが、ウインクをしていく。

デレエ〜。

「お兄ちゃん、ヨダレ…拭いた方がいいよ」

「はい…」

雅が冷たい視線で、ティッシュをくれた。

最後はウエディングドレスで締めくくりだった。

女のモデル6人がカクテルドレスを着て出て並び、その真ん中から長いベールを頭にのせ、白い純白の裾の長いウエディングドレスの女と薄いブルーのタキシードを着た男が出てくると、会場が大盛り上がりになった。

男のモデルは、さつきカフェで聖と肩を組んで去って行ったやつだというこがわかった。

女のモデルは…は…聖…だ…。

かわいすぎるうううううう。

鼻、鼻血…。

雅がまたティッシュをくれ、俺の後ろ首筋をトントンと叩いてくれた。

「あ、ありがとう…」

キャットウォークを歩いてくる聖に釘付けだ。

サエドンや健児たちの指笛でピーピーうるさいが、そんなノイズは俺の耳には入って

こない。

キャットウォークの先端まで来ると、男子モデルが聖をお姫様抱っこしクルリと回った。

聖はうれしそうに笑っている…

笑いながら俺に手を振った。

何お姫様抱っこされて嬉しそうに笑ってんだよ！

それに、その男！俺の聖に触るんじゃないー！

叫びたかった…

俺の手は膝の上で拳になっている。

ただのショーだとは、わかっているが、ものすごく相手の男が憎らしい。

隣の雅に「まあまあ、お兄ちゃん！落ち着いて！聖はお仕事お仕事！」

と、肩をポンポンと叩かれ慰められた。

雅：おまえは本当に16歳なのか？

人生悟ったようなその人の心を読めるような落ち着き方。

未恐ろしい女だぜ。

ショーが終わり、3日日間の学祭を終えた聖は、学校の仲間と打ち

上げで俺たちとは別行動になった。

俺たちはサエドンのおごりで居酒屋で飯を食ったが、俺は無口だ…

夜遅くに、聖が帰って来て俺が機嫌悪くブチブチと文句を言つと、

「あいつ、彼女いるから！それに俺の彼氏、城だって知ってるよ？
カフェから出るとき

「教えたんだあ」

「えっ？そっなの？そっなの？そっなのかあ〜〜」

俺のご機嫌は、もの見事にすぐに直った。

第十六話 文化祭・城の大学

俺の大学の文化祭。

聖たちが来る日、健児と校内のベンチに腰を下ろしていると日野が来た。

「オッス！日野ちゃん〜」

健児が片手を挙げた。

「おう！健児くん！城くん！」

「あつ！城くん！コレ〜」

日野はポケットから紙を出して、俺の顔に押し付けた。

…… 毎度毎度、このパターンかよ。

聖が男とわかり、諦めたので挑戦状はなくなると思っていたが、なんだか日野は俺と戦うのが楽しいらしく、たびたび紙を取り出しては俺の顔に押し付けて来る。

「だから！見えね〜って〜てんだろ〜が！！なんだよ、今回は……」

一応、紙を取り上げ読んだ。

『文化祭名物、炭酸飲料500ml早飲みゲップ大会！賞品：炭酸飲料3ダースと胃薬』

……話になんね〜よ。

炭酸飲料をより早く飲み干し、ゲップの長さを競う、というものだった。

「やだよ、こんなの…なんでみんなの前でゲップしなきゃなんねんだ？

はずかしいよ」

「今日の午後3時からなんだ。オープンステージのところ！」

日野は元気に言った。

「だから、やだよ」

「もう、城くんの名前もエントリーしといたから！」

「あああああ？」

ガッツポーズの日野に紙を丸めて投げたと同時に携帯が鳴った。

麻衣子ちゃん？

「もしもし？え？うん、構内にいるよ、今……ええー！ー！ちよつと、待って！」

あさつての約束じゃあ……えつ……？そ、そうなんだ……今行きます……俺は頭をかきながら携帯切った。

「どうした？城」

健児と日野が俺を見て聞いた。

「あ、うんちよつと、友達が正門に来てるって……」

麻衣子との約束は明後日だった。

が、急に親戚の家族が明日から東京に来ることになり、時間が取れそうになくなったので勝手に今日、来てしまった……ということだ。

どうしよう……あと一時間くらいで聖たちが来る。

俺は健児と日野に「ちよつと行って来る」と言い、井上に電話をかけながら正門に向かい走った。

「ええー！ー！井上……まじかよ……」

井上に、自分のサークルの仕事をしていた3時までには抜けられないと言われた。

走って正門に着くと、笑顔の麻衣子に手を振られた。

「ごめんね！急に来ちゃって！忙しかった？今日」

「え？いや、別に…忙しくはないけど…ハアハア…」

「じゃ！早く案内して？行こ行こ！」

麻衣子が少し息の切れている俺の腕を組み、構内に入りうると一歩踏み出した時、

健児と日野がこっちに向かって来るのが見えた。

え？どうしたんだ？あいつら…

「じょーう？」

マイナス10000 ほどの冷たい声が後ろから聞こえた。

…青い…絶対今の俺、青い顔になってる…っつーか、消えたい…

聖の声だ。

振り向くのが怖い…

麻衣子とのこの腕組みがなければ、なんとか言い訳が出来るが、無理だ！

勇気を振り絞って、俺は振り向いた。

「あつ！日野く~~~~ん」

雅が日野に向かって手を振りながら俺の横を通り過ぎた。

俺を睨んでいる聖の今日の格好は女装子。

聖は先日、髪にエクステを付けて少しロングにしていた。

なんでまた今日、女になってんだよ…メチャクチャかわいいし…

万が一コンパの席で一緒だった井上達に会っても大丈夫なように女で来たらしい。

井上達はまだ聖が男と言うことは知らない。

「ど、ど、どうしたの？ひじ、聖…まだ来る時間じゃあ…」
「雅が早く日野に会いたっていつから早く来たっ！！！」
下に下ろしている両手はグーで、完璧声はマグマの怒りだ。
麻衣子は俺と腕を組んだまま顔が「？」になっている。
「城くん？この方…？」

「あつ、えーと…」

麻衣子に顔を覗かれ、聖にガンをたらされ、俺は汗だくになって気が遠くなりそうだ。

あ~~~~もう！どうでもなれー！！

俺は麻衣子の腕を外し、聖の隣に行き言った。

「俺の彼女…聖…です…う」

もう、声に力なんて入らない。

「そうなんだ！私は麻衣子です。城くんのお友達なの、よろしくね」
麻衣子は驚く様子もなく聖に握手を求めた。

「聖で〜す。城がいつもお世話になってま〜す！」

聖の顔が天使の微笑みに変わり、麻衣子と握手を交わした。

みんなに麻衣子を紹介し、麻衣子にみんなを紹介した。

「今日のオレ、かわいいだろ？ん、ん？」

かわいい…いつもかわいいよ…うん。

「ところで、城。オレがこの時間に来なかったら、おまえあの女とどうして

「たんだよ！オレに内緒でどうしようと思ってたんだよ！ああ？」
「別になんもしねーよ。だから、ちゃんと聖のこと彼女だって紹介しただろ？」

前を歩いているみんなの後ろでゴチャゴチャと揉めていると、麻衣子が振り向いて言った。

「ねえねえ、城くん、この間うちの学祭に登戸君連れて来たじゃない？

なんか、みんなすごい喜んでたわよ？校内の掲示板にも写真が張り出されて

みんな奪い合いだったの、ふふふ」

「はあ？！なんでこんなところで、聖がいるところで言っちゃうんだよ…」

聖には内緒だった。登戸君と会ったこと、麻衣子の学祭に行ったこと…

聖は俺の脇腹を握力MAXでつねり、「麻衣子さんの学祭、私も行きたかった」

と笑顔で麻衣子の横に行き、二人でおしゃべりを始めた。

俺は横腹を押さえ、ヨレヨレとみんなの後を追った。

「なんか、短大の文化祭とはやっぱり違うよね？大学って！私も四大にすれば

良かったなあ」

麻衣子がきれいな笑顔で、うらやましそうに言った。

「やっぱ、麻衣子ちゃん、きれいだなあ」

「あ~~~~いかにいかに！俺には聖がいる！

聖に笑って見せたが、無視された。

バ、バレている…俺の心の中。

第十七話 文化祭・日野の告白

「雅ちゃん、そんなに食べてばかりだとお腹壊すよ?」

「だっておいしいんだもん」

模擬店で買った食べ物を両手に持ち、パクパク食べている雅の姿を見て、

日野が楽しそうに笑っている。

「ははは〜ケチャップついてるし」

日野が雅の口元に付いたケチャップをティッシュで取ってあげていると甘ったるい声が聞こえた。

「日野くうくん、城くうくん、ついでに健児っ!」

なぜか健児だけは呼び捨てで、『ついで』呼ばわりだ。

清純な名前とぜんぜんマッチしないマーガレットが数人の女子と現れた。

「日野くうくん、探しちゃったあ。携帯電話しても出てくれないんだもん!

マーガレットつまんなあ〜い」

と、どこをどう押したらそんな声が出るのかと思わせるような、小さい子が履くキューキュー鳴るサンダルのような声とブリブリにブリった動作で日野に絡みながら言った。

そのあと、聖と麻衣子を見て、自分達では、そこそこイケていると勘違いをしている彼女たちは、一瞬後ずさり、顔が引きつったが、マーガレットだけは気を取り直し、日野に執拗に絡む。

「もう〜、一緒にあっち行こうよあ〜」

「僕、彼達と一緒に回ってるから、君たちとはパス!」

日野は真面目な顔で言った。

「…え？や、やあだあ日野くんだったら！こんなチンチクリン子ちゃん相手にして！

ボランティアでもやってるわけ？日野くんにお似合いなわけないじゃない、

ねえーチンチクリン子ちゃんーん？」

聖と麻衣子には勝てないと思ったのか、ターゲットを日野の横にいた雅にしぼり、

雅の鼻先に指を押し付けた。

「ああ？！」

「あゝあゝ？！」

「あんだって？！」

「ああ？！」

「ちよつと？！」

日野と俺と聖と健児と麻衣子が同時に言った。

雅は持っていたフランクフルトを下に落とし、口を一文字にし、瞳に涙をためたまま走って行った。

「雅！」

「雅ちゃん！」

俺と聖が追いかけてようとした時、日野がマーガレットに怒鳴り、俺たちの足が止まった。

「ざけんなよな！マーガレット！雅ちゃんは僕の大切な子なんだ！！

おまえらとは違うんだよ！！とつとと消える！！この狸　　！！
いつもの日野とは思えない言葉使いだった。

「……………どういうことだ？」

「……………いつの間だ？」

俺と聖が口を開け、顔を見合わせている間に日野は雅を追って行った。

「たぶん…オレが思うに…日野はまだ告白はしていないがあ、雅ちゃんが好き」

「なんだなあ…きつと！ここ最近、講義中でも雅ちゃんの話を楽しそうにして」

「いたからなあ、うんうん」

健児が一人うなずき言った。

「マジ？」

「まじにい？」

「うん！マジ！マジ！」

健児がピースをしながら笑った。

日野は雅を追いかけた。

運動神経抜群の雅は以外に足が速い。

「雅ちゃん！待って！待つつつてえええ〜」

息が切れかけている日野の声を聞いて雅が立ち止まった。

「ハアハア…ハア…」

息が切れて声が出ない日野に、雅は背を向けたまま下を向いている。

「雅ちゃん…ごめん。さっきの子達の言うことなんて気にしないで

…」

「うん…気にしてない…わかってるもん…雅、チンチクリン子って自分で知って

るから、人に言われても大丈夫だも…ん…」

「雅ちゃん…？」

「日野くんが私に付き合ってくれてるのは、ボラ、ボランティア…っていうことも、

わかってる…もん…」

ものすごく涙を堪えて話しているのがわかった。

日野は雅を自分の方に向かって、自分の胸の中にすっぽり収めて言った。

「あのさあ、雅ちゃん、知ってる？僕の本当の気持ち…雅ちゃんと会って映画

見たり、食事したり、ショッピングしたりしてる時、ものすごく楽しいんだよ？

一緒にいて楽しくて楽しくて仕方がないんだ。二人で出かけたときだって、

本当はもつとずっと一緒にいたいけど、雅ちゃんはまだ高校一年生で、ちゃんと

6時間にはお家の人に送り届けなきゃならないでしょ？」

日野は本当は真面目な人間だった…

「大事にしたいんだ、雅ちゃんのこと。好きだから…大好きだから、大切にしたいんだ。雅ちゃん、わかってくれる？」

「ひ、日野くーーーーん~~~~」

雅がやつと声を出して泣き出した。

日野はやさしく笑いながら雅を強く抱きしめた。

「日野と雅ちゃんの恋も成就したか！よかったよかった」

「なんか、一件落着か？おふくる喜ぶだろうなあ、おやじは泣くか

…」

「ホツとしたといえば、ホツとしたけど…兄としては複雑だ…」

「あゝなんかいいものを見せてもらったわ！今日来てよかったあ……、
つて兄？」

俺達四人は陰から二人を見て、小さく指先で拍手をしていた。

第十八話 文化祭・城と日野

雅と日野の様子を伺いながら、加減のいいところで俺達四人は二人のところに
行った。

雅は、涙顔だったが嬉しそうに笑っている。

聖を見ると、「まっ、しょうがないか」みたいな顔で雅を見て微笑んでいた。

「あつ…！」

日野が自分の腕時計を見た。

「大変だ、城くん！出陣の時間だ！」

「へっ？」

なにが？

「もうすぐ3時になる！」

「ああ？！……い、いや、俺出ないって言っただろ！」

「まあまあ、そう言わずに！！早く行こう！」

健児がみんなに「炭酸飲料500ml早飲みゲップ大会」の説明をしている中、

俺は日野に無理矢理腕を引っ張られ、オープンステージに連れて行かれた。

日野は楽しそうに俺と自分の名前を告げ、番号札を貰い俺の左胸に付けてくれた。

……本当に、参加するの？やだよおおおお、俺。

参加者は37人。

1回戦で上位10人に絞られ、2回戦で優勝が決まる。

「見物客も結構な数だぞ。…こんな中、ゲップすんのかよ…
見てるヤツらもいやじゃないのかよ、37人のゲップ聞いてどう
すんだよ」

俺はブツクサ日野に向かって言ったが、返事がない。

「日野？」

「話かけるな…大切なゲップが今出たら困る」

「はああ？……………そんなもん貯めんなよ…」

日野、おまえ…何か間違ってる。絶対、人生間違った方向へ行こう
としているぞ！

言っただけだが、「精神統一中」と一点を見つめる真剣な顔なの
で言えない。

日野が18番目で俺は19番目。

参加者は当たり前だが、男ばかりだ。

みんなお笑いサークルや芸人になりたいとか、そう言う面白系の人
ばかりの中、

中盤で出場したイケメンの日野と俺は、女子たちの熱い拍手と声援
を受けた。

日野の結果は、中々いい線をいっていたが今のところ5位だ。

会場のベンチに座っている雅は大受けて、日野の名前を叫んでいる。

俺の番が来た…

ものすごく恥ずかしい…

人前でゲップだよ？ありえねーよ…

それも、ついうっかりとかじゃなくて、故意的にだよ？

聖は「優勝しろよ！」みたいな顔をし、麻衣子はメチャクチャ楽し

そつに手を
振っている。

スタート！

と、合図が出て飲み始めたが、結構キツイ。
一気になんて飲めなくて数回にわけ、腹をガボガボにしながらも、
とりあえず飲み干し、すぐにマイクの前でメチャクチャ気弱なゲッ
プを披露した。

結果は…15位だ…予選落ち。
少しホツとした、次に進まないで済む！

参加賞の炭酸飲料一本を貰い、聖たちのところへ行き、参加賞を聖
に渡した。

「ほらっ、参加賞。あーまだ胃の中チャポンチャポン」

「がんばりが足りないんじゃない？」

「おまえが懸かってないからいいじゃん」

「えっ……」

俺の言葉に聖が、照れたのがわかった。

日野は5位のまま2回戦に出ることになった。

10人一人一人にインタビューが始まったが、日野は無口のまま微
笑みだけを返している。

それがまた女子にはクールに映っているのか、黄色い声援を受けて
いた。

喋りたくないんだよなあ、きつと。大切なゲップが出たら大
変だもんな。

俺だけが知っている無口な日野の理由…

雅は「日野くーん！ガンバ！！」と一生懸命応援していて、なんだかその姿がものすごくかわいくて、俺はうれしくなった。

日野は雅の声援通り頑張ったが、2位だった。

2位の賞品・胃薬と参加賞・飲料水一本を持って戻ってきた。

「雅ちゃんにカッコイイところ見せたかったのになあ…」

日野がポツリと俺に言った。

「ゲップでかあ？」

日野！やっぱり、おまえは間違っている…

そして雅！おまえはこいつで本当にいいのか…！

第十九話 桜貝の思い出

えー、今の状況を説明いたしますと…
12月最初の日曜日です。

俺はおやじに借りた車を運転中。

助手席には聖が座り、後部席は雅と日野が座っています。

海に向かって車を走らせております……

……つて、なんでこの寒空に、

それも海にバーベキューしに行かなきゃなんねんだよー！！
運転しながら思っていた。

相川が急にBBQをしたいと言い出し、石田が豪華BBQセットを
持っているから

みんなで行くこうと話が持ち上がった。

俺の運転する車の5メートルほど前には、健児の7人乗りのバンが走
っている。

乗っているのは、健児、石田、相川、麻衣子…そしてなぜか…登戸
君…だ。

バンの最後部席に一人で座っている登戸君が、ずーっつと後ろ
を向きっぱなしで、俺の方を見ている…そして、時々目を合わすと
手を振ってくる。

俺の横に座っている聖には、「ベー」とする。

すかさず、聖は登戸君に向かってフロントガラスに腕を伸ばし、中
指を立てる。

「それはやめろよ、聖。下品だぞ」

「うっせー！ーんだよ、登戸にはこれくらいやってやらねーと調子

にのる
「……」

できるなら登戸君、ちゃんと前を向いて座っていてくれ…。
こつちを見ないでくれ。
運転しずれー！ー！。

「帰りは、登戸君こつちの車に乗せてあげた方がいいんじゃないの？
なんか

かわいそう」

「雅ちゃんはやさしんだね？いい子だね？」

「えへ！」

同情し始めた雅のことを日野が褒め、雅は照れる。

「ああ？雅！余計なこと言うな！いいんだよ、あいつは健児の車で
！」

聖が怒り出す。

「だってさあゝ、うらやましそうに、ずっとこつち見てるし。子犬
みたい…」

「うっせ、うっせ！黙れ雅！」

聖はそう言うともまたフロントガラスに手を伸ばし、登戸君に中指を
立てた。

「だから、下品なことは、やめろって」
そんな事を繰り返しながら、海に着いた。

車を降り、健児たちの方に行くと麻衣子に言われた。

「お天気良くてよかったわね。空なんて真っ青だし」

「うん、ちょっと寒いけどね。でもメシ食ってエネルギー蓄えたら

体も暖まるか」

「城くくくん、僕、寒いつー!!」

「……」

登戸君がヒシツと俺の背中に抱きついてきた。

それを見ていた聖が、「じょく、さむい〜い」 と俺を前から抱きしめる。

俺：サンドイッチの具ですか…？タマゴ？ハム？サーモン？

「ほらっ、荷物下ろすの手伝おうぜ…」

俺が言うが、二人とも離れない。

麻衣子は笑いながら、健児たちのところに手伝いに行き、俺はしかたなしに

サンドイッチの具のまま、横歩きでBBQの食材を車の後ろから取り出した。

どうにか二人を体から剥がし、それぞれに荷物を与え運ばせた。

はあああ、疲れてきた…もう、帰りたい…

俺の心境だ。

思う存分BBQを食べた後、それぞれに話したり、波と戯れたり、なんだかリラックスしていた。

石田はカメラを三脚に立て、海をバックに地球の果てを指差すようなポーズや、腰に手をあて海に向かって「はっはっはっ！」と笑っ

ているようなポーズなどを自動シャッターで撮っている。
今、あいつは「石田くんのステキな思い出日記」という自分のブログにハマっている。

健児と相川は、海「ビーチボールを楽しんでいた。

相川も冬はやはり寒いのかダウンを着ている、が、中はお決まりの黒いランニングシャツ一枚だ。

彼女がほしいと言っているわりには、女の子受けしないランニング姿なんだよなあ。

石田と相川を見ていると、不思議なことに、おちゃらけてお調子者の健児が普通の人間に見える。

俺と麻衣子が話していると雅が来た。

「ほら！見て、お兄ちゃん！かわいいでしょ？日野くんが見つつけてくれたんだあ」

パツッと開いた雅の手の平には、小さなかわいいピンクの桜貝が乗っていた。

「あら、かわいい。こんなの落ちてるの？」

「うん。結構あるみたい。まだ日野くん探してくれてるんだあ」
麻衣子に聞かれた雅は、うれしそうにその桜貝を太陽に向けた。

雅はみんなに見せて回っていたのか、登戸君が俺のところに来て言った。

「城くん、僕も貝がほしい！探して？」

あああああああああ？

なんで俺が貝拾いなんてやんなきゃなんなんだよ…ったく。

と、心で思いつつ、腰を上げて砂浜で貝探してるし…今の俺…。

ちつちええーんだなあ、桜貝って。
俺は一人トボトボ歩きながら見つけた10個ほどの桜貝を砂の上に並べた。

「城　　！おやつタイムだぜ！来いよー！」

健児に呼ばれ、桜貝を持って、みんなのところに戻った。

おやつは麻衣子がつけてきたクッキーと一番重いアイスボックスに入っていた

バケツプリンだ。

よくこんなバケツ冷蔵庫に入ったよな…

「あつ、ほら麻衣子ちゃん、これ。きれいなやつ選んだから」

俺は麻衣子の細くてきれいな手の上に桜貝を三つ乗せた。

「え？あ、ありがとう…いいの？」

「ん？うん、もちろん」

なぜだか麻衣子はものすごくうれしそうな顔をしてくれた。

クイツクイツと俺の袖が引つ張られる。

登戸君…。

「ほら、登戸君はこのデカイのあげる。見つけた中で一番デカかったんだよ！」

「ええー！いいのお〜こんな大きいのお〜」

そう言つて大喜びの登戸君は、聖をチラッと見て少し顔を上げ、ニツとしたあと、

雅に自慢しに行った。

俺が登戸君にあげたのは、たぶんどこかのグループが磯焼きにでもして食べた後のホタテ貝の殻だ。少しこげていた。

一応ちゃんと海水で丁寧に、綺麗に洗ったから大丈夫と思われる。

本当は蛎の殻もあったが、形的にはホタテの方がかわいかったので

ホタテにした。

隣に座っている聖の頬が膨らむ前に、聖の手をとり、手を開かせて桜貝を一つ

だけ手の平に乗せた。

「聖はこれ。探した中で一番ピンクだったし…ちょっとハート型みたいだろ？」

「へへへ、さんきゅう！」

ニンマリ笑う聖の肩に腕を回して頭をポンポンと叩いた。

「ほんと！仲いいんだあゝ二人！」

俺たちの光景を見ていた麻衣子が微笑みながら言った。

「ふふふ、今のところ聖だけだから、俺」

「あんだよー、今のところって！」

聖が俺の頬をつねってきた。

「痛えくな、うそだよ。ずっと聖だけだつて！ははは」

「つたりめーだろ！」

麻衣子の前なのに、聖の話方が男に戻っていることに俺も聖も気づいていない…。

夕日が半分海に隠れたころ、海をあとにした。

えー、今の状況を説明しますと…。

運転席に俺。

助手席に聖。

ここまでは往路と一緒…

後部席右側に、大口を開けて爆睡中の相川。
後部席左側に……登戸君…。

雅が勝手に登戸君を乗せてしまった。

俺…、運転し始めてからずっと、後ろ斜め左側から視線を感じてる
んですけど。

「城くん、今度は助手席乗せてね！」

登戸君が身を乗り出して俺の耳元で言った。

「うっせ！オメーはそこで充分なんだよ！この車に乗せてもらって
るだけでも

ありがたくおもえ！けっ！！」

「聖…：下品だからやめろ…：それは」

俺は運転しながら片手で聖の中指を握ったら、俺の手の上になぜか
登戸君が手を乗せてきた。

『この指とまれ』じゃんですけど…

運転しずれー！。

麻衣子にあげた桜貝三つは、小さい小瓶に入れられ麻衣子の部屋に
飾られた。
登戸君にあげたホタテ貝の殻は、アクセサリーを乗せられ部屋に飾
られた。

聖にあげた一番ピンクでハートに近い形の桜貝は……

「あれ？おかしなあ……」

海から戻ると、聖が鞆の中やポケットの中をバタバタと何かを探している。

「どうした？何探してんの？」

「え？……ん……」

と言いながら、探しまくっている。

「何？」

「え、……ん……桜貝……」

聖が言いにくそうに言った。

俺のあげた小さな桜貝を失くしたようだ。

絶対ポケットに入れたと何度も探している。

「どこかに落しちゃったんだよ。スゲー小さいかったし」

「だけど、ポケットにちゃんと入れたんだぜ！せっかく城がくれたのに……」

「いいよいいよ。もう探さなくて」

「でもさあ……ごめん……」

すまなそうに謝る聖を抱きしめて言った。

「また海行こうな……今度は二人だけでさあ。その時は一緒に桜貝探そうぜ！」

「あらまっ。かわいい桜貝、少しだけハート型だわ」

「聖ちゃんか雅ちゃんのじゃないか？この間、海に行った時の」
「そうね、後で渡しておくわ」

おやじの車の助手席の隅に挟まっていた。
おふくろ！よくぞ見つけてくれた。

ブレイクタイム：日野の思い

「うつつつそおおおおおおおおおおおおおおおお」

僕は…、横縦町の一番北の外れにある、やお屋・やお八の店の前まで飛ばされた気持ちだった。

聖ちゃんが…おと、おと、おーとーこーこー！！だったことに…力が抜けた体を健児君に預けてしまった。

あの日、城君と横縦神社での『第1回 横縦町 たて笛大会』の戦いの日を迎えていた。

ひさしぶりに会った聖ちゃんは、やはり、かわいくて美しい。

僕に似合うのは彼女だけだ！！

…と、思っていたが、どんでもない事態を迎えてしまい、僕の恋は終わった。

ついでに華々しくデビューを飾ろうと思っていた『たて笛大会』も、演奏中に鼻を嚙ってしまいその後「ピィ〜」などと五線譜表中にも書くことができないような音を出してしまい、『恋』も『たて笛優勝』も、すべて軽やかに散った…。

少し立ち直るのに時間はかかったが、聖ちゃんの妹・雅ちゃんがその後も、メールや電話でいろいろ慰めてくれて、僕はやっと元の「イケている日野万太郎」に復帰することができたのだ。

その頃からだんだんと雅ちゃんと二人で会うことも多くなり、今まで僕の周りにいないタイプの素直で純粹、よくよく目を凝らしてみると「かわいい」雅ちゃんに心を奪われていった。

雅ちゃんも僕に気があるのは薄々感じてはいたが、しかしながら、雅ちゃんはまだ高校一年生だ。

見た目も子供っぽい。
そんな彼女に手を出すわけにもいかず、僕は高一女子にプラトニッククラブだったのである。

何度も告白したい衝動にはかられていたが、彼女がもう少し大人になるまで待とうと決心した。もしその間に雅ちゃんが他の男に走ったとしたら……などという考えてしまい夜も眠れない日もあったが、我慢に我慢を重ねた。

しかし、僕は中国から来た仙人から告白のチャンスを与えられた。ちなみに『中国から来た仙人』とは、僕の心の中の神さまのことである。

まぎらわしくて失礼……。

大学の文化祭の日のことだ。

雅ちゃんと聖ちゃんが文化祭に遊びに来て、雅ちゃんはケチャップを口の周りに付けながら、フランクフルトをおいしそうに食べていた。

少し想像してしまった……いけないいけない、僕としたことが！はしたない！！

気を落ち着かせ、僕がケチャップを取ってあげていると、目の周りがかいつも黒い寝不足か？みたいな顔のマーガレットが、こともあるうか僕の愛するかわいい雅ちゃんのことを「チンチクリン子」などと言いやがった……いや、言ったのである。

雅ちゃんは大切なフランクフルトを落として走って行ってしまった。

生まれてこの方、女性に対して怒鳴ったことなどないジェントルマンな僕だが、怒り爆発でマーガレットを怒鳴り、雅ちゃんを追いかけた。

走りながら思った。
雅ちゃんを小バカにされ、本当に悔しくて、腹ただしくて激怒している自分。

『僕は雅ちゃんが、大好きなんだあああああああああ』

心の中で叫び、走る雅ちゃんの後を追いかけた、が、彼女は異常に足が速い。

高校ではリレーの選手なのかもしれない…

追いつけそうもなかったので、息もカラカラ、雅ちゃんの名を叫んだ。

雅ちゃんは、立ち止まってくれたが、僕のほうを向いてくれない。

雅ちゃんの小さい肩が震えていて、涙声で一生懸命自分を腐していた。

僕は耐えられない。

雅ちゃんはかわいいのに、どうしてそんなに自分をけなすのか…

そんな時、僕の耳元で中国から来た仙人が言ってくれた。

「万太郎、そろそろ告白してもいいぞよ〜ふおふおふおおおおおおおお」

僕は雅ちゃんを振り向かせ、抱きしめて告白した。

やっと「好きだ」と言えた。

そして、雅ちゃんは僕の腕の中で泣いた。

この日、3時からエントリーしていた「炭酸飲料500ml早飲み

ゲップ大会」。

雅ちゃんにいいところを見せようと頑張ったが、彼女の応援も空しく、僕は2位という残念な結果に終わってしまった…
振られたらどうしようかと不安になった。

だけど、雅ちゃんは今日もかわいらしく僕の横に座って、僕が見つけた桜貝を眺め、
うれしそうな顔をしてくれている。

第二十話 クリスマスは家族で…？

街には、子供や学生、恋人同士の楽しいクリスマスがやって来た。

俺たちは毎日がイベントなので、クリスマスも別に重視していない。イブの昼間、普通の日と変わらず過ごした。

雅と日野は「イブ特別プレゼント」として、聖から9時までの外出を許可され、二人で

「ポンポコポランド」に仲良く手を繋ぎデートに行った。

イブの夜、部屋に戻った俺は聖とテレビを見ていたが、途中でリビングから離れ、自分の部屋に入り、クローゼットの中に隠しておいた、赤と緑のリボンの付いた箱を取り出した。

聖には内緒にしておいたクリスマスプレゼントだ。

中身は洋裁で使う「マチ針・120本」

ただのマチ針とは違う！特別バージョンだ。

針の頭の部分に付いている留め具の表に「聖」裏に「城」と刻印されているオリジナル、

世界で一つのオリジナル。

聖が学校でこのマチ針を使うたびに俺を思い出すように、顔の広い石田の知り合いの工場さんで作ってもらった。

ロット数が少ないから結構高額だったが、石田の紹介ということで少しばかりディスカウントしてくれた。

俺はそれを後ろポケットに突っ込み隠し持ち、リビングに戻ったが、ソファに聖がない。

どこ行つた…聖…？

「城！」

呼ばれて振り向くと聖がさっきまで着ていなかった黒ベースの大き目のセーターを着て、立っている。

「ん？」

聖はそのセーターを脱ぎ俺にかぶせた。

「メリークリスマス、城！プレゼントだ、オレのお手製だぜ」

ま、マジかよ、メチャクチャうれしいぜ！！
ウホウホしながらセーターに袖を通した。
ぴ、ぴったしじゃねーかよ！

さすが俺の体を知り尽くしている聖だ！
などと、浮かれた。

「いつの間に編んだの？」

家にいるときは編み物なんてしているとこは見えていない。

「ほとんど学校で編んだ。あとは城がないとき家の中でバレないように頑張った！」

「ありがとう、聖」

俺はセーターを着たまま聖にハグりまくった。

あつ、そうだ…

「ほら、これ俺からのプレゼント」

聖の手の上にリボンの付いた箱をのせた。

「え？」

「開けてみるよ」

俺からのプレゼントなんて期待していなかった聖は驚いた顔で俺を見上げた。

中身を見た聖は「こんなプレゼント初めてもらった」「勿体なくて使えない」と

感激していた。

またお互いハグり合い、俺たちはラブラブ状態のままイブの夜を過ごした。

25日、クリスマスの夜。

誰も出かけるわけでもなく、「クリスマスは家族で！欧米か！」みたいな感じで家族と

クリスマスパーティーを開いた。

おやじ、おふくろ、聖、雅、俺、日野…まあ、日野は雅の彼氏だからいいとして、

なぜか、…登戸君…がいる。

おふくろが、呼んだんだ…「暇だったらいらっしやい」と。ここにいるということは、暇だったららしい…。

15階のダイニングルームで、7人でクリスマスパーティーをした。
6人座りのダイニングテーブル。

おやじが誕生日席につき、おふくろ、雅、日野と俺のお向かいに並び、俺の両脇には聖と

登戸君がいる。

例のごとく、二人にぴったりと椅子を寄せられ、腕にぴったりとくっつかれている。

「いいね〜モテモテだね〜城くん！」

「代わってやるのか？日野……」

頼む！代わってくれ！オーラを出しつつ、本気で日野に言った。

「…ふふふ、いや、結構！」

日野に全然うらやましそうではない顔で微笑まれた。

俺はリラックスもできず、狭い空間で料理を口に運んでいた。

「城が今着ているセーター、オレが編んだんだぜ！愛がた〜っぶり編み込まれて

んだぜ！へへへ〜」

聖が誰に言うまでもなく…たぶん登戸君に向けてだと思っけど………
言った。

右側で俺の腕にくっ付いている登戸君が、掴んでいた俺のセーターをビヨーン

と伸ばし始めた。

この勢いだと毛糸を解しはじめそうだ。

「……登戸君…伸びちゃうから、ね？やめようね？」

登戸君の耳元に小声で言った。

「あっ！そつだ！」

登戸君が思い出したかのように席を立ち、自分が持ってきた袋からクリスマスプレゼントと言い、いろいろと取り出した。

「もつと後で渡そうと思ったんだけど！はい！これは城くんに！」
少し高そうなダイバーウォッチ。

「これ、高かったんじゃないの？登戸君、まだ高校生なのに、こんな、」

「いいのいいの。僕仕事してるし、ちゃんとお給料貰ってるから！クリスマスだから、」

少し奮発したけど！また今度僕と二人で会うときは、これして来てね！」

登戸君が「また今度僕と二人で会うとき」という部分をものすごい大きめの声で

言うと、ちょうど口に、から揚げを放り込んだ聖はから揚げを思い切り噴出して

しまい、形のままのから揚げが、元あった場所に着地した。

「あらまつ！ふふふ、お上手！聖ちゃん！」と、おふくろは拍手を送り、

「汚いなー、聖！」 雅は怒っていた。

そんなことはおかまいなしに、登戸君は続けた。

「これはお父さんとお母さん！で、これは雅ちゃん！日野君と食べてね。あっ、」

聖さんの分は忘れちゃったから、雅ちゃんから熊ちゃん一つだけ貰って食べてね！」

俺を間に挟み、登戸君は満面の笑みで聖を覗き込んだ。

雅へのプレゼントは、熊の形をした小さいカステラが箱に50個ほどきれいに並べられていた。

「うわ〜かわいい〜！ありがとう、登戸君。はい！聖、一個だけあげる」

雅は登戸君に言われた通り、カステラを一つだけ聖に差し出した。

「いらねーよ、バーカ」

兄にバカと言われた雅は、凄んだ目で聖を見た後、「じゃ、日野君〜あ〜ん」

と言って、日野に食べさせた。

「うま〜い！雅ちゃんに食べさせてもらうとおいしいなあ」

「えへっ！そう？」

そこにはバカツプルが誕生していた。

聖以外、みんなは登戸君にお礼を言い、食事を楽しみながらパーティーは幕を閉じた。

クリスマスが終わり、年末ギリギリに聖と雅は父親がリサイタルのため滞在している

ヨーロッパに冬休みを利用して会いに行った。

そして、聖がない間に俺は…

俺は最低なことをしてしまった…

第二十一話 城…一生の不覚

年末が過ぎ、正月が過ぎると、実家の田舎から東京に戻って来た
麻衣子から連絡が入った。

いつもは聖や井上たちと一緒にだったが、お土産を渡すからと言われ、
俺は初めて二人で会うことになった。

聖たちが日本に帰ってくる二日前。

7時に待ち合わせをし、居酒屋に入った。

俺はまだ20歳になっていないので、ウーロン茶だ。

…そんな真面目ではない、ただ単にお酒が弱いから飲まないだけの
話。

お酒に強い麻衣子はチューハイをガンガン飲んでいた。

麻衣子の実家は金沢で着物の染物工場を営んでいる。

聖と雅にも加賀友禅で染められた繊細な色彩の小物をお土産にくれ
た。

「あさつて帰ってくるから渡しておくよ、きつと喜ぶよ。ありがと
う」

「本当は会って渡した方がいいんだけど、来週からサークルの方で
忙しくなるから」

「いつ時間が取れるかわからないんだ」

麻衣子は長い髪をかきあげた。

そういえば、聖もまた髪の毛伸ばし始めてたよなあ。

ショートも似合うけど、ロン毛もいいよなあー。まっ！とりあえず
聖はどんな髪型でもかわいいということだ。

麻衣子の髪を見ながら一人聖のことを考えてしまった。

「どうしたの？城くん？あつ、聖ちゃんのことでも考えてたんでしよう」

「え？んなことないよ…」

「ず、凶星だ…」

俺は頭をかいた。

「城くんて、男の子に好かれるタイプ？男しか好きになれないの？」

「…え？…へっ？」

急に聞かれ、戸惑った。

「聖ちゃん、男の子でしょ？完璧に女の子に見えるけど、たまに忘れちゃうのかな？」

男の子になつちやってる時があるから。ふふふ」

麻衣子は、聖の様子を思い出したかのように笑ったあと、チューハイを飲んだ。

「バシてたんだ…」

俺は聖とのことを麻衣子に話した。

初めは女の子だと思っていて、彼女が出来たと喜んでいただけ、男だとわかってとても悩んだけど、それでも聖のことが好きで、聖も同じ気持ちでいてくれたことがわかって、ものすごく嬉しかったこと。

聖は俺にとって誰よりも大切な人で、いなくなったら困る…
などと、照れもせず俺は語ってしまった。

「そうなんだあゝ、なんかうらやましいなあ。二人を見ていると」
麻衣子は笑いながら言った。

「あつ、登戸君は城くんが大好き！…でしょ？」

ハア…それもバレてますか…

「でも登戸君は大胆と言うか、周りを気にしないよね？」
「そうなんだよ…それが一番困るんだよ…」

「城くんは、男が好きってわけじゃないんでしょ？」

「うん、別に男には興味がないよ。聖が好きだから」

「あーはいはい！ごちそうさま！あはははは〜」

麻衣子は楽しそうに大きい声で笑った。

なんかこの日は調子よくて、飲みなれないお酒を結構飲んでしまい…
俺は、つぶれた。

「ちよつと、城くん？大丈夫？」

「…うん…だいじょうぶ…」

居酒屋の個室で半分寝ていた。

「ぜんぜん大丈夫じゃないわよ…もう帰るよ？」

「はい…」

俺は麻衣子の肩におぶさり引きずられるようにタクシーに乗った。

麻衣子は結構力持ちだった。

「城くんどこ？住所は？」

麻衣子に聞かれたがほとんど意識はなく、聖の香港の家の住所を言ったが、そんな場所は東京にはないと言われ、そのあと何も言わなくなつた俺を、しかたなく麻衣子は自分のマンションに俺を連れて帰った。

タクシーを降りて、また麻衣子の背中に抱きついたまま引きずられ歩いた。

部屋に入り、俺はベッドの上に放り投げられた。

俺は完全に夢の中だ。

「はああ、重かったあ……。城くん？大丈夫？お水飲む？」
ペチペチと俺の頬を叩く麻衣子の手を掴んで引き寄せ、無意識のまま、俺は麻衣子にキスをして押し倒していた。

「ん……ひじり……」

「……聖ちゃんじゃないわよ？私」

「ひじり……あいして……る」

麻衣子は抵抗もせず、嫌がりもせず俺を受け入れた。

ほとんど目も開けていない俺には、抱いている目の前の人、聖に見えていた。

何度も聖の名前を呼びながら、俺はキスをしながら麻衣子を抱いていた。

ただ、意識のない中で、いつもと違う、聖と違う感覚がある。

いつもの戯れがなくても……俺の……アレが……なんというか、スンナリ入り、そして、おぼろ豆腐に顔をうずめているような……。
だけど、そんな感覚はすぐに忘れてしまった。

俺は聖だと思い込んで……いたから。

夢の中で聖と、いつもの気持ちいい営みを展開していた。

時々、豆腐が出てきて俺はそれを食べていた。

第二十二話 城…一生の不覚

目がパツと覚めた。

陽射しが窓から入っていて、部屋の中が明るかった。

俺…あれ？どこだ？家の天井と違う。

横を向いた。

ま、ま、麻衣子

?!

「あつ、おはよう〜城くん」

さわやかに言われた。

裸なのに気がつき、声も出せずにあせってベッドから落ちた。

自分がパンツを穿いているのは確認した。

「……………え…あ、」

「城くん、激しかったね〜」

キヤミソール姿の麻衣子に、またさわやかに言われた。

「お、おれ…おれ…」

「ん？ん〜酔いにまかせてヤツちやったみたいよ？私と」

あゝあゝ？！…！！

どうしようー！！！！！！！！！！

目の前にピヨピヨと何かが飛んでいる感じだ…

聖以外の人と寝てしまった自分。

19になって初めて女性と寝た自分。

その相手が少しだけあこがれていた麻衣子。

だけど、麻衣子にはあこがれていただけで恋とか愛とかとは違う。麻衣子を抱いた記憶がまったくない自分。頭がグチャグチャになり、どうしていいのかわからなくて、うるたえた。

そんな俺に麻衣子が言った。

「聖ちゃんには内緒にしておいてあげるから、大丈夫よ」
落ち着いている…。
あせているのは、俺だけか。

「う、うん…ご、ごめん…麻衣子ちゃん、ごめん！」
頭を下げるのが精一杯だ。

麻衣子はそんな俺を見て、自分も酔っていたし、謝る必要はないと言った。

そして、男と女なんてこんなもんよ、と笑っていた。
なんだか、麻衣子のあっけらかんとした態度にどことなくホツとした俺は、きれいにたたんであった自分の服を着て、麻衣子の家を後にした。

家までの帰り道、一人落ち込んだまま、考えていた。

明日、聖が帰って来る…
どうしよう。

正直に頭を下げようか 「聖以外の人と寝てしまいました、すみません！」
なんて言えるわけねーよー！ー！！
会わず顔がない。

家に戻っても食欲がなく、ずっとベッドの上で思い悩んでいたが、時間はどんどん過ぎてしまい、聖が帰って来る日になった。

俺は空港へ迎えに行く約束をしていたので、車を走らせた。昨日からほとんど食事をしていない。

今だ何も喉に通らない…

聖の顔を見るのが恐い。

普通にできんのかなあ、俺。

ドキドキしながら到着ロビーで聖と雅が出てくるのを待った。

「お兄ちゃん」

元気な雅の声がして顔を上げると二人で手を振っていた。

俺もちよこつと手を上げた。

「悪いな、わざわざ迎えに来てくれて。城、なんかヤツれてない？」

「い、いや、大丈夫だよ。別に…」

やっぱりちゃんと顔見れないよ

「あれあれ？なんか二人共下向いちゃって。あつ、久しぶりだから照れちゃってるとか？へへ？ハグりなし？」

「うつせーんだよ、おまえは！」

雅は聖に叩かれていた。

「お帰り」

そう言い、俺は聖を引き寄せた。

心の中で深い深い懺悔をしている俺は、力を込めて聖を抱きしめた。

「城…？」

「あらら…公衆の面前で。や〜ね、そういうことはお家でゆっくりしてちょうだいませませ。早く帰ろう?」

雅が俺の服を引っ張った。

「雅ちゃんは早く日野に会いたいんだろ?」

「えっ?! えへっ〜ぐふふふっ」

雅は恥ずかしそうに笑い、背を向けて先に歩き始めた。

「ご両親、元気だった?」

「うん、来週からウィーンに移動だっつて」

「忙しいよなあ、おじさんも」

「あつ、城、オレがいない間、浮気なんてしてないよな?」
んげっ!

いきなりそんな話題をフルなんて…

なんか怪しい素振りを見せたか?俺は?!

「あた、当たり前じゃないかよ、浮気つてなんだよ…」

笑顔を作りながら言ったが、ちゃんと笑えているのか自分ではわからない。

「聖こそ、西洋人になびいちゃったんじゃないのか? んん?」

「……」

なんだ! その「……」は!!

俺の顔が歪み、聖を見た。

「おい…聖?」

「んー、悪いなっ! ちょっと浮気したかもしんねー」

「あああああ?!」

俺の声がロビーに響きわたり、先を歩いていた雅が立ち止まり振り返った。

「パーティがあつてさあ、父さんと母さんに連れられて行ったとき、ドイツ人の男にディーブなキスされた。君かわいいねって！あははは」
笑いながら頭かいてんじゃねーぞ、聖！

「ふざけんなよ、どこのどいつだよ！！」

「どこのどいつだよ、って…それおやじギャグ？キスされたのドイツのドイツ人だし」

「……ざけんな……」

「…ん…」

俺はおもわず、人目もはばからず聖にキスをしていた。

「…あちゃちゃ〜ちゃあ〜」

雅が他人のフリをして先にロビーを出て行った。

俺は大概自分のことは天高く棚に上げ、聖にやきもちを焼く。
絶対に離れたくなんてないし、悲しませたくもない。

麻衣子のことは、絶対に…言えない。

第二十三話 最悪だ…俺

冬休みも終わり、少し経ったある日、聖が、麻衣子からのお土産のお礼の電話を入れると、時間があるなら会おうと誘われ、お互いの授業が終わった後、カフェで待ち合わせをした。

麻衣子は自分のマンションが近くだから、そっちのほうがゆっくりできると言い、

聖は麻衣子のマンションにいた。

「麻衣子さん、もうすぐ卒業なんでしょ？」

「ええ、2月で学生生活も終わりよ。なんだか早かったなあ」

「田舎に帰るの？」

「ん、両親と約束しているからね？短大を出たら金沢に戻るって。

ちよつと東京から離れるの淋しいかな？ 聖ちゃんとも城くんと

も知り合えたのにな？」

そんな他愛のない話を、していた。

「あつ、そうだ！」

麻衣子が立ち上がり、引き出しから時計を出し、聖の前に置いた。

「これ…」

聖が時計を手を取った。

「うん、城くんが忘れていったの」

聖は、麻衣子の言葉に手の中の時計を強く握った。

その時計は、登戸君が俺にくれたダイバーウォッチだった。

「たぶん、私卒業式まで引越しの支度や学校のことと城くんと会う時間が取れないと」

思うの。だから聖ちゃんに頼んじゃうわ」

麻衣子はそう言うのと微笑んだ。

「城、ここに来たの？」

「ええ、聖ちゃんが日本に戻ってくる少し前に遊びに来てて、

その時忘れていつちやっみたい」

「そうなんだ…」

聖は思った　　なんで遊びに来ただけで時計を外す必要があるんだよ！

男による男の感だ！

「あの日、結構城くん酔っ払ってたから、外したのも覚えてなくてないのかも。」

朝も慌てて帰って行ったし」

「朝…？」

麻衣子は「あっ」という顔をして、紅茶を口に運んだ。

「泊まったんだ、城…」

「ん？　んー、泊まっていた…」

麻衣子は一度口をつぐんでから、下を向いたまま言った。

「城くん、そのベッドで寝て行った。私と一緒に…城くん…結構上手だよね？」

麻衣子は冷めた声でそう言い、リビングと続きになっている隣の部屋
のベッドを　　指さした。

聖は麻衣子の指さした方は見ずに、麻衣子を睨んだ。

「それが言いたかったんだ…？　オレをここに連れてきたの、それ
言いたかったんだ」

聖は薄笑いの顔で麻衣子を見た後、時計を持って立ち上がり、部屋
を出た。

おいきり玄関のドアが閉まった。

「聖ちゃん、オレとか言ってるし…まだ私の前では女の子のはずなのに」

聖が立ち去ったあと、溜息をついた。

「城くん…ごめん…ね」

麻衣子の頬は、涙がつたっていた。

俺が、健児たちと夕食を食べて帰ってきたのは10時を回っていた。リビングに入ると、聖がテレビを見ていた。

「ただいま」

「……おかえり」

振り向きもせず、聖が言った。

いつもの「おかえり」という声ではない。ケンカをした覚えもない。

今朝はいつもどおりだった。

「どうした？ 聖？」

俺は、様子を伺うように、聖の横に座った。

何も言わず、テレビから視線を放さない。

「おい、聖？」

肩を掴み、無理やり俺の方を向かせた。

俺の目も見ず、呆れた顔で聖が言った。

「女と初めてヤツた感想は？ 楽しかった？ 気持ちよかった？

男の俺より気持ちよかったか？ んん？ 城く〜ん」

言い終ると、俺を見据えた。

「バレてる…？ なぜだ…。」

麻衣子か…それしか考えられない。

誰にも言っていないし、誰かに言うつもりもない。

知っているのは本人同士だけだ。

内緒にするっていったのに…

血の気がなくなるといふのはこういことなのか…

俺の血が、赤から青に変わった。

「なんか言えよ、城く〜ん」

「ごめん…でも覚えてないんだ…あの日のこと。酔っ払ってて」

「へえ〜、そうなんだあ。だから？ 覚えてないから、許せてか

？」

「本当に目が覚めたら…麻衣子ちゃんの家で…」

聖の腕を触ろうとしたら、払いのけられた。

「さわんなよ。人がちよつと女一緒にいたり、キスされたりしたら、
すげー怒るくせに、

自分は他のやつとセックスしてもいいってか？ はんつ、笑わせ
てくるよな？

これから思う存分麻衣子さんと楽しい気持ちいい、絡み合いでも
楽しめば？

オレ、もういらねーだろ？」

聖は立ち上がり、俺を見下ろした。

「聖…待てよ」

立ち去ろうとした聖の手首を掴んだ。

「放せ…オレにさわるな！」

聖がそれを解こうとしたが、俺は放さなかった。

昔と違う、今は俺の方が力がある。

たぶん、前だったら簡単に逃げられていたかもしれない。

俺は、聖の手首を掴んだまま言った。

「あの日、麻衣子ちゃんと飲みに行つて、酔っ払つた。そこまでの記憶はある。

だけど麻衣子ちゃんの家に行つたことも…い、一緒に寝たことも正直覚えていない。

麻衣子ちゃんを抱いて気持ちよかつたとかそんな記憶も何も残っていない。

「ただ…覚えてるのは、あの日夢の中に聖が出てきてた。聖を抱いていると思つてた、その記憶だけはある」

「…そんなんで、そんなんでごまかせると思つてるのか？ バカにすんなよな？」

少し力を抜いた俺の手から離れた聖は、俺に時計を投げつけた。

「忘れもんだつてさ！ あと、今日から俺の部屋入ってくんなよな！」

もうなんにも言えないや…

言えば言うほどいいわけになる。

全部俺が、悪い。

ソファの上で頭を抱えた。

点いたままのテレビの中で、お笑い芸人が炭酸飲料の一気に飲みをし

てゲップをしていた。

なんで、今こんな場面なんだよ!!!
テレビに向かってクッションを投げつけた。

第二十四話 城、いまだ立ち直れず

バレンタインデー近しの今日この頃。

聖に麻衣子のことがバレた日から、ほとんど口を聞いてもらえず一ヶ月。

おやじたちの前では明るくしているが、10階に二人でいるとき、俺が話しかけても

まるつきり無視され続けている。

の、わりには聖がリビングにいて、俺が近くに座っても、別に部屋に行つてしまつわけでもなく、反対に俺がソファに座っていると、少し離れたところに腰を下ろす。

だけど、シカトだ。

すぐそこに聖がいるのに触れることも許されない。

話すことも許されない。

聖しか見えていないのに、なにをするのも許されない。

俺も、そろそろ限界だ。

俺から少し離れてソファに座り、本を読んでいる聖に言った。

「聖…俺、ここ出て行くか？ 15階、もう一つ部屋あるし…。」

俺といるの嫌だろ…？」

「……………」

下を向いたままだ。

「答えるよ。聖が決めていいから…。」

「……………出て行きたいなら…出てけば。オレ、かんけーねーから。」

15階でも、女のところでも、好きなところ行けば？」

ガクリッ…。少し期待をしてしまった、引き止めてくれるかも、な
どと。

「うん…わかった。あさつての土曜日にでも上に引越す…」

「ご勝手に」

そう言うと、聖はテーブルに置いてあるスポーツドリンクを持ち、
自分の部屋に入ってしまった。

もう…もう…おしまいだあああああ。

俺は上を向いて声を出さずに叫び、そのままソファにひっくり返り
寝転んだ。

巷のラブラブカップルイベント日・バレンタインデーの日に、

俺は一人淋しく15階の親元に帰るのか…

実家に出戻りか…

俺は自分の部屋に戻り、泣きながら少し荷造りを始めた。

…さみしいなあ。

次の日、聖は6時前に帰宅した。

夕食を食べに15階に上がると「聖ちゃん宛にこれきてたわよ」封
書が渡された。

差出人は…麻衣子だ。

住所を井上に聞いたらしい。

「麻衣子さん…？ なんだろっ…どうしよう」
聖は、開けるのが少し恐くて、ためらっていた。

夕子なのに立ち直れない…。

切羽詰っている思いのときに、くだらない事を考えながら、俺は淋しさを紛らわすため、健児と日野と石田と相川の5人で居酒屋にいた。

「おまえら二人いいなあ〜チヨコート山盛りじゃん？」

相川が、部屋の隅に四つ並べられた大きめの紙袋を見て言った。

二つは俺ので、二つは日野のだ。

明日の土曜日は、講義がなく大学に行かないから、女子のみなさんからのバレンタインチョコを今日頂いた。

だけど、俺はこんなものは入らないんだあー！

聖と仲直りしたいいいいいい。

みんなに、聖と俺のことを、正直に話した。

100%俺が悪いと、この問題は5分もかからず結論に達し、話は別のところに行ってしまった。

みんなももっと俺の話聞いて慰めてくれ！！

俺の望みは叶えられず、傷心の傷口に塩を塗りたくられ、一人淋しく、うなぎの骨をカラッと揚げたヤツをポリポリと食べていた。

「大岡、そんなにカルシウムばかり摂ってどうする！
栄養にもバランスというものがある！ 他の栄養素も摂れよ」
石田がそう言い、俺の皿の上にサラダを乗せてくれた。

「じゃ、これも摂取しておけ！」

相川が鞆からプロテインを取り出し、俺のウーロン茶に入れ、マゼマゼしてくれた。

「ありがとう…石田…相川…」
ボソボソと、礼を言う。

「バランスかあ、恋愛もバランスが大切だよなあ。

「だけど、振られちゃうししょうがないよなあ」

「捨てられるってーのも、辛いよな！大岡！」

「城くん、残念だが聖ちゃんは諦めて、次に行きたまえ！」

うっ…、聖じゃなきゃダメなんだよなあ、俺。

あ…明日俺引越しだあ。実家に帰る日だあ。

ダメだ…もう耐えられない…

本気で泣きたい。

酒は二度と飲まないと自分に誓った俺は、プロテイン入りウーロン茶で酔い、

聖の名前を叫びながら泣き、みんなに無視され続けた。

夕食を終えて、自分の部屋に戻った聖は、思い切って麻衣子からの封書を開けた。

綺麗な女性らしい文字で書かれた手紙は、丁寧な言葉使いで綴られている。

読み終えた聖は、俺に電話をしたが繋がらない。

「はああ、どこにいんだよ、城……」

おバカな俺の携帯は、バッテリー切れた。

そして、おバカな俺も、バッテリーが、切れかかっている。

バレンタインデー前日のその日、聖が俺に電話をくれていることなんて全く知らず、

酔ってもいないのに歩けなくなり、鼻を嚙りながら、相川におんぶをされ、

店から一番近い健児の家に、みんなで向かった。

第二十五話 聖のチョコは誰に？

健児の家で目が覚めたバレンタインデー当日の朝、俺と日野は二人で地元の駅に戻った。

日野は、午後に雅と待ち合わせをしていると言う。

「でさあ、悪いけど、これ雅ちゃんに渡してくれるかな？

会ったときじゃ荷物になっちゃうから」

そう言つて、チョコレートの入った紙袋を二つ、手渡された。

日野が貰ったチョコは全部雅にあげると約束したらしい。

あゝあ、これでまた毎日チョコ食べて、「太っちゃう」って気にするんだろうなあ。

「僕は雅ちゃんのくれるチョコで充分だから！ はっははは。照れるなあ！」

…あー、はいはい、そうですか！……二人のハッピーを少し分けてくれ！

自分のと日野との四つの紙袋を下げ、足取り重く、帰宅した。

そのまま15階に行き、雅に紙袋を全部渡した。

「日野が雅ちゃんからのチョコレート楽しみにしてたよ。後で会うんだろ？」

「え〜、うふっ！ おほっ！ 手作りだし〜愛こもってるし〜」

雅は、クルクルと回りながら言った。

はいはい…そうですか！……1gでいい！ 俺におまえらのハッピーをくれ！

「あつ、お兄ちゃん、これこれ！ 登戸君から預かってきた」
雅から手渡されたのは、メチャクチャラブリーな包装紙とリボンで
デコレーションされた包み。

今日は朝から仕事で、直接渡せないから雅に託したそうだ。

メッセージには、登戸君そのままのちっちゃくて乙女ちつくな文字
で、

「僕たちが出会って一周年だね！

バレンタインデーが二人の記念日なんてものすごくラブリー（ハ
ート）！

僕の愛を食べてね（ハート×5個）」

と、書かれてあった。

「…………チヨコは食ってもいいが、登戸くんの愛は食いたくない……」

そつなんだよ、一年前の今日、聖を賭けて日野と『イケメンコンテ
スト』に出たんだよなあ。

あゝ、去年の今頃は聖とラブラブで、しあわせだったよなあ。

戻りてー、去年に戻りてえー、カンバーツク、去年のいまごろ……！！

「そついえば、今日、聖ちゃん出かけるのかしら？」

……………？

おふくろが、過去を懐かしんでいる俺を見て言った。

「昨日10頃、上がって来て手作りチヨコを作りたいから手伝って
くれて。」

あなたにあげるわけないわよね？ 今日15階に戻って来るんでし
よ？

ケンカ別れで、捨てられて！出戻り息子ちゃん？
おふくろ、はつきり言わないでくれ…

で、聖のチヨコ、俺のじゃないとすると誰にだよ！
もう新しいのを見つけたのか！！
完全に終止符を迎えてしまった…のか、俺たち。

俺はフローリングに崩れ落ち、寝そべった。

「パパがゴルフから帰ってきたらお引越し手伝うって言ってたわよ
…うん」

イモムシのように這って玄関まで行き、俺は10階に下りて行った。
リビングを開けると、ソファの上で毛布に包まった聖が眠っている。

聖…

もうこの寝顔も見れなくなるんだよね…

俺のものじゃないんだよね…

た、耐えられない。

聖の頬に手が触れそうになり、俺は、自分の手を握った。
俺たちは終わったんだ…

これ以上聖を見てると辛いから、お風呂入ろう…グスン。

ブクブク…ブク。

と、俺は鼻の上までを湯船につけた。

このまま死んでしまおうか…

……………ウ……………ブホッ！ゲホゲホッ！

45秒が限界だった。
バカな事はやめようと風呂を出て、自分の部屋に行き、残りの荷造りを始めた。

トントン…

と、ドアがノックされた。

「開いてるう…」

俺はおやじがゴルフから帰って来て手伝いに来たのかと思い、クローゼットから服を取り出しながら後ろ向きのまま、気のない声で答えた。

「あと、この服だけ入れたら終わりだから…はあああ。

…おやじ、俺本当に何やってんだろ…」

クローゼットの服に顔をうずめながら、おやじに話しかけた。

「俺、すげー聖のことが好きで、俺にはアイツしかいねーのにさあ。誰にも渡したくないのに…聖…新しい彼氏が彼女出来たみたいだし、いいいいいい、

うっ、俺、消えてなくなりてええええ」

「…誰に彼氏が出来たって？」

あゝあゝあ？！

聖の声に驚いた俺は、振り返った。

「ひびり…」

ドアのところで腕を組んだ聖が立っていた。

「オレと同じこと思ってんじゃないよ！」

へ？ 俺と同じ事と言いますと…

（すげー好きで、俺にはアイツしかいねーのにさあ。誰にも渡したくないのに）

という部分でいいのでしょうか！！ な、なみだあああ。

俺は聖に近づこうと慌てて歩き、ダンボールの角に足の小指を引っ掛け痛さのあまり床に崩れた。

「いつ、てーいーいーこ、こゆびがー」

「あははは、バカか城は。ば〜か」

聖が側に来て俺を抱きしめた。
痛みが消えた…

「ごめん、城。オレ、おまえのこと信じてやれなかった。

好きなのに大好きなのに、大好きな城のこと、信じてやれなくてごめん…」

なんだか急なことでよくわからないけど、俺は聖の背中に腕を回し力いっぱい抱きしめた。

あ〜久々〜、聖の香りと聖の抱き心地いいいい。

聖に届いた麻衣子からの手紙。

俺に見せてくれた。

俺と聖の仲の良さに少しのジェラシーを感じて聖に意地悪をしてしまったこと。

泥酔した俺が麻衣子にキスをしたことは事実だが、「聖、聖」と自分の名前でない人の名前を呼ばれながら抱きつかれても冷めてしまっし、その前に聖の名前を連呼しながら俺は、すぐに熟睡してしまっただ。

あの夜は本当に何もなかった。
少し俺をからかったと書かれていた。

そして、「朝起きたとき、ちゃんと城くんはパンツを穿いていたはず。城くんに聞いてみてね」と綴ってあった。

あっ、そうだよ！ 俺スツポンポンじゃなくて、おパンツ穿いてたよ！！

麻衣子は長女で染物工場の跡取り娘、親が決めた婚約者がいて短大の卒業と

同時に結婚が決まっていた。

「そんな自分が他の男性と寝ることは絶対ない。

だから本当に城くんと私の間には何も無い。

城くんが愛しているのは聖ちゃんだけというのが、

城くんを見ていてうらやましいくらいわかったの。

聖ちゃんは城くんを信用して、ずっとこの先も二人で幸せになつてね」

最後に、そう書かれてあった。

「……………」

俺は、その手紙を読んだあと、横目で聖を見た。

「んだよ……」

聖も、俺を見た。

「テメエーこのやるー！ 俺がこの一ヶ月どれだけ淋しくて悲しくて辛くて

悶悶とした日々を送っていたか、わかるかー。返せー俺の切ない一ヶ月を返せー」

聖を押し倒して言った。

「城…ごめん…」

「聖…」

俺は聖に覆いかぶさったまま、聖の瞳を見つめてキスをしようとした。

が、ふと人の気配を感じ、顔を横に向けると、

「…えっ？ 足？ 足が…？ 一、二、三、四、五、六…：六？
本？」

顔を上げると、見慣れた顔の三人が、俺たちを見下ろしている。

「…：え”え”…！！！」

俺と聖は、おもわず起き上がった。

「あらまつ！！！」

「あはっあはっあはは〜？」

「すげーな、おまえら！！！」

おふくろと雅とおやじが立っていた。

「な、なに勝手に入って来てんだよ！！！」

「あらっ、だって開けっ放しだったんですもの」

「いつからそこにいたんだよ！！？」

「え〜と、城お兄ちゃんの、『 temeエーこのやるう〜』 辺り…：かな？」

「…：…」

「もっ引越しは手伝わなくていいようだな？ 城！！！」

おやじは引越しを手伝いに、雅とおふくろは、バレンタインチョコを、俺と聖に渡しにきたらしい。そんな中、俺と聖の仲むつまじい光景に遭遇し、しばし観覧していたようだ。

その日の夜、俺は聖からお手製のチョコレートを買った。

麻衣子からの手紙のおかげで、俺と聖は元に収まった。

両親に決められた道を歩いている麻衣子、
これからも決められた道を歩かなければならない麻衣子。
俺と出会い、俺に好意を持ち、少しだけ横道に反れた。
自分の意思で俺に抱かれた。
本当は…俺は…麻衣子を抱いていた。

あの夜の事実は、麻衣子の心の中だけに沈められ、
何も記憶に残っていない俺は、麻衣子が流した涙にも気づいてあげられず…
俺はずっと…
何も知らないまま自分の人生を終わらせた。

俺が体を合わせた女性は、最初で最後…麻衣子だけだった。

第二十六話 聖の夢

何事もなく穏やかな日々が過ぎ、俺は大学二年に聖は専門学生の二年になった。

麻衣子は、俺が海に行った時にあげた桜貝と共に、3月始め、金沢に帰って行った。

登戸君は、女性誌の「弟にしたいタレントNo.2」「恋人にしたいタレントNo.3」「ペットにしたいタレントNo.1」。

そっち系男性雑誌で「恋人にしたいタレントNo.1」「抱きたいタレントNo.1」に輝くほど活躍している。

そんな登戸君に、今尚惚れられている俺の心の中は、いつものごとく聖には内緒だが……少しうれしい。

大学構内での日野は、新入生のファンも増え、相変わらず回りに女子のみなさんを引き連れているが、女が勝手に付いて回っているだけで日野はいつも姿勢を直し真顔でいるし、雅には内緒にして俺も大目に見ている。

日野の取り巻きだったマーガレットは、「雅に謝りたい」と言ってきて、二人を会わせたところ、なぜかとても気が合ってしまった、日野抜きで、たまに会ってはマーガレットから「女の心得」の指導を受けている。

本当に師匠がマーガレットでいいのかどうか疑問だが、雅は目の回りの黒いマーガレットを姉のように慕い始めていた。

そんなマーガレットと付き合い始めたのが、健児だ。

どーいう組み合わせなのか…

健児は完璧に尻にひかれ、ほとんど彼氏というより「パシリ」だった。

「ただ健児は楽しいらしい。」

「マーガレットは二人きりになると甘えてくるらしく、そのギャップに健児はヤラれてしまっているようだ。」

五月に入り、構内のいつものベンチに座っていた日野と健児と他数名を見つけた俺は日野に駆け寄った。

「日野！！ コレでどうだあああああああああ！！」

「城くん… 見えない。近くて見えないんだけども？」

日野は顔に押し付けられた紙を取り見た。

『第2回 横縦町 たて笛大会 場所：横縦神社 主催：横縦町内会』

優勝賞品：町内お買

い物券三千円分』

「城くん… たて笛は… もう…。ピュンなんて鳴ったらヤだし、僕…」

「日野の分もエントリーしといたから！」

俺が日野にピースをすると、日野は少しうれしそう顔になった。

「城くん… しょうがないなあ…。って…」

「優勝賞品が五千円から三千円になっているじゃないか！！ どういうことだ！」

「不景気だからね、しかたないんじゃないの？」

「んー、そうか… 町内会もいろいろ大変だよなあ、うんうん」

「今年はさあ、俺、鼻で吹いちゃおうかな？」

「ず、ずるいぞ！城くん！それは違反だ、君だけ目立っちゃうじやないか！」

正々堂々と戦えよ！！」

「いーじゃねーかよ。日野も鼻で吹けば？ 教えてやるつか？」

「コッ！」

「ええっ！？ いいの？ コッなんて伝授してもらっちゃって」

俺と日野の周りにいた健児たちは、俺たちの会話が盛り上がるにつれ、いつの間にか数メートル離れたところで、遠巻きに怪訝な顔でこちらを見ていた。

結局『第2回 横縦町 たて笛大会』の今年の優勝は74歳の爺さんが、かつさらって行った。

みごとな笛さばきに、俺と日野は自分たちの未熟さを痛感した。

「鼻で笛を吹く行為は違反だ」と出番前に開催委員の人から言われ、鼻でしか練習をしていなかった俺と日野は、一応ちゃんと口で吹いたが、昨年同様、町内会名の入った参加賞の手ぬぐいを貰って舞台を下りた。

たて笛大会が終わり、家に帰ると、聖に話があると言われ、ソファに座った。

「なに？ 話って」

「…ん」

聖は言いにくそうに伏せ目がちに少し何かを考えた後、言った。

「オレ…パリに行こうと思う」

「いつ？ 夏休み？ お父さんリサイタル？」

「ん…、夏休み明け…9月から…パリに留学するつもり…」

「…へ、留学？ 留学…りゅうがくうー?!」

「うん、2年ほど」

2年？ はあ？ 留学って日本からいなくなるっていうことか!？
多少血の気が引いた。

聖は、毎年3月に行なわれているデザイナーの登竜門であるファッションコンテストで優勝はしなかったが佳作をとっていた。

将来有望な聖は、その時コンテストを見に来ていたフランスのファッション業界の人物に一目置かれ、学校側の推薦を受け、パリのデザイナー学校への留学が決まった。

……決まった。

すでに決まっていた。

行くかもしれない、ではなく、行く！ と決まっていた。

俺はジッと聖を見て、目を閉じた。

そして、目を開け数秒間上を向き、頭をうなだれた。

「城…オレ、」

俺は、聖の口に手を当てて言った。

「何も言うな！ デザイナーになるのが聖の夢だよな？」

「うん…」

こもった「うん」が聞こえたので手を放した。

「推薦されて留学ということは、聖の才能に期待してくれている人がいると」

言うことだよな？」

「うん…先生達も友達も頑張れって…」

「だよな？……だよ…な…」

俺が行くとは言えない。

こいつの夢を壊すわけにはいかないよ…

泣きたいのをグツと我慢した。が、我慢しきれず涙を流していた。

「城、ごめん。でも2年だから2年で帰ってくるから、夏休みとか日本に帰って来るし、

城がパリに遊びに来ても」

「うん、うん、俺待ってるから……行って来い…うっ、ひ、ひじ、ひじりー」

聖を抱きしめて思いつきり泣いていた。

本当はいやだった、行くな！ と言いたい。

デザイナーになんてなんなくいいから俺の側にいる！ と、言いたかった。

たかが人生のうちの2年、だけど2年、されど2年、それでも2年、やっぱり2年は長い。

だけど、聖の夢の邪魔をしたら、俺自身が一生後悔するだろうし聖の泣き顔も見たくない。

男は黙ってなんとかだ！

俺は「行って来い」と、言うしかない。

もし反対したら聖は俺のために留学をあきらめるかもしれない。

でも我慢だ、我慢するんだ、城……。

自分に強く強く言い聞かせた。

が、聖の心の中は、俺に反対されてもパリに行く決めていた。

俺のために自分の夢は捨てないらしい…。

そんな聖の心を知らず、俺は自分にいいように考え、聖をパリに送

り出すことにした。
おめでたいヤツだよ…俺は…。

聖は、7月まで学校に通い、休学手続きをし、8月中旬、パリに旅立って行った。

旅立ちの日、空港で俺の両親、雅、日野、サエドン、3Bの連中、聖のクラスメイト、先生、そしてなぜか…登戸君…、大人数で聖を囲み、門出を見送った。

「聖、気をつけて行って来いよ。それから、ぜってー2年で帰って来いよ！」

俺は、力を込めて念を押した。

「わかつてるって、オレも城と離れるのは2年が限度だな。それ以上は辛すぎる」

「ひ、ひじりいいいー」

俺は、みんなの目もはばからず、聖を抱きしめ、思い切りキスをしてしまっていた。

「あらまつー！」

「あちゃあ〜」

「すげーな、おまえらー！」

「えー！ー！！ 城く〜ん」

登戸君は、おふくろに目隠しされ、みんなは、一斉に俺と聖に、背を向けた。

「10秒間だけだぞ！」
サエドンが言ってくれた。

みんなの背中に囲まれ、健児のテンカウントの中、俺は聖を強く抱きしめた。

ブレイクタイム：聖のいない間

僕にとってお邪魔な聖が、パリに行っている間、僕は城くんを独り占めだ。

時間ができると城くんを誘って、時々みんなと、時々二人で出かけたり、城くんのマンションに行ったりしていた。

聖が日本にいないのは、僕にとって楽園だ。

だけど、外を歩く時は、もう腕を組むことも、男同士の肩組みもできなくなっていた。

僕が前にもましてテレビドラマやバラエティ番組に出るようになってから、街を歩くと「登戸祐二」というのがバレてしまう。

だから僕は、城くんと二人で約束をしたときは、言い訳をつくってできるだけ城くんの家に行きたいとお願いした。

くっ付いていても誰にも何も言われない。

城くんも、もう慣れちゃったのか、麻痺しちゃってるのか、僕が抱きついたり、ベタバタしても別に払いのけるわけでもなく、嫌がるわけでもない。

僕は、調子に乗って城くんに甘える。

だからといって、それ以上の関係には絶対にならなかった。

城くんはずっと聖のことを愛している。

悲しいけど、それが事実だ。

城くんは、コンパやゼミ仲間の女の子がいる席では絶対にお酒を口にしなかった。

自分を見失うのが怖いようだ。

だけど、男友達だけのときは、いつも飲んでる。

一度だけ、健児くんの家でみんなが集まってお酒を飲み、ごろ寝をしたとき、

お酒を飲めない僕だけが、しらふで起きていて、城くんの寝顔を見ていた。

そして、僕は今がチャンスとばかりに酔って寝てしまっている城くんの唇にキスをした。

城くんは全然起きない。

だから、抱きついたまま、初めて城くんの腕枕で眠りについた。

朝、目が覚めたとき、僕は城くんの腕の中にすっぽりと入っていた。城くんは人肌が恋しいのか、僕のことをしつかりと抱いていた。

僕は城くんが起きるまで、寝たフリのままずっと動かないで幸せをかみしめた。

城くん、あつたかゝい。このまま時が止まればいいのに…

そんなことを考えていたら、城くんが起きて、静かに自分の腕から僕の頭を外した。

寝たフリの僕は少し薄目を開けて城くんを見た。

……頭を抱えて、固まっている。

その日を境に、みんなで同じように飲みに行ったり、ごろ寝をしたりしたけど、城くんは、男だけの集まりでもお酒を飲まなくなった。僕としては……非常に残念。

今度、無理やり飲ましちゃお〜っつと！

僕は、次のチャンスを狙っている！

健児の家でごろ寝をして、朝、目が覚めたとき…
俺はしっかりと誰かを抱いていた。

の、登戸…くん…！？

非常にやばかった。
あせりにあせったが、腕の中の登戸君の寝顔は、なんだか小犬みた
いでかわいいなどと思ってしまう自分。

ヤベーじゃん、俺。

聖以外を抱きしめて、俺は何をしているのだ……
こっちを向いて腕の中で眠っている登戸君が無意識なのか、俺の足
の間に自分の足を入れてきた。

登戸君…それはちょっと、本当にやばいです。
どうしよう…

俺は、ゆっくりと仰向けになり登戸君の足を外し、腕枕で眠ってい
る登戸くんの
頭を静かに外し、体を起した。

マジ、やばいよ…登戸君。

自分が青くなっていくのがわかり、頭を抱えたまま、俺は決心した。

酒…絶対やめよう。

男も女も見境なくなっていく危険性がある。
聖がいなくなつて1年半、あと半年の我慢だ。

聖……。

早く帰つて来い！

第二十七話 おかえり、聖

秋が来て、俺は就職活動をし、いくつかの会社に面接に行ったが、内定はもらえないでいる。

そして、やっと、聖の二年の留学が終わり、日本に帰国する日が来た。

成田まで迎えに行くと言う約束どおり、俺は車を走らせ、空港に着いた。

到着ロビーで待っていると、俺を呼ぶ声が聞こえた。

「……」

俺の名を呼び、手を振り、にこやかな顔で駆けってくる…

あいつは誰だ！

あの坊主頭のヤツは…

「城！」

そう言っただ俺の胸の中に飛び込んできた、そいつは、聖。

な、なぜ、スキンヘッドなのだ！

そして、男らしくなっている。

「ひ、ひじり…?」

聖は俺の首に腕を回していたが、俺はボーゼんと立ちすくんだままだ。

「なんだよ、城、熱き抱擁はねーのかよ」

聖に言われ、腕を聖の背中に回したが、あまり力が入らなかった。

「あの…、なんで、坊主、あた、ま…？」

「似合うだろ！？」

頭の形がいいのか似合う…いや、似合うとかそういう問題ではなく…

聖が言うには、日本に帰ってしまう聖のためにクラスメイトと一緒にロンドンに遊びに行き、そこで見たパンクロックのイギリス人に感化され、スキンヘッズにしたと言う。

つるつるだよ…

中身まではパンクにはなる気はないが、スタイルを真似したらしい。まあ、聖には変わりないのでいい…としよう。

家に向かう車の中で、雅や健児、石田、相川など、みんなの報告をした。

登戸君の話が出ると、「そいつの話はいい」と、ムツとされたが、なんだか俺は、やきもちを妬いてくれる聖に少しばかり嬉しくなった。

助手席からジッと俺の顔を見ていた聖に言われた。

「なんか、城、前よりカッコよくなってないか？」

「ん？ そう？ っていうか、あんま見んなよ。照れるじゃん」

「浮気してんじゃねーだろうな」

「してねーよ、浮気なんて。するわけないだろう…」

「していない…、よね？ 健児の家での雑魚寝の…登戸君のことは、浮気じゃないよなあ。」

あれは、一つの流れだ！

なんの流れかわからないが、自分に言い聞かせ、自分に納得させた。

聖は次の週から休学していた専門学校に復帰し、卒業までの5ヶ月間で残っている単位を取り、アパレル会社に就職する。

就職先は、すでに決まっていた。

「ミピコ・ジョンソン」という有名ファッションブランドだ。

聖は、そのデザイナーに才能を買われ、卒業と同時にデザイン室に入る予定になっている。

大変だろうけど、就職が決まっていることは、正直うらやましい。

そんな聖とは裏腹に俺は、自分が何をしたいのか、どの道に進みたいのか今だわからずにいる。

のん気にそんなことを考えている余裕など、このご時世でしてはいけないのかもしれないけど、今ひとつ、先が見えなくて悩んでいた。

おやじやおふくろは、「知り合いの会社にたのんでもいいぞ」とは言うってくれるものの、俺はコネ入社ということを拒んでいる。

自分の力で…ということが、余計に自分をあせらせていた。

第二十八話 十、オ、木、そして「米」

聖が学校に行き始めて少し経ち、厚手のジャケットが必要な季節になった。

聖のいなかった二年の月日などなかったかのように、前のような聖のいる穏やかな楽しい生活を過ごしていた。ただ、俺は相変わらず、就職決まらずだ。

「聖、今日遅いんだろ？」

朝食を食べている時、訊いた。

「ん？ ああ、クラスメイトと飲みに行くから」

「そう、俺は今日、健児たちと家で飲むから。」

聖が帰って来る頃にはみんな帰ってるかもしれないけど」

今日は、健児と石田と相川と日野と五人で俺のところで飲む約束をしていた。

この四人と飲む分には、酒で自分を失っても「まあ大丈夫」ということで、結構な回数で、誰かしらの家で集まって飲んでいる。

大学の授業が終わり、健児と日野を構内で待っているとき、携帯がなった。

それは、登戸君からで、スチール撮影の仕事が終わり、時間ができたから一緒にご飯を食べたいという誘いの電話だった。

今日は健児たちと飲む約束をしているから無理だと、素直に話してしまうと、

「じゃ、僕も参加する！」と元気に言われた。

まっ、聖はみんなが帰った頃に戻ってくるだろうから、大丈夫だろ

う。
などと、断る理由も見つからず、「いいよ…」と返事をしてしまっ
た。

健児と日野と三人で酒やツマミを買い込んでマンションに帰ると、
エントランスには登戸君が待っていて、俺の姿が見えると飛んでき
た。

「城くん」

だから抱きつくなくてーの！
と言いつつ、押しのけられない俺がいる。

聖がパリに行つてからの登戸君は、前にもましてなぜかとても大胆
になっている。

聖が居ようと居まいと、俺に絡みつき、二週間ほど前、15階のお
ふくろの家に遊びに来ていた登戸君は、俺と聖が上にあがっていく
と、聖を押しつけ、俺の右側腕にしがみ付いたまま、ずっとキープ
していた。

登戸君が帰つたあとの俺は、聖にポコポコにされ、青丹赤丹でドッ
ト柄のステキなボデイなつた。

「城くん、聖…さんは？」

登戸君がキョロキョロと見て訊いてきた。

「今日はいねーよ、あと石田と相川が来るだけだよ」
健児が俺の代わりに答えると、登戸君の顔は、ニンマリとし、こ
れ幸いと腕にしっかりひつついて来た。

10階に上がり、しばらくすると石田と相川が来た。

雅に会いに行くと15階に行っていた日野が戻ってきて、結局8時

過ぎに全員揃い、飲み始めた。

やっぱり話の内容は就職活動のことだった。

相川は体育の教師になる予定で、石田はコンピューター関係の仕事を探していた。

健児は「どこでもいいや」と手当たり次第に面接に行き、小さいけど広告代理店からの内定をもらっている。

日野は雅との将来をちゃんと考えていて、早く自立したいからと、父親の知り合いの法律事務所に就職が決まっていた。

登戸君はすでにテレビで活躍しているし…

「俺の夢ってなんだったんだろう…。なにやってんだろうな、俺…
はあ…」

溜息と共につぶやてみる。

この溜息とつぶやき、何度くりかえしているんだろう。

「僕だって、夢なんてあつてないようなもんだった。

なんのために大学行ったんだって、聞かれたら、答えるのに困る

よ」

そう言った日野を少し睨んだ。

就職が決まっている余裕かい！

「今の僕は、雅ちゃんと二人で生活できるように、なんでもいいつてわけじゃないけど、

就職は父さんのコネで決まっただろ？ 僕はそれはそれでいいと思ってる。

たとえば、最初はコネで就職しても、その職場で何かを見つけて、自分のものにしていけばいいって…」

日野が言いたいこともわかる。

決まった就職先で、何かを見つければいい…。

そうなんだよね、その通りなんだよ、日野…。

俺は、本当に何に悩んでいるんだろう。

ただ単に自分の行き先が見えないだけなんだろうか、それとも社会に出るといふ不安を隠すために、自分に言い訳しているだけなのか。

結局、いつもと同じに飲んで悩みを打ち明けて、少し心が軽くなった気がしてフローリングに寝ころがった。

寝ころがった…

なんでか、急に酔いが回った。

俺の横にびったりとキープしていた登戸君は、俺がコップに入った日本酒を一口飲むと一注ぎし、一口飲むと一注ぎし…を密かに繰り返していたことなど、話に夢中になっていた俺は、全く気づかずに酒を口にしていた。

お酒を飲めない登戸君以外全員が、ブツ潰れ、雑魚寝に入った頃には、十二時を回っていた。

俺は、「十」の字の形に綺麗にダウンしていた。

「城く〜ん、えへっ！」

すると、登戸君が寄り添って来て「オ」の字になった。

聖が深夜2時ごろに帰ってきて、リビングでごろ寝している俺たちに呆れたが、俺と登戸君を見るや否や俺の頭元に立った。

「おい、城…おい…起きろよ！」

蹴りを入れられている俺だったが、起きるわけがない。

爆睡中だ。

ピクリともしない。

蹴りの痛みさえ感じない。

聖は今度、思い切り登戸君に蹴りを入れた。

「痛っ！！」

目が覚めた登戸君は目を擦りながら、聖の存在に気づいたが、シカトしたまま、

俺にヒシッと抱きついた。

「テメー、なにやってんだよ！！ 登戸！！」

「あ〜ん、なにすんだよ！ 聖さん！」

「うっせ！ 城から離れる！」

「いいじゃないかよー！！」

聖が登戸君の足を掴み、ズルズルと俺から引き離し、部屋の隅の方に移動させ、聖が俺の横に寝転んだ。

俺から離された登戸君は、すばやく起き上がり、今度は聖の反対側から俺を抱きしめた。

俺は、泥酔していてまったく動かず「十」の形のままだ。

「登戸！ おまえはあっちに行けよ！ 城に引っ付くんじゃねー！」

「やだね！ ヒシッ！！」

俺を間に両脇の二人は蹴りの入れ合いだ。

両脇から抱きしめられ、二人が俺の脇の下に頭を突っ込み、三人で「木」の字になっていた。

朝方、2つのソファを独り占めで寝ている日野と石田を除いた、健児と相川がなぜか俺の頭の上において、結局5人で「米」を人文字で描いて寝ていた。

眠っているときに、一番しあわせだ。
就職のことを考えずにいられる…。

第二十九話 城、悩む…

俺は一人車を走らせていた。
レインボーブリッジを越え、駐車場が満車で、適当に路駐をし、一人淋しく海の見えるところまで歩いた。

就職も決まらない。

石田も一昨日、希望通りのIT関係の会社から連絡が来て、決まった。

まだ十二月だけど、内定もらっていないヤツも多いけど…頭ではわかってはいるけど、

俺の気持ちは焦るばかりだ。

夜景を見ながら、考えたかった、これからのこと。

くそー、ぜんぜん落ち着かねー！

一人黄昏ようとここまで来たのに、周りを見渡せばカップルばかりで、どいつもこいつも、

ハートマークを出している。

当たり前だ、土曜日の夜にこんなところに来てしまった自分が悪い…。

「くわああああー」と、海に一叫びし、周りのカップルからの異様な目の攻撃に合い、

俺は、車に戻った。

車に乗り込み、ハンドルに体を預けていると携帯が鳴った。

城、おまえ、どこにいんだよ。

聖からだった。

「……お台場……」

お台場あ？ 一人でか？

「当たり前じゃん」

なんで、オレ誘わないんだよ。

少し、拗ねた聖の声が、かわいかった。

俺は思わず顔がニヤケる。

「一人になりたかったんだ……」

就活で、悩んでんのはわかってるけど、一人になるなよ。

オレ、なんの役にも立たないかもしれないけど、城のそばに
いてやるから。

「……うん……、これから帰るよ……。聖、ありがとう……」

俺は、携帯を切り、車のアクセルを踏んだ。

マンションに着き、エントランスに入ると、登戸君から電話が入った。

登戸君が所属する事務所の「忘年会とクリスマス」を兼ねたパーティーへの誘いだった。

「有名なタレントの人もいっぱい来るし、城くんもたまにはパーティー騒ごうよ」

あまり人がたくさんいるところには、参加したくない気分だったけど、

そう言ってくれた登戸君も俺のことを心配しているのが、わかった。聖もおやじもおふくろも雅も、最近の俺を心配してくれている。

みんなに心配かけている、そんな自分がいやになる。

俺は登戸君に日時と場所を聞いて、OKした。

登戸君の事務所のパーティーに行くなどと、聖に言えるわけもなくとりあえず、少し参加させてもらって、帰ろうと思っていた。

八時から始まるというパーティー当日、六本木にあるクラブ「W」という店の前から登戸君に電話をすると、迎えに来てくれた。

「じょーろーくーん〜」

毎度のように飛ぶように走ってきて俺に飛びつく。

登戸君、君はいまや有名人、通りすがりの人たちが見てる…

俺は、苦笑いのまま、軽く引き離す…が、お構い無しに、また、くっつく…

手を引かれながら、俺は店の中に案内された。

一階フロアは、ダンスフロアとDJブースがあり、大勢の人で埋まっている。

事務所関係の人たちだけではなく、その家族や友人も自由に参加しているらしい。

だから、俺もここにいられるのか。

テレビでしか見たことのないミュージシャンや俳優、タレントも沢山いる。

俺は心の中で、スゲーを連発し、少しミスターになっていたが、よくよく考えてみれば、

登戸君と友達ということ自体すごいことなんだよなあ。

彼のことを芸能人という目で見ていなかったから、考えもしてなかった。

登戸君が、お酒ではなくウーロン茶を持って来てくれて、俺の手に渡してくれると、

グラスを持っていない俺の手を掴み、

「こつちこつち」

と、連れて行かれたのは、二階にあるVIPルームだった。

ドアが開けっ放しの一つのルームに入ると、登戸君は、高級そうなベルベット仕様のロングソファに座っている男性に声を掛けた。

「社長！ ほらっ、僕がいつも話している大岡城くんだよ！」

いつも話しているって…、何を話しているんだ！ それも社長に！
もしかして、好きな人…とか言っているんじゃないか…

俺は、笑顔なのかどうか自分ではわからないが、とりあえず口角を上に向けて笑顔を作った。

「いやいや、これは大岡くん、いつも祐二がお世話になっているよ
うで。社長の吉田です」

ソファから立ち上がり、俺みたいな若造に頭を下げてくれたのは、
吉田プロダクション社長の吉田という物腰柔らかく話す六十代の男
性だった。

その吉田さんが、少し離れたところに座っていた加山さんという女
性を呼ぶと、

登戸君の顔が緊張したのがわかった。

女性だから苦手なのかと思ったが、どうやら登戸君は加山さんのこ
とを恐れいているようだった。

そんな時、「登戸くん、ちょっといい？ サイン欲しい子がいる
んだけど」

と、登戸くんが別のスタッフに呼ばれ、ホツとしたような顔で、俺
を一人残して行ってしまった。

登戸君にとって加山さんは、怖い女性なのかもしれない…。

「加山です。どうぞよろしく」

ものすごくキリッとした顔で名刺を差し出された。

なんとなく、俺もびびる。

吉田さんと加山さんから名刺を貰ったが、

「すみません。俺…じゃない、私はまだ学生で、名刺を持ち合わせてないもので」

俺が謝ると、

「あー、気にしない気にしない。今度履歴書持ってきてくれればいいから」

と、加山さんに言われ、なんの話をしているのか、わからなかった。「履歴書？…ですか？」

と、問い返すと、俺が就活をしている話を登戸君から聞いているらしく、

「吉田プロでよければ、卒業してから来て欲しい」と言われた。

ついでに、堅苦しい言葉使いや敬語は自分達に必要ないから、普段通りに喋れと言われた。

が、年上相手にタメ語は…無理だ…

「今、この業界もマネージャー不足でね、誰でもいいと言うわけじゃないんだよ、

だけど、君のことは、祐二からいろいろ聞かせてもらっていて、就職がまだ決まっていないようなら吉田プロでお仕事なんて、どうかいっ？」

四十五度に首を倒した吉田さんにニッコリ微笑まれ、続くように加山さんが言った。

「マネージャー業は家族以上にタレントを大切に扱わなきゃならない大変な仕事だから、

あなたの希望の職種じゃないかもしれない、一方的にお願いできないのは、

わかっています。でももし、興味があつたら一度事務所の方に来てもらって、

お話できないかしらっ？」

加山さんは、十五度くらい首を倒し、キリリツとした顔で俺を見た。

「でも、こういう業界でアルバイトとかもしたことないですし、マネージャーとかの仕事なんて何をするのかも全くわからないんですけど」

俺が言うつと、

「初めは、誰もが素人で何もわからんよ、少しずつ覚えていってベテランになる。」

どんな業界でも同じだ。最初は、アシスタントマネージャーからだよ。

あつ、安心してもらうために言うておくが、登戸祐二を担当してもらうわけじゃないから

大丈夫だよ」

と、吉田さんが言い、「えっ？」と俺が顔を引きつらせると、

「祐二は、もし大岡くんが吉田プロに来たら、自分のマネージャーにしてもらおうと、

密かに計画を立てているようだが、それはないから安心したまえ」と、吉田さんは、何かを知っているように、俺に言った。

引きつったままの俺の顔を見て、加山さんが笑った。

「祐二くんね、私たちには何も言わないけど、彼、男の人…んー、そっち系？でしょ？」

祐二くと話しているとわかるし、君のことを話す姿見ててわかるの。

そして、その話、聞いていると、君は祐二くんに興味なし、他に恋人いるんでしょ？

大岡くんには」

するどい観察力の大人二人だった。

そこまで話していると登戸君が戻って来た。

「社長、話してくれたの？ 城くんに！」

クリクリした目で言った。

俺が一度、事務所に出勤くことになったと吉田さんと加山さんが言うこと、

登戸君が、満足そうな笑顔で俺を見た。

その後、いろいろと飲んで食べて、登戸君にいろいろな人を紹介してもらって、そこそこ楽しかったけど、俺は帰りの電車の中で一人、吉田さんと加山さんの名刺を見ながら考えていた。

マネージャーという仕事は大変だろうけど、俺が吉田プロにお世話になりたいと言ったら、

採用されることは百パーセント決まったものだろう。

でも、聖に相談したら間違いなく反対するだろうし、コネで就職したくない、という今までの無意味な意地、だけどその前に、俺を悩ますのは、登戸君への甘えと罪悪感だ。

この先も俺の気持ちは、登戸君へは絶対向かない…なのに、俺は登戸君に甘えている。

自分の優柔不断さにイラつきながら、ダウンのポケットに名刺を入れた。

どうしたらいい…俺。

地元の駅に着き、電車の効き過ぎる暖房で熱った頬を、冷たい風に冷ましてもらいながら、マンションまで歩いた。

あと五日でクリスマススイブを迎える日だった。

第三十話 聖、怒る…

俺は、二日間、聖にも両親にも誰にも言わず、まだ悩んでいた。吉田プロへの就職。

夕食を終えて、十階に戻り、俺と聖はバラエティ番組を見ながら笑っていた。

「あー、オレ、コンビニ行って来る！」

聖が急に言いだした。

「何しに？」

俺の問いに聖は、テレビを指差した。

「これ、買いに。これ食いたい」

画面には、コンビニで売られている今話題の『パンコロリン！』という、まん丸の形で、

モチモチした舌触りのパンとも餅とも言えない、食べ物がCMで流れていた。

「さつき、飯食ったばっかだろ？ それに外、寒みーじゃん」

「夜食だよ、別に城と一緒に行かなくていいよ。オレ一人で行って来るからよ」

「んじゃ、俺の分も買って来てね」

俺が言うと、不機嫌な顔をしつつ、俺のダウンを羽織り始めた。

「なんで俺のダウン着ていくんだよ。自分のがあるだろ？」

「だって、城のダウン、フード付いてるし」

「そうだよ、今だ聖はスキンヘッド。」

寒空には、応える髪型…だ。

「それにさあ、このダウン…城の匂いするしさ〜」
と、言いながら聖は、バタバタと玄関に走って行った。

「えっ？」

どほほほほ、照れるなあ。

俺はデヘデへとクツションを抱きしめて、聖の戻ってくるのを待っていた。

近くのコンビニなので、十分もしないうちに聖はコンビニの袋をぶら下げて帰ってきた。

「お帰り〜」

「……ただいま……っか、これ、なに？」

聖のトーンの落ちた声と共に、吉田さんと加山さんの名刺が俺の目の前に現れた。

「あ……それは……」

ものすごくヤバイ。

ダウンのポケットに入れっぱなしだった……
自分のマヌケさを呪った。

「これ、吉田プロダクションって登戸の事務所だろ？　この吉田って言う人、社長だろ？」

なんで城が持ってたんだよ。いつ会ったんだよ」

聖が俺の前に立ち、ものすごい眼力で見下ろしてくる。
スキンヘッドというスタイルが、凄みを増してみせる。

「おととい、俺、夜出かけただろ？」

「大学の友達とじゃねーのかよ……」

「登戸君の事務所の……忘年会……」

俺は、素直に一昨日の事を話した。

登戸君に誘われてパーティーに行った事、そこでマネージャーの仕事に誘われた事、

全部ちゃんと話した。

「なんでそんな大切なこと、オレに隠すの？　なんで言わねーの？」
俺の話聞き終えた聖が言った。

「登戸君と会ってたし、ここ登戸君の事務所だし…、聖が怒ると思
つて、」

「オレのせいにするなよ！　登戸なんて関係ねーんだよ！　就職の
話だろ！？

オレがどんなに城の就職のこと心配してるかわかってるのかよ！
城がここに就職したいなら、登戸とか関係ねーんだよ…」

涙声で怒鳴る聖の声が、俺に突き刺さってくる。

「ごめん…。俺、悩んでて…。就職見つかったことは嬉しいけど、
登戸君の、」

「だから！　登戸は関係ねーって、さつきから言ってるだろ！
何に悩んでいるのかとか、なんでオレに言わないんだよ！

これからも、ずっと一人で悩んで考えて決めて、オレには何も知
らせないつもりかよ！

そんなにオレ、頼りねーのかよ！　ぜんぜん信用させて無いじゃ
んか、オレ…」

聖はそう言い、うな垂れる俺の頭に、持っていたコンビニの袋を叩
きつけて、玄関に向かった。

「聖！　どこ行くんだよ！」

俺は、玄関まで追いかけて、聖の腕を掴んだが、睨みつけながら俺
を突き飛ばしし出て行った。

突き飛ばされた弾みで俺は、後ろに転び、傘立てに頭をぶつけた。

俺は、しばらくの間、玄関に座り、頭を抱えた。

痛い…ものすごく頭が痛い、それ以上に心が痛い…。

俺はいつも一人で悩む。

「どーしたらいいかな？」って、
どんなことでも普通に、あいつに聞けばいいのに、聞けないんだ。
なんか、カッコつけてるっていうか、恥ずかしいっていうか…
変なプライドみたいなモノが俺の中で膜を貼り付けている。
そして、俺はいつも聖を怒らす。今みたいに。
あいつが流す涙は、いつも俺の所為だ。
全部、俺が悪いんだよ…

玄関に座っていた俺は、リビングに行き、聖の携帯に電話をした。

「あー、最悪…」

聖の携帯の着信音が、ダイニングの椅子に掛けられている聖のダウンの中から聞こえてきた。

「あいつ、携帯持ってたねーよ。俺のダウン着たままだ…」

俺の溜息は重く、付けっぱなしのテレビの音も耳に入ってこなかった。

ソファに座り、聖の帰りを待っていたが、戻って来ない。
十一時の時報を知らせる音に気づき、テレビを消した。
そして、あいつは、十二時になっても帰って来なかった。

第三十一話 登戸君の涙（前書き）

この回は、登戸君目線で書いています。

第三十一話 登戸君の涙

年明けから克蘭クイン予定の映画で、主演が決まっている僕は、その日、吉田社長とマネージャーと映画監督と数人の関係者で食事をしていた。

僕は、ここ二日、気分がハイだ！

映画の主演もそうだけど、それよりも！城くんが良い返事をくれたら、吉田プロに来るかもしれない。

そう考えると、すごく楽しくて、映画関係者にも愛想を振りまいて好感度が上がりっぱなしだった。

お店から出たのは、十二時近かった。

僕は、マネージャーと一緒に、運転手さん付きの社長の車に乗り、マンションまで送ってもらったことになった。

「初の主演映画だ。気を抜かずにやれよ」
社長に発破を掛けられ、

「がんばります！！」
と、やる気満々を見せた。

「これで城くんが事務所に来ればなあ、僕、もっと張り切れんだけどなあ」

「そればかりは彼に決めてもらわないとな。吉田プロはいつでも歓迎なんだがなっ！」

社長が言ったけど、本当にそうなんだよ、城くんの気持ちひとつつてやつだ。

そんな話をしていると、僕のマンション近くの大通りの交差点で信号待ちのため、車が止まった。

「ケンカですかねえ、あれ」

助手席のマネージャーが、言った。

窓の外に目を向けると、一人の人を、三人の男が殴ったり蹴ったりしていた。

殴られている人は、殴り返さず、されるがままみたいな感じだった。

「げー、こわ〜」

僕はそう言いながら、その様子を見てみると、車が走り出した。

「……待って！！ 待って！ 車止めて！ あの人の、僕の知ってる人だよ！」

大きな声で言った僕に驚いた社長が、運転手さんに車を止めるように指示した。

「聖さんだ！ あの殴られてる人、聖さん！」

憎つくきライバル聖のスキンヘッドが、妙に光っていた。

僕が車を降りようとしたら、社長に止められた。

「祐二はここにいなさい。おまえは、行ったらだめだ」

社長は、マネージャーと運転手さんに聖の所に行くように言った。

社長の運転手さんは、百九十センチの大柄で、学生のころから柔道をしている。

当たり前だが、ひ弱な僕が行くより、ずっといい。

マネージャーと運転手さんが聖のところに行き、殴っていた三人から聖を引き離すと、三人がなにか大きな声で言っていて、運転手さんがそいつを投げ飛ばしていた。

車の後ろ窓から見ていた僕は…運転手さんを少しカッコイイと思っ
てしまった…

二人は、聖を抱えるように連れて来て車の中に乗せ、運転手さんは急いでその場から離れるように、車を走らせた。

「やっぱり聖さんだ。大丈夫！？ どうして殴られてたの？」

聖に言っても、酔っているみたいで、殴られた痛さもあるようで、何も言わなくて、目も開けていなかった。

たぶん、僕のことわかっていない。

ティッシュで傷口の血を拭いていると、社長に「誰なんだ？この子は」と訊かれた。

答えるのを少しためらったけど、僕は言った。

「城……くんの……、恋人……」

「……そうか。……彼の家はどこだ？送ってやれ。……城くんと住んでるのか？」

「うん……」

「そうか。祐二、城くんに電話をしなさい」

社長に言われ、僕が城くんに電話をかけ、聖がケンカをしていたことと怪我をしていることを伝えると、電話の向こうの城くんが、ものすごく心配しているのがわかった。

城くんのマンションに行くと、城くんはマンションの前で待っていた。たぶん、電話を切ったあとすぐに下に下りてきて、僕たちの来るのを待っていたんだと思う。

僕が車から降りて、マネージャーと一緒に聖を城くんに預けると、城くんの手がものすごく冷たかった。

氷のように冷たかった。

城くんは、何度もお礼を言い、頭を下げていた。

そして、聖をしっかり抱き抱えながら、城くんが社長に言った。

「吉田さん、本当にありがとうございます。あと、こんな時に申し訳ありませんが、

就職の話は、無かったことにしていただけますか？

本当に勝手言っただけ申し訳ありません」

そう言い、頭を下げる城くんに、

「まあ、その話は今日はいい。早く彼の手当てをしてあげなさい。君も風邪をひくから、早く中に入りなさい」と、社長がやさしく言った。

城くんと聖がマンションの中に入るのを見届け、車が走り出した。僕は黙っていた。喋ると涙が出そうだった。

「あの二人の間に割り込むのは、ちと、無理だな？ 祐二？」
社長に言われた。

「……し、つてたんです、か？」
「まあな。泣きたきゃ泣いていいぞ？ 年明けまでもう仕事は入っていない。」

明日、顔が腫れてても、誰も何も言わん」
社長が僕の頭を撫でてくれた。
その手が暖かくて、僕は涙を、我慢できなくて、我慢しきれなくて泣いてしまった。

「僕…わかってたけど…初めて、城くんに会ったときから…わかってたけど、

城くんには、聖さんがいて…わかってた…けど…少しでも、だけど…少しでも、

じよ、城、くんの…そばにいた、くて。…僕、女に生まれればよかったです…」

「女…か？」

「うん…。…女に生まれてたら、城くんのこと、…もっと、早く、あきらめられてた…」

「どうして？ 女なら城くんの恋人になれてたかもしれないじゃないか？」

「違う…よ…、城くんの好きなのは、聖さん。聖さんは…男だ。僕

も男なのに…

僕、女だったら…」

泣くことを止められないのに、僕は社長に話していた。

「もう、いい。何も話すな。涙が無くなるまで泣いてる。泣け泣け」

社長は、また僕の頭に手を置いてポンポン叩きまくった。

マネージャーは助手席からティッシュを箱ごとくれて、

なぜか、運転手席からも鼻をすする音が、聞こえたような…気がした。

第三十二話 全て俺が悪い！

十二時を過ぎても聖が帰って来なくて、心配になり、とりあえず外に探しに行こうと

ジャケットに手をかけたとき、登戸君から電話が来た。

事情を聞いた俺は、ジャケットも着ずにそのまま、すぐエントランスに下りて行った。

酔ってケンカして怪我しているという聖が、すごく心配だった。

偶然見つけてくれて助けてくれた登戸君。

俺は、聖だけじゃなく、登戸君にも迷惑を掛けている…
申し訳なくて、自分を責めるしかなかった。

マンションの外で車を待っていると、黒塗りのスモークガラスの車が止まった。

顔が腫れて、血が流れている聖を見た時、足が震えた。

昔の聖は、ケンカをしてもすり傷程度で、誰にも負けなかったのに、こんな聖は初めて見た。

聖を担ぐようにして、部屋に戻り、ベッドに寝かせた。

いつもの綺麗な顔が、手を出すことが出来ず、打たれるだけ打たれたボクサーのようだった。

そんな姿の聖に、俺は、ごめんとだけしか言えなくて、何度も謝りながら、体を拭いてやり、傷の手当てをした。

深夜二時を回っていたけど、登戸君にお礼と謝罪のメールを入れた。明日見てくれるだろうと思っていたが、メールの送信ボタンを押して、しばらくすると、携帯がかかってきた。

俺は、すぐに出た。

「ごめん、もしかして、メールの着信音で起しちゃった？」

俺が言うと、登戸君は「まだ起きてたから、大丈夫だよ」と、言うてくれたけど、

元気な声だったけど、鼻がつまっているような…

泣いていたことがわかる。

俺は、それには振れず、登戸君に言った。

「聖のこと、本当にありがとう。登戸君がいて助かったよ…」

登戸君は、うん…とだけ言って、少し二人で沈黙した。

「電話でこんなこと言うのは卑怯かもしれないけど…俺、登戸君とは、もう会わない。

登戸君と俺はただの友達だけど、俺には聖がいるし、聖だけを愛しているから…。」

「ごめん…ごめん」

俺は、横で眠る聖の頬を擦りながら、登戸君に言った。

「事務所の件は、社長さんにちゃんとお詫びに行く。

今日のこともお礼を言わなきゃならないし…。」。登戸君？ 聞こえてる？」

何も言わない登戸君に訊くと、彼は、

「うん、聞こえてるから…大丈夫だよ」

と、すごく小さな声で答えた。

「登戸君？ ありがとう、俺のこと好きでいてくれて…ありがとう」
そう言った俺に、登戸君は、

「…うん。…僕、もう寝るから…おや、おやすみ！」

と、言ったあと、すぐに電話を切った。

だけど、電話を切る間に、「ズズズウウウ」という、鼻をすす

る音が聞こえた。

ごめん…登戸君…ほんとうにごめんなさい…

翌日、目を覚ますと、隣にいるはずの聖がいなかった。

時計に目を向けると、昼を回っていた。

朝方まで、冷たいタオルで、腫れている聖の顔を冷やしながら様子を見てて、そのまま俺は、いつの間にか寝てしまっていた。

部屋中を探したが、聖はいない。

十五階のおふくろのところに電話をしたけど、来ていないと言われた俺の頭の中は、

「家出!?!」という文字が横切り、慌てた。

「け、携帯は!?! 聖の携帯!」

すぐに聖の携帯に電話をした。

呼び出し音が鳴り、少しホッとしたが、出てくれるとは限らない。

俺が、出てくれ! と、願う間もなく、ツーコールで出た。

それも、明るい声だ…

「城! おっはよ。今ごろ起きたのか?」

「どこに居るんだよ!!! どこで何やってんだよ!!!」

聖と違い、俺は必死の声だ。

「はあ? 今、カフェでランチ!」

のん気に言いやがった…。

「…カフェ…? ランチ…?」

「Pineだよ。サンドイッチ屋。城も来る?」

「今行く！ 待ってる！」

俺は、携帯を切り、すぐに着替えて家を出た。

『Pine』は、お洒落なサンドイッチ専門のカフェで、聖と俺がよく行っている店だ。

車を十分ほど走らせ、店に着くと、テラス席で聖が手を振っていた。笑っているのかもしれないが、顔が腫れているので…怖い。

よくそんな顔で街を歩けるな…、女性客が多いこの店で、浮きまくっている。

「聖…」

聖がいたことにホツとして、俺は、テーブルの横にたたずんでいた。「なに突っ立ってんだよ、座れよ。っーか、口があんまり開かないから、これ食えない」

そう言い、アボカドシュリンプサンドを持って笑っているが、やっぱり顔が…怖い。

俺は、椅子に座り、聖を真っ直ぐに見た。

「聖、ごめん…」

「ん？ …なにについて謝ってるの？」

「え？」

「おまえが、オレに内緒で登戸と会ったり、仕事紹介してもらったり、

就職で悩んでいる事をぜんぜんオレに相談しなかったり、

それに怒ったオレが、おまえのせいで、酒がぶ飲みして酔っ払って、

道端でケンカ仕掛けて、ぜんぜん力が入らなくて反対にオレがやられちゃって、

おまえのせいで、顔こんななっちゃって、

おまえのせいで、せつかくのサンドイッチ食えないし、って、どれについて謝ってるの？」

と、聖は、長々と喋ってくれた。

「……全部…、全部だ。それ以外のことも、今までのことも全部謝る。」

「ごめんなさい！ 許してくれ、じゃない、許してください！」
俺は、思い切り頭を下げた。

「どーしよーかなあ〜」

「ええっ!？」

聖が軽い調子で言い、俺が顔を上げると、笑いながら、

「城くんさあ〜、オレ、まだ顔痛いんだよね〜」

と言った。

「家に戻ったら、俺がタオルで冷やしてやる！」

「このサンドイッチ食べないし〜」

「俺が代わりに食べてやる！」

「でも、オレ腹減ってんだけど？」

「家に帰ったら、俺がお粥作ってやる！」

調子に乗って聖は言った。

「あつ、殴られた時にピアスの片方落つことしちゃったみたい。お気に入りに入ってたのに！」

「俺が新しいの買ってやる！」

「そうだ！ オレ、クリスマスプレゼントに『ケイサービス』のシルバーのネックレスが

ほしいなあ〜」

ジッと俺を見ている…。

『ケイサービス』とは、メンズ専門のシルバーアクセサリーショップで、かわいくないお値段で提供している。

本人にはまだ言っていないが、聖へのクリスマスプレゼントは『ケイサービス』で購入済みだ。

だけど、シルバーネックレスではなく、小指にはめる指輪だ。

三万八千円もした！

俺は、恐る恐る訊いた。

「そのネックレス…いくら…くらいかな？」

「ん？ 七万八千円だったっけかなあ〜？」

聖は普通に言ってくれるが、俺の顔は青くなるばかりだ…
高い、高すぎる…

「指輪…とかなんて、どーかな？」

とりあえず、打診してみた。

「要らね。だってオレ、ネックレスがほしいも〜ん」

「……わかった。じゃ、明日一緒に買いに行こう…」

「よっしゃ！ やったね！」

うれしそうな顔をしゃがる…

だけど、俺は言った。

「あのさあ、聖が昨日着てた俺のダウン…。ボロボロになってても着れないんだけど。

背中の部分切れて、羽とか出ちゃってるし。弁償して？」

「え…？」

「あのダウン、八万くらいしたんだよ？ ブランドだし、中はちゃんと羽が入ってるし、

フードの毛の部分もイミテーションじゃなくて、本物のうさぎちゃんだし。弁償しろよ」

俺はアボカドシュリンプサンドを食べながら言った。

今度は聖が青くなっている…たぶん。

顔が青く腫れてるから、よくわからないけど。

「な、なんでオレが弁償すんだよ」

「だって、勝手に着て出て行ったの、聖だろ？」

「そーだけど、そーだけど…八万…？」
本当はセールで半額だったけど、元の値段は八万円だ！

結局、ネックレスとダウンの取引は、チャラになった。

マンションに戻り、俺が聖のお粥を作っていると、吉田社長から電話が来た。

「明日、城さんに予定がなかったら、事務所に来てほしいんだが」と言われ、就職に関してのお詫びと、聖のことのお礼をしようと思っ
っていたから、

「伺います」と言って電話を切った。

第三十三話 ありがとう、聖、登戸君

「えっ？ 聖がですか？」

俺は吉田プロダクションの社長室に通され、吉田さんと会っていた。

出かける仕度をしているとき、聖に「イブなのに行くんだよ」と訊かれ、

正直に答えると、「いつてらっしゃい。でも夜は、オレと飯だけ？」

と、念を押されたが、笑顔で見送ってくれた。

その聖が、吉田社長を訪ねて来たと聞いて、俺は驚いていた。

吉田さんが話してくれた。

昨日の午前中に登戸君と一緒に事務所にやって来て、聖は、吉田さんにお礼を言い、

そして、俺の就職もお願いしていた。

俺が眠っている間に、登戸くんに連絡し、事務所に連れて来てもらったらしい。

聖は、登戸君に助けられたこともわかっていたし、俺が吉田さんに就職を断ったときも、

怪我の手当てをしているときも、登戸君と電話で話していた内容も、全部聞いていたらしい。

目も開けられず、体も動かなかったけど、意識はちゃんとあったよ。うだ。

「聖くんがね、大岡城の就職の件をもう一度考えていただけませんか。祐二も一緒だね、頭下げて。」

一人は殴られてボコボコの腫れた顔

で、

一人は泣き明かして腫れた顔でね、あははは〜。

吉田プロダクションに来るか来ないかは、城くん次第だな？ 私の方は君の返事待ちだ」

吉田さんにそう言われ、俺は「よろしくお願いします」と、頭を下げた。

聖と登戸君が作ってくれた、これからの俺の道だった。

一応、正社員として採用する流れは、ちゃんと踏んで行こうと、吉田さんに言われ、俺は年が明けてから、「吉田プロダクション」に面接に来ることを約束し、マンションに帰った。

聖は、少し腫れの収まった顔でキッチンに立っていた。

本当はイブの今日、レストランを予約しており、二人で食事に行く予定だったが、聖のあの顔でレストランに行ったら、せつかくのクリスマスディナーを楽しむ他のカップルに迷惑がかかる、それも俺ら男二人のカップルだし…

レストランはキャンセルして、二人で家ご飯を楽しむことにした。パリに留学していた時に覚えたという「本場フランス料理」をごちそうしてくれるという聖は、下ごしらえの最中だった。

「ただいま」

「お帰り…」

シンク前で振り向かずに言う聖の後に回り、俺は聖を抱きしめた。

「あんだよ、離れるよ！ 包丁握ってんだぞ、あぶねーよ」

「さんきゅう、な、聖…」

「何がだよ！ いいから離れてあっち行ってるよ、邪魔だよ、城」

「いいじゃん、いいじゃん」

俺は、そう言い、後から抱きしめたまま、聖のジャージズボンに手を突っ込み、

「中々いいものをお持ちで、聖ちゃん」

と、耳元で囁くと、聖は、

「やめろって！ 弄くんよ、オレの！ さわんなよ！！」

聖が少し顔を俺に向け、言った。

「……うん、じゃあ、あっち行ってる……」

顔の腫れはひいて来たとはいえ、やっぱり、まだあの顔では……萎える。

俺は、聖から体を放し、素直にリビングに行った。

「……ああ？ あんだよ……城、もう終わりかよ……」

キッチンから出た俺には、ボソボソと言った聖の声は、俺には聞こえなかった。

俺は、いろいろな人に頼って生きている。

誰かに頼らなければ、生きていけない。

聖、両親、友達、社会に出れば、その時々に出会った人たちに、

俺はまた何かを頼ってしまうかもしれない。

だけど、それでいいと思った。

そして、もし、それ以上に、誰かが俺を頼ってくるならば、

しっかりとそれを受けとめてあげられるような人間になろうと思った。

ただ、今の俺の場合…

「城にくっ付くんじゃねー！ 登戸！！」

「いいだろ〜！ 聖さんに言われる筋合いはないね！」

「あああ？ オレには言える筋合いがあんだよ！ テメエ、このやる！」

「あつ、何すんだよ！ 痛い！ あ〜ん、城く〜ん、聖さんが蹴ったあ」

いつもの面子、健児たちと初詣に来ていたが、俺は、縦横神社の賽銭箱の前で、

左に聖、右に登戸君、二人に腕を組まれ挟まれている。

脇を固められ、参拝もできない…。

「拝めないから、二人とも放せよ！」

無理やり二人から逃れ、神様に手を合わせた。

両脇の二人は、ちゃんと拝んでいるのかいないのか、目を瞑り手を合わせている俺の後ろで、

なんかゴチャゴチャやってるし…。

「ほらっ、行くぞ、二人共。後に並んでる人の迷惑になるよ」

そう言うと、また二人は俺にぶら下がるように腕を組んでくる。

今の俺は、誰から頼られるとかじゃなくて、この二人から寄りかかれるだけの人間だ…。

まだまだ…未熟者だあ…。

第三十四話 時間は俺たちをまっではくれない(完)

いくつかの季節が廻る、時間は止まらない。
だけど、俺たちは変わらずに、愛や友情の太い糸で繋がっている。

大学を無事卒業した俺は、吉田プロダクションで働き始めた。

最初は、アイドル・「花巻ぼろん」という、十六歳のかわいい子のアシスタント・マネージャーから始めた。

登戸君が「城くんを、絶対、男のタレントや俳優の担当にしないでね!」と、

社長に、わがままを言ったらしい。

その約束は、今でも守られていて、ぼろんちゃんのアシスタントマネージャーの後に、

マネージャーとして担当になったタレントも十代の女の子のアイドルだった。

そして俺は「カッコよすぎるマネージャー」と言われ、少々話題になっっている。

でへっ!

聖は、ファッションブランド「ミピコ・ジョンジョン」で、デザイナーナリーになり、

次のシーズンコレクションのメンズ部門の広告塔に、登戸君を起用するらしい。

健児は小さな広告代理店で働いているが、ある仕事を堺に会社内の信用を一気に得た。

それは、「登戸祐二」を使ったCMだ。

大手広告代理店でさえ、人気独占中の「登戸祐二」へのオフアが難

しいとされている中、健児は、コネてコネてコネまくり、登戸君との仕事をゲットした。

IT企業に行った石田は、相変わらずいろいろな趣味に手を出しながらも、

知識や人脈の幅を広げている。

最近では、『登戸君のステキ生活』というブログを個人的に作り、吉田プロにも登戸君にも公認してもらい、登戸君の日々を綴ったり、日常の登戸君の写真を載せ、登戸君本人も書き込みをするということとで、ブログアクセストップを獲得している。あくまでも、石田の個人的ブログである。

女子高の体育教師になった相川は、「先生、うざい」とか「ランニング超〜ダサア〜」と最初の頃言われていたが、「うっさい！このクソ女子学生！」などと、教師としては、どうかと思うような態度で生徒に接し、相川が見せるSな部分にハマる生徒が多く出てきて、じわじわ学内で人気者先生になっていたが、数ヶ月前から、その人気が不動のものになっている。

「相川先生は、登戸祐二と超親しいお友達」ということがバレたからだ。

「モテまくりだよ、オレ」と、相川は調子に乗っている。

日野は、法律事務所に籍を置き、一生懸命働いている。

そして、雅との結婚資金を貯めるため、ケチケチ男になっていた。学生時代はブランドもので身を固めていたのに、今ではスーパー・サトーゴーカドールの衣料で身を包んでいる。

「日野くんは、なんでも着こなしちゃう、やっぱり世界で一番力ツコイイ！」とは、

雅の弁だが、確かにトータルコーデイネイト五千円以下でも、日野が着ると高そうに見える。

そんな日野は、登戸君の紹介で、いくつかの会社の顧問弁護士の仕事を自分の勤める事務所に任せてもらっている。

俺たちの合言葉は「登戸祐二のマンションに足を向けて寝るな!」だった。

たびたび、聖と俺宛に送られてくる麻衣子からの写真付きポストカード。

「うちの子、ただいま成長中。三つになりました」

そう綴られた写真には、千歳飴を持って着物を着たかわいい女の子が写っている。

そのポストカードが届いてから数カ月後……

「おまえ、あっちの隅に行けよな! なに真ん中に写ろうとしてんだよ!」

「うるさい! 芸能人は目立って何ぼなんだよ!」

「じめじめしてんのに、テメエの顔見ると、もっとじめじめになんだよ!」

「僕は、さわやか青年が売りなんだから、じめじめしてるわけないだろ!」

「オレの城に触んなくて言うてだろーが! 登戸!」

「あゝん、痛あゝい。城くーん、聖さんが打つ!」

俺は聖と登戸君に挟まれながら、教会前の階段に立ち、集合写真を

撮っていた。

「あー、ちよつと、その君たち、動かないでくれるかな？

笑顔のまま笑顔のまま」お願いします」

カメラマンさんに言われた。

「モーーーっ！ 城お兄ちゃん、聖、登戸君！

私の結婚式なんだから大人しくしててよ！！」

ええええ！？ 俺も？ 俺なにもしていないし、両脇がもめているだけだ。

一番前で白いウエディングドレスを着た雅が振り向き、怒鳴ると二人は一旦静かになった。

「僕もウエディングドレス着て、城くんの横に並びたいなあ」

左側の登戸君がカメラを見たまま、前を向いて言った。

「オレ、ウエディングドレスは、城の好み聞いてから、自分の手作りにしよう」

右側の聖も前を向いたまま言う。

俺は右を向き、今だスキンヘッドの聖がドレスを着たところを想像し、思わず言った。

「そろそろ髪の毛伸ばせば？」

「ああ？ 楽なんだよ、これ。シャンプーもコンディショナーも使わないから経済的だろ？」

うん…、確かにシャンプーは俺しか使っていない。

「城くん、僕も雅ちゃんみたいに June bride がいいなあ」

「オレ、じめじめしてない秋晴れの日がいいから、城、秋にしようぜ！」

「六月の花嫁は幸せになれるんだもん」

「けっ、テメエは社長んとこの運転手を仲良くやってりゃいいだ

ろが！」

そうなんだよ、登戸君は変わらず俺にくっついてくるけど、1年ほど前から、

吉田社長の運転手の大門地徳輔さん・三十五歳と急接近なんだよなあ。

プライベートで、二人で飯行ってるみたいだし。

俺がチロッと登戸君を見たら、登戸君はすかさず視線を俺に向け、

「ふふっ！ 城くん」と、俺の腕にしがみ付いた。

「あああ！ 登戸！ 城はオレのだ！」

聖が抱きついてきた。

「……あゝ、きみたち、」

カメラマンさんが、再び注意しようとしたが、雅の怒りが爆発し、

「城お兄ちゃんはそのこにいて！ 登戸君は、こつち！」

と言い、登戸君を二段目の一番右端に連れて行った。

「よし！ よくやった雅！」

聖が褒めたが、

「聖は、こつちよ！ たく人の邪魔ばかりして！！」

雅はブチブチ言いながら聖の手を引いて、最前列の左端に移動させた。

「すみませ〜ん、みなさん。じゃ、カメラマンさんお願いします〜」

と、笑顔に戻った雅の合図で写真撮影は終了した。

その後の披露宴も二次会も無事に終わり、俺たちはマンションに戻った。

「どうした？ 着替えないの？」

帰って来てから「疲れたあゝ」とソファにひっくり返っている聖に、

俺は着替えながら訊いた。

「ん？ 着替える…。なんかさあ、大切な妹が嫁に行くっていうのも、

ちよつと淋しいなあ、なんてね？」

聖は、体を起こし溜息をついた。

俺は、ボタンの外しかけのシャツを着たまま、聖の横に腰掛け、聖を引き寄せた。

「雅ちゃんがお嫁に行っても、聖の妹には変わりないよ。

会えば、いつものように、「聖！」って駆け寄ってくるだろうし、雅ちゃんは、いつまでもおまえの妹だ」

「うん…、そうだね。それに、相手が日野でよかったと思うし」

「雅ちゃん、きつとしあわせになるよ。だんなは日野だよ？」

あいつの雅ちゃんに対する真剣さ、俺らずっと見てきたしな」

「うん…、…結婚かあ…」

聖が、俺の背中に腕を回し抱きしめ、俺も力強く抱きしめ返した。

「聖…？」

「ん？」

「俺たちはさあ、結婚しましたーとか、子供ができましたーとか、そういう報告は、

誰にもできないけど、俺たち二人のしあわせは、俺たちだけで作っていけるし、

周りのみんなもそれを見て、「あいつらマジしあわせそーでうらやましい」って

言ってもらえればいい」

「うん。オレ、城と出会ったときから、ずっと今もしあわせだぜ」

「ひじりいいいいいい」

俺は、聖の名を叫びながら、聖を押し倒し、スキンヘッドをクリック

りしながら、言った。

「髪かみの毛け、そろそろ、伸ばのははそうじよ…？」

第三十四話 時間は俺たちをまっではくれない(完) (後書き)

読んで頂きありがとうございます。

一応完結です。

まだ未定ですが「登戸君」で番外を書こうかな、と考えています。締りのない文章力ですが、その時また読んでいただけるとありがたいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2824i/>

大岡城と崎田聖

2010年10月10日10時42分発行